

〈財団法人〉水野スポーツ振興会
2000年度 研究助成金 研究成果報告書

スポーツ文化とクレオール

研究代表者

竹 谷 和 之

(神戸市外国語大学)

2001年3月

目 次

はしがき	1
------	---

■ 第 1 部 スポーツ史学会第14回大会シンポジウム再録

「21世紀のスポーツ文化を考える—ジャック・マイヨールの世界を通して—」	3
シンポジスト　　ジャック・マイヨール	
今福 龍太	
稲垣 正浩	
司 会　　竹谷 和之	
通 訳　　リー・トンプソン	
参考資料（シンポジウム発表抄録）	26

■ 第 2 部 シンポジウムを終えて

現代スポーツを想う	ジャック・マイヨール	31
アフター・シンポジウム	今福 龍太	32
『21世紀のスポーツ文化を考える』	稲垣 正浩	33
—アフター・シンポジウム・断想—		
シンポジウムからの連想	竹谷 和之	41
「潜る人」、「走る人」、そして「転ぶ人」	高木 勇夫	44

■ 第 3 部 個別論文

エコロジーとスポーツ ～動物の共生から見たスポーツ史～	池田 恵子	47
21世紀におけるオリンピックの諸相 ～ドーピング問題と発展途上国からの接近～	金田 英子	55
新たなるスポーツ文化にむけて	多賀谷 真吾	63

はしがき

この小冊子は2000年度財団法人水野スポーツ振興会研究助成金による研究プロジェクト「スポーツ文化とクレオール」（研究代表：竹谷和之）の成果をまとめた報告書である。

本研究のプロジェクトと関連して、「21世紀のスポーツ文化を考える ジャック・マイヨールの世界を通してー」と題するスポーツ史学会第14回大会シンポジウムが2000年11月26日神戸市外国語大学において開催された。

スポーツ史学会においてなぜ未来展望を議論するのかといういさきか唐突ともとれるテーマではあったが、福原の指摘「スポーツの後近代（三省堂）」を待つまでもなく、いまやスポーツ文化の行方が注目されるべき時局に立っていると考える。そのキーワードとして「クレオール」を念頭に置いた。この語の説明は他の多くの文献に譲るとして、「近代スポーツ」のもつ限界を打破する、さらには新しい文化生成の一つが「クレオール」にあると思われるからである。しかし単純に公式化できるかといえばそう簡単にはいかない。スポーツ分野において注目はされているがその方法論がまだ確立されているとは言い難いのである。そこで「クレオール」の先端的研究者・実践者を招き議論した。その切り口としてジャック・マイヨールを選択したのである。

ジャック・マイヨールのダイビング（閉鎖潜水）技術とその思想には今までの「近代スポーツ」とはことなる内容が含まれる。この独特の身体技法は東洋では普通に使用されている技法であるが、それを駆使して世界新記録を目指し、そして自然との融合を図り、ついには「近代」批判にまで進展させている。現在流行している自然との「共生」を40年前から実践してきているのである。ここにこそ「クレオール」の萌芽が確認できるのである。

本報告書は、第1部 スポーツ史学会第14回大会シンポジウム再録、第2部 シンポジウムを終えて、第3部 個別論文より構成されている。このようにして「スポーツ文化とクレオール」思考の一断面を浮き彫りにできるのではないかと考えている。

手探り状態で始まったこの研究はまだまだ検討の余地があるが、これを機会に多くの研究が進展することを願ってやまない。

最後にシンポジウムに賛同して参加していただいた各シンポジストの皆さん、学会運営に忌憚ない意見をいただいた事務局、個別論文を投じてくださった研究会のメンバーの方々、そしてこの研究プロジェクトを支えてくださった財團法人水野スポーツ振興会をはじめとする関係各位に心から敬意を表します。

2001年3月

研究代表 竹谷 和之（神戸市外国語大学）
池田 恵子（山口大学）
福原 正浩（日本体育大学）
金田 英子（長崎大学）
高木 力夫（名古屋工業大学）
多賀谷真吾（大阪大学大学院）
船井 順則（市船学園短期大学）
松本 芳明（大阪学院大学）
三井 悅子（福山女学院大学）

第 1 部

スポーツ史学会第 14 回大会

大会シンポジウム再録

21世紀のスポーツ文化を考える —ジャック・マイヨールの世界を通して—

シンポジスト	ジャック・マイヨール
	今福 龍太
	稻垣 正浩
司 会	竹谷 和之
通 訳	リー・トンプソン

スポーツ史学会第14回大会シンポジウム再録
(2009年11月26日、神戸市外国語大学大ホール)

竹谷 では、スポーツ史学会第14回大会シンポジウムを始めます。本日のテーマは『21世紀のスポーツ文化を考える—ジャック・マイヨールの世界を通して—』です。

このシンポジウムの一番最初に、日本体育大学大学院博士課程の安則賀香さんに海の中をイメージしたダンスを披露していただきます。このパフォーマンスは昨日思いついたもので、無理を言ってやっていただくことになりました。どうぞお願ひいたします。

(ダンス)

竹谷 どうもありがとうございました。素晴らしいパフォーマンスにもう一度拍手をお願い致します。海の中のイメージを発現していただきました。

先ほど、総合司会の山田先生の方からも紹介していただきましたがもう少し詳しく、シンポジストのみなさんをご紹介したいと思います。ジャックマイヨールさんはもう説明する必要もないと思いますけれども、映画『グランブルー』の主人公のモデルでもあります。素馨で100メートルへ到達した最初の人物です。潜る度に、潜水科学を書き換えねばならぬほどダイビングをされました。最近は水中考古学に興味をもたれ、沖縄与那国島の海底遺跡の調査もされています。

次に、今福龍太さん。札幌大学教授で文化人類学を専攻されています。メキシコやアメリカのチキサスなどに非定性的批評活動ということでいろいろ場所をかえて研究活動をされています。とくにご著書の『クレオール主義』『スポーツの汀』は私達にとっても大きな衝撃でした。その他中南米のサッカーや論議なども斬

新な切り口で捉えられております。

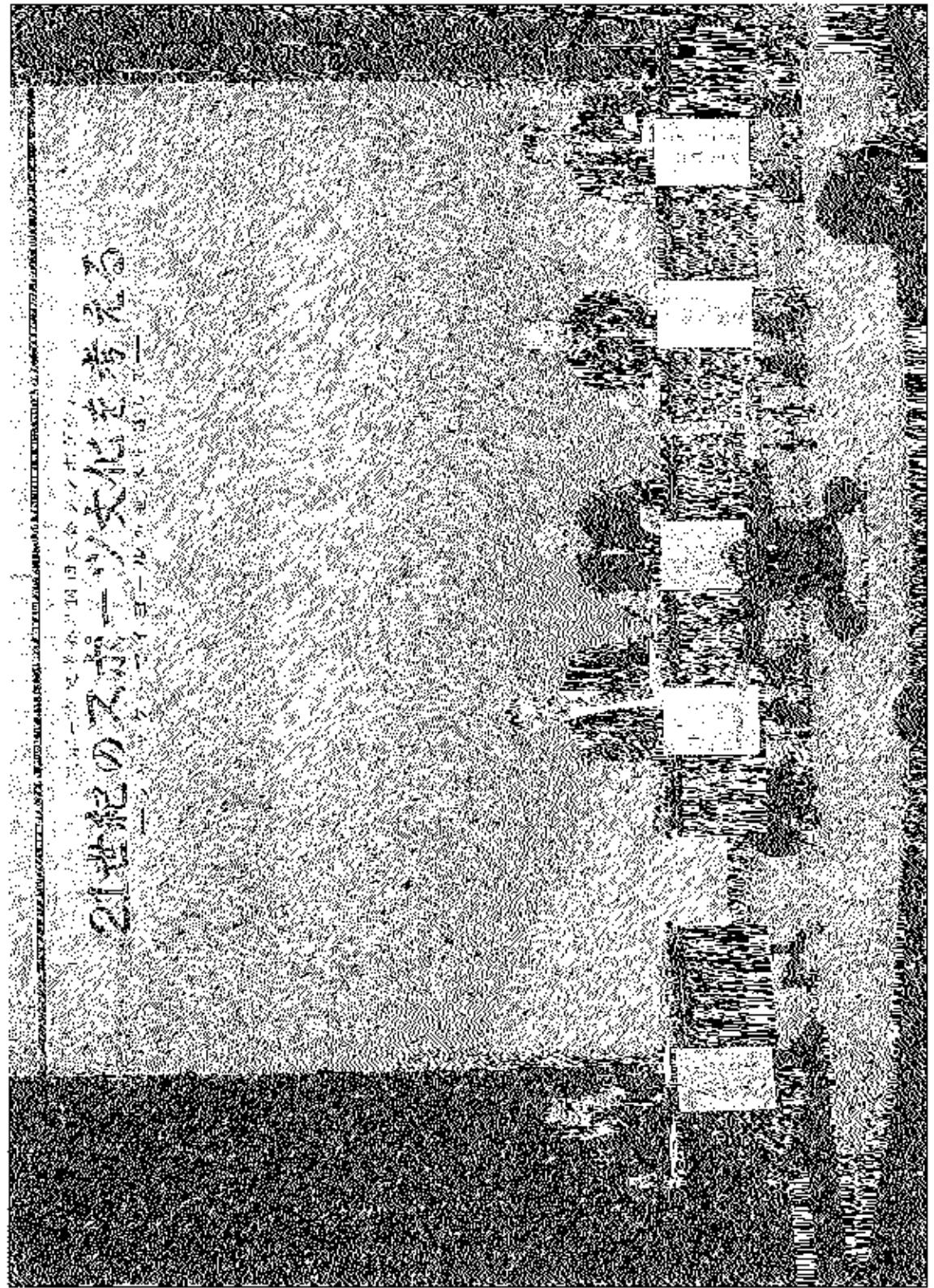
それから、今福さんの右隣りは日本体育大学大学院教授の稻垣正浩さんです。スポーツ文化をみる新たな視点として前近代・近代・後近代という時代区分を用いて独自の論を展開されています。そして文学にみるスポーツもご研究されています。

今回はこの3人のシンポジストのみなさんとそれから通訳として大阪学院大学助教授のリー・トンプソンさんにお手伝いしていただきます。リー・トンプソンさんは社会学がご専門で相撲の近代化、つまり日本の大相撲の近代化を研究されています。よろしくお願いいたします。

ではまず初めにシンポジウムの主旨説明を簡単にしたいと思います。スポーツと申しますと皆さんご存じのようにオリンピックに代表されるようなスポーツが一般的でございます。そもそもこのようなスポーツの前身はすべて地域や共同体、それからまた民族に共有されているスポーツがありました。この閉ざされた社会の中からスポーツが徐々に世界に普及していく過程で、削られたり変更を余儀なくされたりしました。また植民地支配の一つの手段として持ち込まれ、現地の人々にも普及してまいりました。しかし、前近代の身体から開放された身体はまた一方で「近代」というシステム、近代スポーツというもので拘束されるようになります。よかれと思ってやってきたことに矛盾が生じている。例えば、ドーピング問題はその好例だと思います。過剰な競争原理というものは身体を資本化し、乱開発しようとしています。

しかし、この反作用として例えばニュースポーツというものが出現してきています。これは隅に追いやられた、または新たな価値といったものに焦点が当てら

「海の市」



れています。現在、さまざまなニューなスポーツが、またはスポーツらしきものが現前しています。で、この中の一つに私はダイビング、特にジャックさんのダイビングがあると考えております。ジャックさんは多くの近代スポーツにみられる身体レベルを高めて最高の結果を出すのではなくて、できるだけ身体レベルを下げる、心臓のたとえば拍動、それをも下げて新記録を目指すということをなさいました。つまり、身体の使い方が今までとは全く逆になると考えます。そうしますと、この身体の使い方、あるいはニュースポーツの使い方と言いましょうか、そのようなものとの接点がにわかに浮上してきます。そして我々が共有できるのではないかと思います。この技法は東洋の瞑想系トレーニングによって体得されたものと聞いております。このようにして近代医学の限界を次々と塗り替えていくその元は自然と一体化するような身体の使い方をします。そしてイルカとの共生はこの身体の使い方の延長であるということです。今回はこのことを御本人のご説明を皆さんとともに聞いてみたいと思います。

では、ジャックさん、これからご発表をお願いします。よろしくお願いします。

ジャック・マイヨール 私は教授ではありません。皆さんに何かを教えたいと思ってここにきているわけではありません。逆に私は学びたいと思っています。毎日、学びたい。新しいことを学びたい。いつも学びたいと思っています。ここはちょっとかしこまった場であります。私はそういう形にはまるようなことは好きではありません。あまり形にこだわってしまうと私達の生活が複雑になってしまいます。形にこだわりますと時間を失うこともあります。しかし、この学会にはお札を申し上げたいと思います。ここに来てからもすでに新しい事の発見がありましたし、この隣に座っている紳士とも仲がよくなりそうな感じです。



ジャック・マイヨール氏

そうして、もう一つお札を言わなければならぬのは隣に座ってるリー・トンプソン。今日は通訳をつとめるリー・トンプソン。リーさんは通訳の専門家ではないということでおいろいろ大変だと思います。そういう専門の通訳というのはお金がかかりますし、この学会にはお金がなさそうです。そして先ほど竹谷先生が私のことを紹介されましたが、そういう専門家がないせいもあって、竹谷先生が私のことをどのように言われたのかよく分からんんです。少しは通訳してもらいましたが、その中にはたぶん間違いもあったんじゃないかなと、ちょっと気になっています。

それで先ほど話したように私達はここで楽しみましょう。英語で言うファンですね、FUNのファン。イルカたちは楽しむのは名人ですので、私もイルカを自分の象徴として選んでます。30分しかないんですけども、自分のことについて話すのはそんなに好きじゃないんですね。人は自分のことについて話すのが好きな傾向にあるのですけれども、私はそうではない。しかし、ちょっとはっきりさせたいところはいくつかあります。

私は子供の時から日本に来ていますが、残念ながら日本語はできません。日本は大好きです。日本人たちは他人に対して想像力を豊かにすることがよくあるようです。私をみなさんほどぞんざいのではありません。皆さんの想像力を刺激したいいくつかの映画があります。

まず、ドキュメンタリー映画では『ガイアシンフォニー』とか『デイス・ウイズ・ジャック』という素晴らしい映画があります。もうひとつ、半分フィクションの映画があります。フランスとアメリカの合作で『ビッグ・ブルー』、『グラン・ブルー』という映画です。この映画は悪い影響を与えたと思います。映画にててくる人物は私の名前で出ているんです。私はそれを許可しましたが、あまりお金にはなりませんでした。このことを笑いますけれども、泣くよりは笑ったほうがいいと思って笑っております。それが…心、間違ったイメージを皆さんに提供してしまった。その映画の影響で今でも人に会うときは「あなた、まだ生きてるんですか。イルカと一緒に海に潜ったままだと思ってました」と言う人もいるんですね。それは笑い話ですけれども。そのような話をしようと思えば、何時間も話ができます。

これからの話はもう少しまじめな話になります。私達が想像するものと目で見るものというのは違う二つの現象ではなくて、同じ現象の二つの違った側面だということです。ここでもう少し、真剣な話をしたいと思います。私はフランス語で考え、英語で話します。私が限界のある五感を通じて世界を、地球を認識しているのです。私達の認識と世界の本当のあり方だというのは別々のものなんです。同じものの二つの側面だということです。ここでマイヤーという人の概念があるんですけれども、そのマイヤーがいう全ては幻想だという考え方方は正しいと思います。私達が見るのはその幻想だと。

また自分に話を戻しますが、人々が想像している私と私の本当の姿というのは実は二つの別々のものだということです。そのことについてエピソードがあります。40年前に私はハリウッドで映画の勉強をしていたときに、ソフィア・ローレンという有名な女優にインタビューをしました。私達二人だけです。そのソフィア・ローレンに聞きました。「ローレンさん、あなたにとってセックス・アピール、性的魅力とは何でしょうか」と。彼女は正直に私に答えたのです。それはですね、「40%は目の前に見えるもの。60%は頭の中で想像するもの」だと。これは私達の日常生活すべてに当てはめることができます。野生動物のことは私達の頭のなかではどのように捉えているかわからないんですねけれども、私達の知っている限りでは人間は想像できる唯一の動物だと。想像するということは人間の特質、これは欠点と言ってもよいかもしれません。いま、私達はいろんなイメージに常に刺激されていますし、イメージは私達を現実から引き離してしまいます。昔は白黒の写真しかありませんでした。現在テレビなどでいろんなイメージを作りあけます。そうしますと、現実とフィクションの区別ができなくなっているわけです。皆さんはこれについてどのように思いますか。

あまり話が哲学的になると遠れてしまいます。時間もあまりないのでポイントだけ述べますが、つまり私達の近代文明はすごく物質的なものになっているのです。私達の近代文明以前にはいろんな文明があって、もっと精神的な文明などがありましたけれども、私達の近代文明が腐敗してゐるんです。何によって腐敗して

いるかというと、まず第一はお金です。昔は金があつたり物々交換がありました。お金・貨幣制度というものは今の社会を腐敗に追い込んでいる。もう一つはイメージです。イメージが増えすぎていることです。これが今日私が言いたいことです。要するに、私達の今の社会を腐敗に追い込んでいるお金とイメージのことなんですね。少し厄介ですが、今のスポーツはやはりテレビの影響によって腐敗しています。

先日行われたオリンピックを私も見ました。選手は一生懸命にがんばっていました。お金はスポーツに悪い影響を与えています。みんなお金の為にスポーツをするようになっています。昔のスポーツはそのようではなかった。昔のスポーツは、例えば宗教の神とかヨガと同じようなものだったのです。勝利第一でやったものではない。金銭欲のみでやっていたのでもない。じゃあ、なぜスポーツをやっていたか。これは身体と精神の贊美のようなものだったわけです。これはギリシャの概念だったと思います。今のスポーツはそれとは違うわけです。いまのスポーツは自己というかエゴのためにやっているわけです。みんなチャンピオンを目指しある金儲けをしたいからテレビの勧誘に乗り、それからスポンサーがつくことによって、それにまた拍車がかけられるのです。そしてそのお金によって考えられないことが起こっています。つまり人は「ざる」をするようになりました。cheatingをするようになりました。例えば身体能力を高めるために様々なことをします。薬に頼ったりする。それは今日のこのシンポジウムの話の中心になるべきです。こういうことを止めさせなければならない。

昔の美術館では自分の作品に署名をしなかった。自分のものだという主張はしなかったのです。これは何かを掉げるものとして作ったものなんです。今はとにかく自分のなまえを広めたい、美術作品に署名して名前を広めようとする。私はよく謝かれます。「あなたはインターネットのウェブサイトありますか」と。私はインターネットのウェブサイトはありません。そのようにして自分の名前を広めたいと思いません。私の名前がインターネットにあるとすれば本の出版、その出版社が載せたりしているかもしれません、私は自分のエゴをなるべく忘れようとしています。そのためには今まで潜ってきました。すべての人間の活動に

ついでに視野に入れておくべきではないかという気がします。以上が私の発表です。

竹谷 ありがとうございます。最後の二つを忘れる、つまり禅とかヨガとかいうものの内面に向かっていくような身体技法の使い方がこれから必要になってくるというお話をいたしました。

では次に今福さんにお願いしたいと思いますが、ちょっと時間の方が少なくて申し訳ありませんが15分程度でお願いしたいと思います。ではお願いいたします。

今福 今のジャックマイヨールさんの話を聞いて、このまま一種の神秘主義モードの語り方で突き進んでもいいかなとも思うんですが、やはりシンボジウム・モードにここで私が戻さないと大変なことになりそうな気もしますので、すこしシンボジウム風の語り口に戻しながら、マイヨールさんの話をできるだけ受けとめて喋りたいと思います。さて、今日のためにいろいろ考えてはきたんですが、昨日マイヨールさんと話しているうちに私自身の事前のプランは全部崩壊しました。今日のトークの簡単なシナリオは、あらためて今朝、昨日マイヨールさんと話したことを自分の中でいろいろ反芻しながら作り直したものでした。さて、昨日初めてマイヨールさんと懇親会の席でお会いしたとき、マイヨールさんは私に非常に唐突で不思議な質問をされました。何となくお互いに直感的な親近性を感じ取ったからかどうかわかりませんが、いきなりあります。『イエティはいると思いますか?』これが初対面の挨拶だったというわけなんです。「最近中国に行って自分はイエティの話をあちこちで聞いたけど、君はイエティっていると思う?」そういうふうに話しかけてきたんですね。こちらもまあ、そういう唐突な質問にも別に驚かない人間なもんですから、すぐにこう答えました。「いるかもしれないし、いないかもしれない。でも少なくとも、私はイエティがいると信じる人間の心は信じられる」と。まあ単純に信じるといえない人間の屁理屈かも知れませんけど。しかしマイヨールさんの答えはたいへん簡潔でした。「イエティはまちがいなくいる。自分はもう人間にあきあきしている。ありとあらゆる悪いことをやりつくした人間のことはもう考えたくもない。だからいまは人間を越える存在にしか自分は興味ない。人間の別の進化の可能性を信じ



今福 健太氏

るしかない」。それはイルカであってもいいわけですが、イニティ=雪男であってもいいというわけですね。こう言われたマイヨールさんの、人間文明というものに対する不信、深い不信と绝望ですね、そしてそこから突き抜けた一種のペシミズムというのでしょうか、それに私は非常に打たれました。

ただ私が驚いたのは、マイヨールさんの答えもさることながら、「イエティがいると思うか」というこの問いかけ自体が、じつは私自身が今日話そうと考えていたことに直接関係していたということです。私は今日のために、イエティが住んでいると言われているヒマラヤの雪山を舞台にした話を用意していました。そしてそのことは、先程テーマとなっていたイメージと現実の問題にも深くかかわる問題でした。

ここから話を少しシンボジウム・モードに移行します。去年の4月の終わりごろから、私はマイヨールさんの嫌っているインターネットの、あるサイトをドキドキしながら毎日チェックしていました。これはマウンテンゾーン・ドット・コムという山登りに関心のある人間ならば非常によく知られた山岳情報専門のホームページです。なぜそのページを毎日チェックしていたかというと、その時期、ヒマラヤ山中で「マロリー・アーヴィング調査遠征隊」がたいへんな発見につながる冒険を行っており、その現場報告が日々このサイトで更新されていたからです。いうまでもなくいまから70数年前の1924年の6月8日に、エベレストの標高8230メートルという高所に設けられた第6キャンプを出て頂上に向かったまま行方不明になって消えてしまった2人のイギリスの登山家がジョージ・マロリーとアンドリュー・アーヴィングでした。昨年組織された「マロリー・アーヴィング調査遠征隊」とは、この2人の行方を調査し、可能ならば遺体・遺品を探索・回収しようという大胆な野望を持った遠征隊だったわけです。彼らは中国側

のルートから北東棧と呼ばれるルートをたどりました。北東棧はエベレストで一番最初にひらかれてマロリーたちが登ったルートなんですが、初登頂はそれから30年近く後の1953年に、よく知られているヒラリー卿とシェルバのテンジンによって南京棧の方から行われて、その後南東棧ルートの方が一般的になりました。これはネパール側のルートですね。しかし、それより30年前に中国側の北東棧からマロリーとアーヴィングが登っていたわけです。しかし、彼らは8230メートルのキャンプまで到達し、そこからいよいよ頂上アタックにむけて登りはじめた姿を下のほうから斜めに目撃もされてるんですが、頂上に到達したかどうか確認されないまま、吹雪のなかに消えてしまい、その後戻って来なかつたわけですね。これは、エベレスト登頂史上最大の謎になっていました。いったい二人に何が起こったのかということです。

これを調査するために一人のドイツ人の25歳の若者が仲間を集め、マロリー・アーヴィング調査隊が組織され、そしてこの調査隊の行動の一部始終がインターネットサイトで毎日写真入りで報告されていたというわけです。最近のヒマラヤ登山隊などの遠征の多くは、ベースキャンプに巨大な装置を持ち込んで、そこからインターネットを通じて日々の情報を流すということをよくするわけですが、この調査隊の場合は、まさに一つの「大発見」を目的として、ホームページに直接その日その日の出来事と謎解きの経過を充実に映像入りで流しているわけで、それじたい興奮させるやり方です。私が毎日ドキドキしながらこのサイトをチェックしていた理由もそこにあって、とりわけ4月の28、29、30日とその報告の文面が明らかに何か特別なものを発見した、発見しかけている、ということを伝えていたんです。そして染の定5月1日、皆さんも新聞報道で大きなニュースとしてお読みになったと思いますが、75年間行方の知れなかったジョージ・マロリーの遺体をこの遠征調査隊がついに発見するわけです。面白いのは、調査隊はじめから、どちらかといえばマロリーではなくアーヴィングの遺体をさがしていたんですね。その方が、発見が早いと考えられていた。というのも、過去にアーヴィングの持っていたピッケルが別の登山隊探検隊によって発見されており、中国登山隊のメンバーが刃を鳥につつかれたアーヴィングらし

き遺体を目撃した情報が伝えられたりしていて、そういう証拠をたどりながら今回の調査隊は遺体がある可能性のもっとも高い場所を探索していたわけなんです。過去の証拠物や目撃情報や登攀ルートの研究が長期間にわたっておこなわれてきたことが今回の調査隊の背景にあったわけですが、ともかくこうした研究と推理の積み重ねの上で最終的に発見したものは、想定されていたアーヴィングの遺体ではなくてなんと近代登山史における傑出した英雄ともいるべきジョージ・マロリーの遺体の方でした。

ジョージ・マロリーは1920年代の西欧においては突出した能力と知性と精神力を持っていました別格の登山家だったわけです。このマロリーが滑落死したとか、そういう可能性についてほとんどの人は信じようとしたかった。今でも誰も信じようとしない、あるいは信じたくない、という心理がはたらくものですから、遠征隊の隊員たちも最初からマロリーの遺体を発見するということはあまり想定していなかったふしがあります。ある意味でマロリーのイメージというのは、滑落死したりアルな遺体というかたちで像が結びうるようなそういうイメージとしてはなかったということですね。しかし、エベレストの山頂付近で消えてしまったことは事実であり、何が起こったかは知りたい。そのためにはアーヴィングの遺体の発見、これが一つの謎を解く鍵になるわけです。アーヴィングというのは非常に若かったんですが、登山経験に関していえばまだ初心者でした。ですからアーヴィングが滑落したことによってマロリーが巻き込まれたと考えていたのが今までの定説だったわけです。そのように考えることでマロリーの神話的なイメージを守ろうとしていた。ところがこの調査隊はアーヴィングではなくマロリーの遺体を発見してしまった。最初それは信じられないんですね。最初はそれをアーヴィングと思いたがる。そして着ている服をチェックして襟に沈黙屋のラベルが残っていた。そこにG・マロリーと書いてある。ところが、それを発見した調査隊のメンバーは、なんでアーヴィングがマロリーの服を着ているんだろうというふうに考えてしまったというんですね。ですからまだ遺体がそこにあってもまだそれをマロリーと信じることがしばらくできなかった。しかし、ポケットを探すとマロリーの家族からの手紙が出てくる。だんだん自分たちが目にしている

る、この遺体がマロリーであると納得せざるをえなくなる。皮膚の色素が抜け落ちて真っ白な大理石のようになつた75年前の人間の体がここまで見事にきれいに保存されるのかと思うほど、見事な死体だったようですが。

そして隊員たちは遺体を調べ（頂上での映像が撮影されている可能性のあるカメラが焦点になっていましたが、カメラはありませんでした）、遺品を回収し、苦労して岩屑をかき集めて積み上げて遺体をその場に埋葬して、そして帰ってきてその一部始終を報告したわけです。報告書は*Ghost of the Everest*すなわち「エベレストの亡靈」という題ですぐに出版されました。日本語訳も、「そして誰はこった 伝説の登山家マロリー発見記」という題で文藝春秋から昨年の暮れに出ています。マロリーの本当に真っ白な大理石のような遺体の写真が原書では文中のカラー写真ページの中に納められています。氷壁に張りついだ滑落死体のリアルな写真ですね、まさに。邦訳ではなんと表紙カバーにその写真が使われています。このことはちょっと記憶に留めておいて欲しいのです。というのも、私がこのリアルタイムのインターネット報告記をはらはらして読んでいた理由は決してのぞき趣味からではなかったと思うんです。たしかに、多くの人々はこのマロリー探索隊の日々の報告のなかに、遺体というまことにある種のリアルなproof、証拠を、いつこの遠征隊が見つけるのか、という点に同心の中心をおいて見ていたことは否定できない。そして私はそのことをなかなか非常に憂鬱な気分で感じていました。ですから私のドキドキはどちらかといえば見つかることへの興奮というよりは、むしろ何かが出てきたことをインターネットのページで写真のような生の映像としてはできれば見たくなり、何も出てきて欲しくない、しかしそれが出てきてしまうのではないか、そういうような畏れに似たドキドキだったのでないかと、今想像するんですね。結果的にはこのインターネットサイトには遺体の写真はませんでした。この写真はやはり遠征隊がもどつてから遺族とのいろんな相談を経て、最終的に書物の段階で発表されたものです。そして古新化された報告書のなかで、私たちは8000メートルの氷のなかになかば埋もれ、なかば露出したマロリーの大石の彫刻のような肉体=遺体をはじめて「見る」ことになつ

たわけです。

これからお話をしたいのは肉体という証拠についてです。とりわけスポーツにおける「肉体の証拠」の要請ということに私自身、非常に関心を持っています。この点に関する私の考えの骨格だけを申し上げると、近代スポーツというものはそもそもその始まりの時から、リアルな肉体の証拠というものをつねに求めるシステムであった、ということです。肉体がそこに現前するという証拠を人間に對してきびしく要請するシステム。しかもその肉体というのは健全な肉体であらねばならなかつた。近代スポーツはその健全でリアルな肉体というものを、証拠はここにあるんだ、これを見なさいという形で人々にたいして、突きつけるシステムとしてあったのではないかということです。しかもその「健全な肉体」のモデルというのは、いうまでもなく西欧の近代スポーツという歴史性のなかで考える限り、「白人」の「男性」の筋肉強々たる肉体の証拠だったわけですね。これは近代スポーツの西欧エリート的な出自の必然的な条件でもありました。やがて、少しずつ異民族の身体や女性の身体やそうしたものを取り込んでスポーツは展開し、オリンピックという近代スポーツのイデオロギー展示装置が少しずつこの肉体の証拠というものの範を広げていった。「肉体」を定義づける幅は広げていったけれども、リアルで健全な肉体の証拠をそこに求めるというシステムそのものにはかわりなかつた。むしろ健全な肉体の証拠を求めるというイデオロギーが、多様であるべきあらゆる肉体性を逆に一様のモデルとしてからめとつていったというべきでしょう。人間の肉体のもつあらゆる違いを模倣して、それらをすべて健全な肉体モデルというものに還元しようとした。そのなかで例えば、今年のシドニーオリンピックでいえば、開会式の聖火最終走者に被振られたキャシー・フリーマンの姿が略ぶしているように、アボリジニーという先住民的肉体性もあっさりとオリンピック的な身体意識によって濫用され、亮世物のなかでその挑発性をそぎ落とされてしまった。あるいは、もっといえばこれはかなり危険な発言かも知れませんが、身體者の身体。これはおよそ歴史的な健全性のイデオロギーに真っ向から抵触するようなものをも、今やオリンピックはそれ自身の肉体イデオロギーのなかに取り込み、統一ならそうとしています。

パラリンピックがメディアによって大きく取り上げられていく背後に、オリンピックあるいは近代スポーツのイデオロギーが暴力的にあらゆる肉体のあり方を「健全」の肯定論によって包括的に閉い込んでゆく姿を私は見るわけです。

この「肉体の証拠」という問題が私自身、近代スポーツにとつていま一番重要な問題の一つではないかと思ってるんですが、ドーピングという問題もそのことと直接関わっています。これについては大会発表抄録集に書いた通りなのでここでは繰り返しません。ただ、あらためて強調しておきたいのは、スポーツという領域においてドーピングが一番デリケートに問題化され、きびしく監視され、敵視されているのはなぜなのか、という点です。ある種の人工的な方法によって身体能力の増進効果をはかるドーピングという技術は、じつは人間の文化のあらゆる場に遍在しています。これは、人工的といつても決して筋肉増強剤のような化学的な薬品を注射するといった事例だけではありません。たとえばアメリカ先住民の伝統社会のなかでは、幻覚性の植物を食べることによって非常に肉体的に苦しい部族の成人儀礼に耐えるというようなことが伝統的に行なわれてきました。

私自身もメキシコのコーラ族という部族の成人儀礼に参加したことがあります。成人儀礼ですから非常に肉体的につらい試練を3日間、4日間のあいだ少年たちに課すわけです。私一人だけ妻の立った26歳の人間が14~5歳のインディオの少年たちにまじって3日3晩走り続けたりしたんですが、その時に例えばペヨーテという幻覚性のサボテンを食べます。ペヨーテはメスカリン系の物質が多量に含まれているので、強い体力維持効果があるわけです。こうしたことはじつは現代社会でもいくらでも行なわれていて、たとえば音楽オーケストラのメンバーのあいだでよく知られているベータブロッカーという薬がありますが、これはベータ受容体抑制剤、つまりアドレナリン抑制効果のある薬で、一種の抗不安剤ですね。演奏中の緊張を緩和するための薬品としてプロの音楽オーケストラなどでは常用されています。ところが、このベータブロッカーはオリンピックなどでは禁止薬物に指定されています。するとどういうことがいえるか。すなわち、ドーピングという、人間の身体能力増進の様々な可能性を拡大する

文化はさまざまな社会領域に存在し、容認され、ときには奨励されているにもかかわらず、スポーツだけはこれを徹底的に抑圧し、禁止しようとしている。あるいは敵視しているといつてもいい。なぜ、スポーツだけがドーピングにたいして、これほどまでにデリケートで強圧的な禁止を要請するのか。

まさにここに、肉体の証拠という問題があるからです。スポーツはリアルな肉体の展示場になっている。運動する肉体に健全な肉体のモデルを常に求めしていく。したがって、この健全な肉体という神話を探すようなドーピングにたいして特別の敵意を示すということだろうと思います。そして登山史上の伝説的な人物であるマロリーもついに、この遠征隊によって、遠征隊の最終的な意図がそこにあったとはいえないにしても、結局は肉体の証拠として我々の前にそのイメージを突きつけられることになってしまいました。そういう類の写真ですね、このマロリーの遺体写真は。

アルピニズム、登山という問題も2つの側面から考えられると思います。マイヨールさんがいらっしゃるので、とりわけそこを強調しておきたいのですが、近代のスポーツアルピニズム、スポーツ登山というのは、結局山をひとつの征服行為の対象として設定するわけですね。そしてあらゆる道具と登攀テクノロジーを使って、山を一種のスポーツの対象として区別化していく。そういう思想の中で作られました。そこでは登頂、すなわち頂上の征服ということが唯一にして最大の目的ですね。そして自分がその山に登頂したという肉体の証拠、これを必ず取って来なければスポーツアルピニズムは意味がないわけです。つまり登頂の事実を、何らかの媒体によって可視化しなければならない。目に見えるものにしなければいけないわけです。自分の肉体が頂上に着いたということを。これは写真をとるなり、頂上の石を持ち帰るなり、証拠のとり方というのは何通りもありうるわけですが、それをすべてやっていかないと一つの登頂行為を証明することができない。それを証明することがスポーツアルピニズムのベースにあった。日本で言えば志賀重昂の『日本風景論』という著作がそうした近代の日本のスポーツアルピニズムのイデオロギーを反映させた著作としてあります。さらにここにエドワード・ウエストンというイギリス人が関わって、日本アルプスを対象としたスポーツア

ルピニズムが生まれたわけですね。

ところが同じ時期にじつはもう一つの全く違う山岳観が日本の登山家たちのあいだにありました。それは、いわば土着的な日本的地方地方の自然風土のなかに、樺の言葉ですが「観照」という態度をもって没入していく。人間を超えるものにたいする畏怖の念をもとに、自然へ沈潜する態度で。これをヴィジョナリーという言葉でとらえたいのですが、そういう概念につながるような、自己の身体意識を自然環境へと聞いてゆくような、そういうかたちで山に入っていた一群の人々がいました。よく知られた名前で言えば田部重治が『山と渓谷』という本を書いていますが、ここにはそうした観照の態度があります。あるいは木暮理太郎とか冠松次郎といった人々。たとえば冠松次郎の『黒部』などという本を読みますと、彼は徹底して渓谷と森林にこだわっていて山の頂と言うのにほとんどこだわっていない。ひたすら谷を巡り歩いたり森を探索してまわっている。今の言葉ならトレッキングと呼んでしまうかもしれません、山岳を自分自身が征服するというような目的意識とはまったく違うかたちで自然風土の中に自ら観照という形で没入していって、自分自身と山との一体感をめざす。山と自己の融合をめざす。そういう行き方が一方にあったんですね。

しかし、こういう傾向は日本の山岳登山のなかではあまり頗みられることがなくて、スポーツアルピニズム的な登山の観念によって日本の山は完全に支配されていったと言っていいと思います。そしてヒマラヤはまさに近代のスポーツアルピニズムの思想が投影された至高の場所ですが、それでもエベレストに向かったマロリー探索隊にすら、この山登りをめぐる2つの全く異なる傾向はいまだに同居していたような気もするんです。すこしだけ、このマロリー探索隊の報告記から引用してみます。「登山の大さな魅力の一つは経験の密度の濃さだ。数時間の登山の間によそでは一週間かかるても経験できないようなほどの過密な体験ができる。山を登っていると感覚が磨き澄まされる。聴覚も呼吸も嗅覚も何もかも。そして生の実感がどこまで深くなりうるものかちらっとだがわかってくる」。こういう部分があるんですね。これはある意味でこの探検隊の本筋とは全然関係ない部分かも知れません。

しかし、たとえマロリーの遺体を発見するという現実

的な目的を持った登山隊においても、こういうところで山のちつとも身体感覚と感覚融合みたいな問題は感じとられているわけです。

次にかつてのマロリーはどんなふうに山を登ったかという部分です。「マロリーのクライミングの動作は全く独創のものだ。あらゆる理論に反している。どんな角度の斜面に対しても片足を高くおき、肩を膝の方へ折り込んでいったと見る間にふっと身をおこすと彈けるような曲线運動で直立の姿勢に落ち着く。そのあいだ彼と岩とのあいだで何がおこっているか日に止まらない。リズムにのった一連の動きがあまりに速く、あまりに力強いので、岩は彼に刷しなければ分解させられてしまいそうだ」というような記述があります。これはおそらくはショーン・マロリーという人間の山登りの仕方がある意味で常軌を逸している、つまりスポーツアルピニズム的な登山技術の理論ではおよそ説明のできないような身のこなし가マロリーにはあったということですね。岩と彼自身が不思議なかたちで一体化してしまっているという驚きです。

さらに一番のハイライトの部分で、遺体を見つけた時の描写です、「遺体そのものは何も語らない。ここにある体はスノーテラスにあちこち散財する乱れた遺体とはまるで異質だった」。尖はそのあたりはマロリー以後の登山隊のなかから多くの遭難者が滑落して死んでいる墓場のような場所だったんですね。これはちょっと想い出ですが、そうした滑落死体はことごとく全てもんとりうって落ちてきてかたちもわからないほど変形していたというんですね。ところがマロリーの死体は違っていたんです。「頭を上にして顔を伏せ全身をいっぱいに伸ばして滑落停止の姿勢のまま凍りついでいる。まるでついさっき滑落したばかりのように……。頭部と上半身は何十年ものあいだに体積した岩屑の間に埋まり氷結となっているが、両腕はいまだ逞しい筋肉をつけながら頭の上に伸びて力強い両手となり関節を曲げた指先を凍りついた岩屑に深く埋めて山肌を捕えている。両足は下に伸びている。片足が折れそれを庇うようにもう一方の足を交叉させている。ここでも筋肉組織は依然としてくっきりとして力感に滲れ、舞踏家の優雅さを備えている。この体は、かつて人類の輝かしい一典型だった」。

これは発見した瞬間の描写です。これは写真をご覧

になれば分かると思うのですがまさにこの通りで、エベレストの急峻な50度というような急斜面の岩肩を掴んでそのままその岩のなかに半ば体を埋めたかたちでマロリーの遺体はそこにそのままあったわけです。そして最後の一節で、これはちょっと感動的な部分ですが、ヴィジョナリーな一休感をこの探検隊のメンバーが全員マロリーに対して感じてしまう。マロリーがエベレストと一体化してそこにいるということを、自分たちの問題として考えざるを得なくなつたときの感想ですね。彼らはそこで遺品を回収してマロリーの身体を埋葬しました。そこにある岩肩を積み上げて埋葬し、そして祈祷文を読んで帰るわけですが、そのときの彼らの心理をこう書いています。「私達の誰一人として彼を残して行きたいとは思わなかった。ジョージと一緒にいると心が落ち着いた。私たちはもっと長い間彼と一緒に過ごしたかった。彼はそれほど存在感があった。たとえ死んでいても」。

なぜこうした文章を時間超過しながらここで読んだかといいますと、最終的にマロリーの肉体の証拠を我々の前につきつけることになったこの遠征隊においても、ヴィジョナリーな、つまり自然と身体の相互説透によって内的なヴィジョンに到達するというような余地が、かならず存在したということをいいたいからです。そして、上へ上へと上昇する運動を、下へ下へと降る運動へと置き換えてみたとき、まさに「逆さまのアルピニズム」としてのダイビングの問題が見えてくる。いま4カ所引用しましたけれども、そういう記述を読む限りでも、ダイビングの閉塞潜水というものが、高所登山における無酸素登頂と重なってきます。マロリーはじつは酸素ボンベをほとんど危険していませんでした。彼はボンベを持っては行ったんですが、そのボンベは当時ではまだ半分ぐらいは次陥落のようなものだったようです。だからあまり上手に機能していなかった。ともかくマロリーは最後までボンベというテクノロジーを必ずしも信頼していなかった。その意味で、これはちょうどダイビングにおける閉塞潜水とスキーパーとの関係にもあるいは対応させられる。どちらがヴィジョナリーな運動への衝動にもとづいているかは、いうまでもありません。

持ち時間を大幅に超過しましたので、最後にまたイエティの話に戻って終わりたいと思います。イエティ

は証拠写真がないんですね。足跡の写真があるかもしれませんのがイエティの写真というのではない。物理的証拠写真がない。だからこそ、誰もイエティが実在するとは信じない。しかし、チベットヒマラヤにはイエティと何日間か暮らしたというようなことを言う人もたくさんいます。証言はあるけれども証拠写真がない。じゃあ、あなたは一緒に暮らしたと云うなら、どうして写真ぐらい張れないんだ。そういうふうに入々は問いかけるわけですが、イエティに関する証言はあっても証拠写真がないということが、まさにイエティの本質を示しているんですね。イエティとはそういうものなんです。つまり本来肉体の証拠を求める人間のこの理性のシステムのなかにはイエティはいないというわけです。肉体の証拠を求めるメンタリティー、肉体の証拠を突きつける文化のなかにはイエティは出現しない。そういうことなんですね、イエティの写真がないということは。そしてこのヒマラヤの山の中からは、イエティの写真ではなくマロリーの75年ぶり遺体の写真が出現してしまう。ですから我々はこのかなりショッキングでセンセーショナルな写真から、マロリーの英雄行為を想像するんではなくて、この白い死体の彼方に決して証拠写真にはからめとられないであろうイエティを、ある意味で幻視するべきだらうと、私は思うんです。スポーツのヴィジョナリーな可能性を問うということは、そういうことではないでしょうか。

最後の最後の落ちです。このマロリー・アーヴィング探検隊はカトマンズに全ての遺品を持って帰り、発見のいきさつを記者会見の場で初めて世界に向けて発表しました。その記者会見が行われた場所はカトマンズのあるホテルで、その名前は「ヤク・アンド・イエティ・ホテル」という場所だったそうです。

竹谷　　どうもありがとうございました。「肉体の証拠」というのはスポーツ文化の中でどのように考えられるのかということをお詫びいただきました。

では最後に稻垣先生にお話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

稻垣　　誠に申し訳ないのですが、さきほどから生理的要請が強くなっていますので、申し訳ございませんが、その間少しつないでおいて下さい。すみません。

竹谷　　その間にちょうどピジャックさんから質問があ

るようなので。

ジャック・マイヨール　　このようなことは全て相対的なものです。私たちはイエティのことを考えます。もしイエティが私たちのことを考えるんだったらどう考えるのでしょうか。イエティのことを英語では *abominable snowman* という言い方をしました。*snowman* というのは雪男のことですが、どういうわけか英語では *abominable snowman* と言って、*abominable* というのは何て書いたらいいんでしょうかね、憎むべき雪男というような意味なんです。憎むべき雪男という言い方は私がしました。それで次のような小話があります。2人のイエティが山上の崖っぷちの上からのぞき込んで2人の人間が登っていくところを見るわけです。それで、1人のイエティはもう一人のイエティに向かって言うんです。

「おい、二人の憎むべき山登りが今やってくるぞ」。というのは自分で。

竹谷　　福垣先生、準備はよろしいでしょうか。よろしくお願いします。

福垣　　大変、失礼いたしました。この間に及んで、この席に座るんではなかったなど深く反省しています。むしろ、お二人だけで話を進めてもらった方がうまくいくのではないかと、いまになって思っています。折角盛り上がってきた雰囲気を、私はどうも眞面目モードに落としてしまったうで良くないなと思っています。ひとつは、昨夜のパーティーで、ジャックさんは「説明はいらない、説明はいっさいいらない、ただ感ずることが大事だ」と何度も繰り返しておられ、これは困ったことになったな、シンポジウムで説明してはいけないと言われたら、なにも言うことができない。じゃあ、説明でなくて何かを伝えるとしたらどうしたらいいんだろうかと、まあいろいろ考えあぐねながら苦しんでここに座っているわけです。



福垣　正浩氏

で、さきほど今福先生がお話しくださったマロリーのお話は、例の「あなたはなぜ山に登るんですか。」と聞かれたときに「山がそこにあるからだ。」という名セリフを残したあの名登山家のことですね。私も若いころに山登りが好きで、夢中になって登ってたことがあるものですから、とても興味深く聞かせてもらいました。

ところで、この抄録集を一生懸命予習したり、他のシンポジストの方がどんなことをおっしゃるのかなあと想いながら、多少準備をしてここへ上がってきましたが、やはり、その構想そのものがもののみごとに全部碎かれてしまいました。今はもう何にもない状態で、丸裸にされてスタートすることになってしまった、これはえらいことになったなあというふうに思ってます。がたらといって、この抄録を改めて説明しても面白くないですし、それこそジャックさんの基本的な考え方の一つでもある、その時の、その気持ちの良さみたいなところですっとしゃべればいいのかな、と唐突りつつあります。そのほうがたぶん届くのかなと、余分な説明じゃなくて、私が今感じていることをそのまま返すことのほうが答えになるというか、そのほうがこれまでの話が一つに融合できるのかなと思いつつ、これは単なる言い訳にすぎませんが、少しお話をさせていただきます。

で、多少誤解されるかもしれません、できるかぎり単純化してわたしの関心事を投げ出してみようと思います。もし、それは違うということであれば、恐れなくご指摘をいただきたいと思います。そうすれば、そこから新しい議論が生まれ、このシンポジウムが面白い展開になろうかと思います。

まずは一つは、今日のお話にもありましたように、近代スポーツとはいったい何だったのか、という問題であります。このことをずっとわたし自身は考えつづけております。そして、まもなく21世紀に入っていくわけです。20世紀がおわって21世紀に向かうこの時に、この20世紀に生成された近代スポーツというものをどのように認識し、これを批判的に超克していくにはどうすればいいのか、というようなことを考えたわけです。そういう発想で、わたしの到達した仮説を一つ申しあげますと、「20世紀のスポーツは『上昇志向のスポーツ』であったと。つまり、勘定に努力する。

今という時を多少犠牲にしても近い将来に夢をかける。とにかく、今を頑張ればその夢は必ず叶えられるんだと信じ、一生懸命努力する。このような、近未来の成功を夢見て、勁勉に努力する、そういうスポーツをわたしは「上昇志向のスポーツ」と呼んでいるわけです。その典型的な例が、ついこの間のシドニーのオリンピックであり、ワールドカップで見られるようなスポーツであります。

で、そのところは、今福先生のこの抄録を読ませていただきますと、いわゆるスペクタクルの世界だということになります。つまり、自分の肉体を公共の前にさらけだし、それを見せつけていく。今日のお話ですと、「肉体の証拠」をそこへ突きつけていくような、そういう世界を追求したのが、わたしのことばに嵌り換えれば20世紀の「上昇志向のスポーツ」だ、ということになります。

それに対して、じゃあ21世紀のスポーツはどうなるのか。わたしは、かなり大胆な仮説を立てています。それは、「上昇志向のスポーツ」に対して、「下降志向のスポーツ」だ、と。このことを数年前に書きました。しかし、これについては仲間内からも冷たくあしらわれて、それは言いすぎだ、もうちょっとなんとかならないか、というふうに言われました。が、これはある意味で、近代スポーツを批判的に超えてそのための一つのアンチテーゼとして、問題提起しておきたいという気持ちがわたしのなかにありました。つまり、20世紀の「上昇志向」に対して21世紀は「下降志向」だ、というぐらいのことを思い切って言っておいたほうが議論が面白くなるのではないか、と。そんな戦略的なこともあって、かなりの批判のあることも覚悟した上で、あえて「下降志向」という概念装置をセットしてみました。

のことと関連して、21世紀を、はっきりと「近代」と区別する時代だとわたしは捉えています。そのため、わたしは「後近代」ということばを自作自演しながら使っています。前近代に対して近代、そして近代の後に来るポストモダン。このカタカナ語がどうもわたしのイメージに合わない。それから、脱近代ということばも、すでに一定の意味付与がなされていますので、もうそんなことばを大きな時代区分の用語として使いたくない。もう、堂々と近代に対置できるよう

「後近代」という時代を設定していいんではないか、と。そういう意味で、21世紀、つまり「後近代」は下降志向のスポーツに関心が向かうのではないか、と。

別のいい方をすれば、近代のスペクタクル・スポーツがいわゆる公共の面前に「肉体の証拠」を突きつけるものであったとすれば、「後近代」の「下降志向のスポーツ」はむしろ自分自身の内面に向かっていく。あるいは、フィーリングの世界と言ってもいいかもしれません。その先駆けともいべきものが、ジャック・マイヨールさんの実践です。まさに、瞑想系身体技法を使って自分の身体を改造し、不可能といわれた100メートルの深海に達する身体をつくってしまう。つまり、近代的トレーニングの方法では不可能なことを瞑想系身体技法を用いて、新しい身体の可能性を開いていく。つまり、身体にはまだまだ無限の可能性が残っている。「後近代」の「下降志向のスポーツ」は、その未開拓の身体の可能性を開く方向に向かうのではないか。

このように考えますと、近代は、逆に「上昇志向」にかなう身体能力を求めるだけなければならない特別の理由があったのではないか、ということがおぼろげながら見えてきます。そして、その逆のベクトルをもつ「下降志向」の身体の可能性を、近代は否定してきたんじゃないか、と。あるいは、抑圧し、隠蔽してきたんじゃないか、と。それをもう一回もとへ戻す。あるいは、もう一つ別のベクトルに身体の可能性を開いていくような、そういうことがこれから求められていくんじゃないか。

例えば、最近の「癒し」ということばがあります。今はちょっと流れてきた、まだ続いているんですね。ひところ、どこにいっても癒し、癒し。で、最初は非常に新鮮だったんですが、最近わたしは嫌いなことばの一つになってしまいました。そういう「癒し」ということが求められ出したのも、じつは、上昇志向で上にぼっかり向かっていく身体に対する一つの反対といいますか、極限状態に近づいている身体からの離脱といいますか。そこからひたんして、もうちょっと違う身体を見つけよう、もうちょっと楽で心地いい身体を探そう、というところに関心が移ってきてるのではないか、というふうに思っているわけです。でも、それが一つの例であります。

ま、これはあとでジャック・マイヨールさんに、折角のチャンスですので、お聞きしたいなと思ってるんですが、この抄録のなかにもでてきますけれども、クラウンが私に教えてくれたことというのが出てきます。これは本を読んでる方は皆さんご存じの通りですが、そこで何が起きたのかということをここでは説明したいと抄録に書いてありますので、あとではお話しして頂きたいと思います。クラウンに教えてもらったこと。つまり、自分の身体改造（それは同時にこころの改造も伴っていたはず、あるいは、こころの持ち方を変えることが先だったのか、あるいはまた、同時に進行だったのか、じつは、ここが最大のポイント）したことによって、イルカのクラウンとどういう融合が可能になっていったのかという、そういうプロセスみたいなものをお話しいただければ、わたしの「下降志向のスポーツ」というのはもうそこで十分に説明していくだけるんじゃないかというふうに思っております。

で、もう一つ、せっかくの場をいただきましたので、ここでぜひお話をさせていただきたいのは、さきほどの「上外志向」と「下降志向」という一つの概念、わたしなりの概念装置を作ったわけですから、そこにいたり着いた、裏づけについてであります。それはどういうことかといいますと、瞑想系身体技術についての理解の深まりでした。ここで瞑想系身体技術について、あまり詳しく説明する必要はないかと思います。簡単に言ってしまえば、最初のとっかかりは禪の思想であり、坐禅でした。そこを手がかりにして、インドのヨーガとその理論に手を伸ばし、さらに、中国に移って、ダルマが始祖といわれる崇山少林寺の禪の思想をベースにした拳法であり、最近の太極拳とその理論、最後の仕上げは老子の道家思想でした。これらの共通項はいずれも「瞑想」です。そこで行われていることは、とにかく自分を「無」にしていくこと。自分を、さきほどのジャックさんのことばで言えば、エゴをいかにおきて、コントロールするか。そして、「無」の状態に入っていく。これが瞑想系身体技術のポイントになります。同時に、「下降志向のスポーツ」のポイントもあります。

つまり、これもあるところで使ったら誤解されたんですが、わたしはそれを「自己否定の論理」というふうに考えているわけです。勘違いしないでいただきた

いのは、自分は駄目な人間である、と決めつけて否定するという意味ではありません。つまり、エゴをコントロールすること。そういう一つの姿勢ですね。それが、わたしの考える「下降志向」につながっていく。それに対して「上昇志向」というのはいわゆる「自己肯定」。自己を全面的に肯定し、自分をいかに駆り立てるか。自分はすごいんだぞ、力があるんだぞ、と。

例えば、メンタルトレーニングや筋力トレーニングがそうです。試合の前になれば、イメージトレーニングまでやって、自分を絶対化していく。そうしないと、近代スポーツの最後のところの闘いというのは見えない、そういう世界であると、わたし自身もむかし少しばかり競技の世界にいましたので多少は理解できるつもりです。そういう強烈な「自己肯定」をする。つまり、近代というのは自己をいかに主張して自己実現をしていくかというところに向かっていた。それがどこかで手遅れがあって、エゴにすり替えられ、エゴが悪しく犯淫するようになってくる。それが今日のいろいろな諸問題の根源にあるんじゃないかな、とわたしは考えているわけです。

で、時間をあんまり使うと竹谷先生、具合悪いですか？　いいですか？　では、つぎにこの抄録の最後のところにちょっと書かせていただいたんですが、ジャンニリュック・ナンシーの最新の著作『侵入者』を取り上げさせていただきます。ちなみに、ジャンニリュック・ナンシーといえば、フランスの現代思想を代表するジャック・デリダとならんでトップランナーの一人だというふうにわたしは理解しています。その人の書いた『侵入者』という本がつい最近日本で翻訳されています。かなり話題になっていますので、もう読まれた方もいらっしゃると思いますが、簡単に説明しますと、つぎのようです。

この本の大きな特徴は、自分という存在、自己という存在がくわたしからどんどん、どんどん過ぎかっていく、分解していく、なくなっていく、ということを語っている。ひとつの「自己否定」というか、これは外圧によってそうなっていくわけです。どういうことかといいますと、ジャンニリュック・ナンシーは10年前に心臓移植を受けています。かれは、ある日突然、心筋梗塞に襲われてこれ以上放っておくと死んでしま

う、と医者から宣言されてしまいます。だから、緊急に心臓移植をしなければならない、と。で、急速、心臓移植を受けて、こんにちまで生き残ります。ですが、この10年間、ジャン＝リュック・ナンシーはその自分の心臓移植について一言も語らなかったわけです。が、やっと、つい最近になってそのことを語りました。その結果、かれは心臓移植を哲学のことばで語った最初の人となったわけです。

で、これを証証した西谷修氏が、懇切丁寧な、長い解説をしているわけです。ナンシーの書いた部分というのは、非常に明解で、しかも淡々とした記述になっているんです。が、そのことの意味するところを一つひとつ説明してくれている、その解説が、わたしには非常に強烈だったわけです。で、それはどういうことかといいますと、もう皆さん十分ご存じだと思うんですが、心臓移植というのは、自己である自分の心臓を摘出して、他者である他人の心臓を移植して自己化する、というプロセスなんですね。

もう少し丁寧に説明しますと、以下のとおりです。自分の心臓がある日突然、心筋梗塞で使えなくなる。つまり自己の身体であった身体が自己ではなくなっていく。そして、それを切り取って外にださなきゃいけない。そして、他の身体を自己のなかに持ち込んで移植をするわけです。その時、よくご存じのように拒絶反応が起きます。つまり、きわめて健全な免疫反応がおこる。これは抗原・抗体反応ですから、自己の身体が自己を主張すればするほど他者なる移植された心臓に対して強烈な拒絶反応をおこす。すると、こんどは、その拒絶反応をおこさなくするために、つまり強く自己主張をしないようにするために免疫抑制剤を注入する。もう一つの他者を注入することによって、自己の身体を主張しない身体にしていく。そして、そこで一つの調和を保とうとする。こうして免疫抑制剤を用いて自己の免疫力を押さえていくと、もともと自己の身体の中にあった免疫機構が働くくなり、その能力が低下してきます。そうすると、こんどは自己の免疫力によってコントロールされ、休眠していたさまざまなウィルスが活性化しはじめ、ヘルペスをはじめとする面倒な疾患を引き起こします。すると、これに対する治療が始まり、また、別種の薬剤が用いられます。それだけでなく、免疫抑制剤の副作用によって、免疫

にかかる体液を出す癌が発現します。こんどは、移植した心臓と自己の身体とをほどほどに馴しながら、その癌の治療にかかっていく。こうして、癌と闘うことのできる自己の身体（本来の免疫力）をとりもどす必要がでてくる。こういう、なんとも複雑な構造になっていくわけです。そういう状態をジャン＝リュック・ナンシーは今も生きている、というわけです。

つまり、いま、ここにある身体はだれの身体なのか。自分ではわたしの身体だと思っているけれども、わたしを主張すると生きていかれない。けれども、その他者である心臓を否定したらわたしの命は持続できない。そこから派生する新たな病いと闘いながら、自己の身体がどんどん解体されていくプロセスを心臓移植の体験が語っているわけです。

ですが、よくよく考えてみると、このことはなにも医療技術だけに限定された問題ではない、とわたしには思われて仕方ありません。たとえば、現代社会を生きていくということの困難さも、心臓移植後の生命を生きることと、ほとんど同じレベルで語ることができるのでないか、と思っています。わたしの身体は、好むと好まざるとに関係なく、いつのまにやら他者の身体に乗っ取られているのではないか、と。あらためて指摘するまでもないことですが、近代国民国家は、わたしの身体を容赦なく国家の身体に回収してしまいました。日本製企業もまた、わたしの身体の自由を許しません。マイ・ホーム型の家庭もまた同様にわたしの身体に大きくのしかかってきます。わたしの身体は、制度の身体であり、法律の身体でもあります。という只今にさまざまな単位の身体に絡め取られており、それらと折り合いをつけながら生きていくしかありません。もはや、わたしの身体を主張する余地などほとんどないといってよいでしょう。

このことをもっとも敏感に感じとっているのが子どもたちであり、若者たちであります。自分の存在の希薄さ、あるいは透明さを直観的に感じとっています。ですから、つねに離れていない不安であり、危ないわけです。つねに、どこかに身を寄せている必要があるのです。だから、その群れの中にいる限りは安全ですが、そこから離れてしまうと、こんどはいじめの対象になっていく。つまり、自己主張というものをあまりしてしまうと、いまの社会は非常に生きにくい社会

になってしまっている。つまり、マスの単位で共有できる「前掲」というものを欠いてしまっている社会、それでいて自律（自立）するためのプロセス（プログラム）も欠いてしまっている社会、それが現代社会ではないか。良いいえば、まったく自由な社会、悪くいえば、自分というものを確認することのできない社会、あるいは、セルフ・コントロールの効かない社会、ということになるでしょうか。それでいて、自分の存在、あるいは自己の身体そのものは、いろいろ複雑な機械の下でがんじがらめに管理されている。

たとえば、わたしたちの身体は、生まれたときから予防注射という名目の下でいろんな注射をされたりして、成人になるまでにかなりの薬物によって、本人の意志に関係なく、身体改造がされてしまします。衛生国家という医療管理（統制）のもとにあっては、わたしの身体であって、わたしの身体ではない、そういう身体をわたしたちは生きている、ということなのです。しかも、これは、まさかもなくドーピングである、とわたしは考えています。それが國家の名のもとで合理化されている。そういうものが、さきほどの今福先生のお話にもありましたように、スポーツの分野でだけ禁止されてしまう、ということが起こっているわけです。それでもドーピングはあとを断ちません。それもそのはずです。わたしの身体を維持していくことが、もはや、不可能な時代をわたしたちは生きているのですから。つまり、現実の社会の進みゆきと近代スポーツの理想との間の大きなズレに、わたしたちは直面しているということです。こういうところにも、ヨーロッパ近代が生んだ近代スポーツというものの持つ「特異性」というものが顕を覗かせているといつていいでしょう。

思わぬ方向に話が進展してしまいました。ここで申し上げたいことは、つまり、これから21世紀のわたしたちの身体というのは、どんどん、どんどん解体されていく。そして、わたしの身体からますます遠いところに向かい、限りなく、だれのものでもない身体に近づいていくのではないか、と思います。つまり、他者化していく。そうなりますと、自己の身体とはいってないにか、ということを本当に考えなければならなくなってくる。そして、ついには、自分の身体の内省に向かっていく。身体の内実と表面から向き合う、つ

ていいますかね。自分の身体とどういう会話をし、どういう折り合いをつけていくのか。そういうことがおそらく21世紀の、わたしのことばに置き換えれば、「後近代」の大きな課題になってくるんじゃないかなというふうに思っています。

話が長くなってしまいますが、最後に一つお話をさせていただきます。

これはもう、かなり前から話題になっている人ですので、大勢の方がご存じだと思います。荒川修作という、いまは建築家と呼ぶのが一番ふさわしいでしょうか。もともとは、アヴァンギャルドの芸術家で、絵描きさんとしてスタートした人です。「建築的身体」とか、「建築する身体」ということを主張して、世界的に活躍をしている建築家というふうに紹介しておきます。

この人の仕事が、最近になって急に気になりはじめましたので、ちょうど、ここに来る前に見てきました。23日に、わたしは東京を出まして、岡山県の津山市からさらに奥山に入ったところの奈義町現代美術館に行き、荒川修作さんの作品に触れてきました。あるいは、体験してきました。この美術館は、建築家の磯崎新がトータル・デザイナーとして参画し、3人のアーティストを指名して、その作品を納めるのにもっともふさわしい美術館を設計する、という進みゆきで建てられたものだそうです。

ですから、荒川修作は磯崎新に指名された3人のアーティストの中の一人だったわけです。3人のアーティストに与えられたテーマは「太陽」「月」「大地」の三つで、荒川修作は「太陽」を担当します。その「太陽」の展示室の手前に、荒川さんがこの作品を完成させるまでのプロセスを示すデッサンや習作などが展示しています。それらを見ますと、当初、荒川さんは法隆寺の五重塔を逆さまにして、その内側を螺旋階段で登っていく、というものを構想していたことがわかります。いわゆる「天命反転」の具現化です。が、途中で身体が「転ぶ」ということに関心が向かい、それを見る人に実際に体験してもらう作品の制作に取りかかります。それがこの美術館に展示されている「現在の場・奈義の龍安寺・建築的身体」という作品です。

この作品の入口はとても小さくて、からだをかがめるようにして入っていきます。中に入りますと、小さ

な、せいぜい 4 m四方くらいの小部屋になっています。やや薄暗くて、床も壁も天井も黄色の光に照らし出されています。まるで、胎内に居るような錯覚を起こします。しかも、この部屋は、床も壁も天井もたんなる平面ではありません。床は丸みを帯びた傾斜になっていて、どことなく滑りそうな感じです。壁も、よく見ると平面ではなく、ゆるやかな曲面になっています。天井も同様です。そして、天井の模様と床の模様はシンメトリーになっていて、黄色と黒が反転しています。つまり、天井は黒が主調、床は黄色が主調のシンメトリーの模様が描かれています。部屋の中央には、黒くて太い柱がやや斜めに傾いて立っています。入口からみて一番奥の端には、奈良町の人びとのポートレートがランダムに貼ってあります。それを見にいって振り向くと、黒い柱の中に入れる入口があります。中は真っ黒に塗ってあって、螺旋階段がついています。斜めに傾いた螺旋階段を手すりにつかまりながら登っていくと、出口のところで、目と鼻の先に、丸くて黒くて大きな壁に出くわします。

この壁を背にして、狭い隙間を螺旋階段の外壁にもたれながら、明るい方に歩こうとするのですが、からだが思うように動きません。まず、足元の床が円弧を描く曲面になっているために、普通に重心をとろうとすると倒れてしまいます。そこで、仕方ないので螺旋階段の外壁に凭れかかって、かろうじて立位姿勢を保つ、という始末です。恐懼苦悶しながら、なんとか明るい方に回ってみると、そこは大きな円筒がやや傾斜して横たわっている、その内側であることがわかります。

さきの、螺旋階段の出口で直面した丸くて黒いこの端は、この円筒の部屋の底の部分に相当していて、その反対側は明り取り用の丸窓になっています。磨りガラスがはめてあります。この円筒は、目測で、内の直径約 6 m、長さ約 20 m。円筒の傾斜は、カタログによれば、8 分の 1 (約 11 度)。螺旋階段の外壁に凭れながら、中の様子をよく観察してみると、全体が円筒ですので、床も壁も天井もその境目がないということに気がつきます。円筒の内部の両サイドには「龍安寺の石庭」がシンメトリーに貼りつけてあります。これはリアルに、精巧に作られています。床に相当する部分には、手前から、どこの公園にもあるベンチ・シーソー・

低鉄棒が順に並んでいます。天井部分を見ますと、床と同じベンチ・シーソー・低鉄棒が貼りつけてあります。これもシンメトリーです。ですから、この円筒の部屋を 180 度回転させても、この空間の中の景色はまったく変化しません。つまり、上下・左右が意味をなさないセットになっているわけです。ここで注意しなければならないのは、龍安寺の石庭といい、ベンチ・シーソー・低鉄棒といい、まあ、どこか懐かしい記憶を蘇らせる装置になっている、ということです。

こんな光景は見たことがありません。のみならず、ベンチもシーソーも低鉄棒も、じつは円筒の円弧の一番低いラインから微妙に外してセットしてあります。ですから、ベンチに坐って窓でいる姿勢が傾いて見えます。また、シーソーに乗って高い位置になったとき、上体が傾いて見えます。さらに、低鉄棒にぶら下がって逆懸垂になりますと、完全に上下・左右がわからなくなり、しかも、鉄棒のバーがわずかに傾いていますから、鉄棒を握っている腕が異常に緊張し、下りることすらできなくなります。まるで、金縛り状態です。これまでの日常性の中で身につけてきた知覚と肉体との協同作用が、この円筒のなかではまったく通用しません。

横を見れば、すぐ手の届きそうなところに龍安寺の石庭があり、砂利が目の前にあります。眺めていますと触りたくなりますので、触ろうと思って円弧を登っていきます。もう、あと半歩というところで靴が滑って転んでしまいます。何回繰り返しても同じことが続きます。きちんと、綿密な計算がしてあることがわかります。

で、荒川さんの本を読んでみると、日常的に作られた身体感覚をそこへ持ち込むと必ず転ぶ、と書いてあります。転ぶことによって、つまり、身体が宙に放り出されることによって、人間は初めて自分の身体の存在に本気で向き合う。そして、倒れるまでのわずかな間にいろいろなことを感じ、考える。つまり、重心を失ったときに初めて日常とは異なる、意のままにならない別の自分の身体に気づく。その体験こそが新しい自分の身体の可能性を開いていく契機となるのだ、と荒川さんは主張します。

荒川さんのことばを借りれば、36 年かけて人類が蓄積してきた身体の記憶をもう一度蘇らせる必要があ

る、そのためには、日常的な身体感覺を一回ガタガタに崩さなければならない、そして、そこからもう一度身体を立ち上げていく必要がある、というわけです。その契機となるのが「転ぶ」という体験だ、といいます。この「転ぶ」体験を失ってしまった人間は「死んだ」も同然だ、だから、「死なないために」も「転ぶ」建築物を構築する必要があるのだ、というのが荒川さんの主張です。

23日に、この奈良町現代美術館を見て、強烈な印象をもった翌日の24日に、こんどは岐阜県の養老にある「養老天命反転地」というテーマ・パークを見にいきました。こちらも同じ荒川さんの作品です。こちらは野球場とほぼ同じ位の大きさで、形態も同じようにボウル状に中央が深んでいます。ここも人間を「転ばす」ことが目的の公園ですので、どこにいってもまともな平地はありません。どこもかしこも、傾いていたり、でこぼこであったり、規則が誤魔化されたり、錯覚を起こしたりして、普通に歩いていると転んでしまう。

わたしたちがこの公園の中に入って歩きはじめた途端に、眼の前でわたしと同じくらいの年配のご婦人がすってんころりんと転んでいるわけです。おまけに、転んだときに眼鏡を床にぶつけてしまい、額の上を切つたりして、大騒ぎになっている。多分、あの人はここへくると転ぶということを知らないで、珍しいテーマ・パークがあるそうな、くらいの認識でやって来られたのではないかと思います。わたしたちは、いきなりそれを見せつけられましたので、これは危ない、余程慎重に歩かないといけないぞ、と覚悟をきめて一日中あちこち歩いてみました。出きたときには、いつもとはまったく違う身体部位の筋肉の疲労感が残っていました。

この辺で終わらないと竹谷先生に叱られそうなので終わりますが、あと一言だけ、お許しください。

いわゆるわれわれの身体というのは、じつは、近代以後に、これも短く申し上げますが、明治以後の日本でいえば、産業と戦争のために役立つ身体改造を行った結果として得られた身体であるわけです。その身体改造のもっとも中心的な役割を担ったのが、体操運動です。いちに、いちに、のあの体操というふうに簡単に言っておきます。そういうことをとおして、少なく

とも江戸時代までに持っていた身体とはまったく異なる身体を作り上げてしまいました。歩き方も、江戸時代までの日本人と、明治以後の体操教育を経た日本人とでは、まるで変わってしまいました。身体も、歩き方も変われば、その人のものの見方や考え方、感じ方まで大きく変化していきます。

身体というのは時代や社会によっていろいろに変化するものなのです。しばらく前に、「身体の夢展」という展覧会が東京がありました。メイン・テーマは、ヨーロッパの18世紀・19世紀・20世紀の3世紀の間に女性の身体がどのように変化したのか、それを服装との関係で考えてみよう、というものでした。それを見てみると、ヨーロッパの女性の身体がこの3世紀の間にもののみごとに変化していることが、手に取るようにわかりました。つまり、服装という補助線を一本引いてみるだけで、これまで見えていなかった女性の身体の変化というものが、にわかに脚光を浴びるほどに見えてくるわけです。ですから、置かれた環境や、日常的な刺激の受け方によってわれわれの身体というのは著しく制約を受け、変形させられていく。

だから、われわれがいま持っている身体が正常であるかどうか、というようなことは本当はだれも言えないのです。どういう身体が一番正しいとか、良い身体であるとか、ということは軽々しくは言えません。ただ言えることは、近代という時代をとおして作り上げられた身体に立合い、われわれもまた、たまたま持ち合わせている、ということだけです。そして、この身体を巡ってはさまざまな意見が飛び交っている。猫も杓子もみんな「身体論」です。まさに「身体論」の花盛り、といってよいでしょう。このことについて踏み込む時間はありませんが、こういう近代という時代をとおして培われてきた身体を、わたしたちは21世紀に向けてもまだ持ち続けようとするのか、もう一度、視点を変えて、新たな身体改進にとりかかるうとするのか、それがいまのわれわれに問われている最大のテーマだと思います。

その意味で、ジャック・マイヨールさんの実践は、われわれに対するきわめて重要な問題提起であった、とわたしは考えています。すなわち、「イルカと会話のできる身体」「イルカと触れ合える身体」。ジャック・マイヨールさんは、一方では100mの潜水という前人

未到の、競技的な世界にチャレンジされ、他方では、「イルカになりたい」という夢を追究されました。そして、もうともっと「イルカと交信」できる身体を求めておられます。この辺りのところは、今福先生が仰る「ヴィジョナリー・スポーツ」ともつながる、とわたしは思っています。

「イルカとの交信」。これは、近代的な身体を持合わせている人間が、いくらイルカに近づいても、イルカは全部逃げるそうです。そして、やはり瞑想的身体技術法を用いて、身もこころも改造した人間でないと近づけない。まして、イルカに触れることなどできない。つまり、自己を「無」にする。己を空しゅうする。極端な表現をすれば「禪定」。浩瀚の境地に達するような身とこころを持つ人だけがイルカに近づくことができる。イルカと一緒に遊ぶことができる。

この辺のプロセスについては、あとでジャックさんに聞かせていただけたとあります。そのことと、今福先生が言われる「ヴィジョナリー」な世界が、わたしにはどこかできちんと繋がっているように見えますので、その辺もあとで伺えるとありがたいと思っています。

これはわたしの一方的な願望を述べているわけですが、その辺は座長さんの方で聞いていただければ、と思います。すみません。少し長くなってしましました。

竹谷 ありがとうございました。15分ほどオーバーで少し困っておりますが・・・。では、稻垣先生からジャックさんへの質問から入りたいと思います。その後、各シンポジストの方々でもフリートークという形で進めていきたいと思います。よろしくお願いします。では、まずマイアミ水族館でクラウンというイルカがどのように影響を与えたかということからご説明ください。

ジャック・マイヨール 皆さんが眠そうなので、自分は司会者ではないんですが、ここでちょっと休憩を入れた方がいいのではないかと思う。後のディスカッションがちゃんとできると思います。

(5分間の休憩)

竹谷 リフレッシュしましたので、フリートークおよびディスカッションに入りたいと思います。では先ほど、稻垣さんの方からジャックさんにご質問が



竹谷 和之氏

ありました。そのイルカのクラウンが何をジャックさんに教えたのか。どのように教えたのかということを、まずご説明いただけたらと思います。

ジャック・マイヨール クラウンからはあまりにも多くのことを教えてもらい、ここではとても話しきれません。2つか3つくらいならできます。まず、クラウンが私に教えたこと、それは見せたと言ったほうがいいかもしれません。水に対する気持ち、これは謙遜な気持ちです。humility、の気持ちを思って水と接触すること。水を克服する、あるいは欲を持って水と接するんじゃないなくて、謙虚な気持ちで接することです。『イルカと海へ還る日』という本の中ではその一つについて書きました。それは、水に潜るときは脳を使用しないという考え方があるんですね。それは私たち人間がもっている物欲などの意識を水の中には持ち込まない。持ち込んではいけない。彼女の世界にはそういうものを持ち込んではいけないです。彼女クラウンは倫理、本当の意味での倫理がありました。私はこのことについてあまり長く話しません。

まずわかっていただきたいことは人工的な状況でクラウンと接触していたということです。大きなタンクの中でした。だから彼女は自然環境の中ではなかった。柵の中、鉄の中の野生動物は自然に振舞うことはもちろんできません。イルカは私たちが持っていないようなもの、たとえば生理学的なものとかですね、を持っているわけなんです。イルカのクラウンは、私は動物といわず生き物と言っています。その理由はクラウンは人間と同じくらい、あるいは人間より優れている生き物だったんです。しかしタンクの中のコンクリートの壁に附まれて生活していたわけです。イルカとしての自分を十分に表現することができませんでした。ソナーを利用してすることもできませんでした。

これは3つめに教えてもらったことです。その人

工的な環境の中での彼女をそのまま受け入れるということを彼女は教えてくれたわけです。完璧な環境ではなく、その人工的環境の中での彼女を受け入れるということです。それから私の考え方を彼女に押しつけるのではない、ということです。多くのダイバー達はタンクの中に入るときは空気ボンベを背中につけて潜ったりしていましたが、私は素潜りで彼女と同じような条件で水の中に入りました。彼女はそれを理解してくれました。彼女と同じレベルで彼女と接触しているということは彼女が理解してくれたんですね。つまり私は謙虚な気持ちで彼女と接触して、そこで本当のコミュニケーションがとれたと思います。

これで最後ですが、一つ理解したことがあります。この謙虚な態度で今度は野生のイルカと一緒にいる時も同じように接触するということなんですね。私は海と接触するときは、従順しようとしたりあるいは海を捕獲しようとして接触したわけではありません。海から何か奪い取ろうという気持ちがあったわけではないんです。私は海とは恋人として接觸しました。私はイルカが好きです。海が好きです。女性も好きです。人生も好きです。ですから、私は自分のことを海に押しつけることはしません。海を受け入れるのです。この海を受け入れ、地球を受け入れる。ですから、福垣先生の海と一体になるという話がでしたが、私もクラウンから学んで海と一体になることを心がけてきました。また、このことはディスカッションの中で話し合うことができるかもしれません。私が胸に付いているこのバッヂでもそうですし、これは私の今の話のシンボルになっているわけです。海と一体化するということのシンボルになってるのです。ホモ・サビエンスという言い方がありますが、私はホモ・デルフィナスという言い方を提唱しています。イルカと海から人間はいろいろと学ぶべきものがあるということです。

竹谷 福垣先生、それでよろしいですか。

福垣 マイヨールさんは、そういうイルカと一体感がもてるような、例えば謙虚の気持ちになるためのトレーニングや身体改造をやってらっしゃったと思うんですね。そのステップが上がるごとに、そこから進むものが段々進化していったのかなと思っています。その辺のご自身の身体の改造と心の深まりみたいなものとイルカとの関係をお話していただければ

と思います。

ジャック・マイヨール 私のことに関心を持ってくださいましてありがとうございます。クラウンは謙虚の気持ちを教えてくれただけで、自分のことをこんなに長くしゃべるのはどうかと思います。私も他の皆さんに質問したいことがあります。

これだけは言いたい、私の友人の成田さんが言ったことなんですね。5年くらい前、私が67歳のとき、パハナ諸島で2頭のイルカと泳ってました。60メートルまで潜ろうという考えがありました。いろいろな事情でそれは実現できませんでした。しかし深さは關係ありません。とにかく愛をもって、友情をもって、それから遊び心をもってその2頭のイルカと接觸してると、その2頭は私のことを理解して45メートル位のところまで私に付いてきてくれました。そして浮上するときに私はイルカの背につかまって、水面まで連れていってもらいました。これは素晴らしいことだったと思います。私はどのように訓練したかというご質問がありましたけれども、私が訓練したのではなくて、イルカが私に稽古をつけたといった方がいいと思うんです。

そして、その時大勢のカメラマン、写真家がいて、たくさん写真がとられました。その後、その写真がのってるTシャツがいっぱい出てきました。成田さんは私にこのTシャツに何か描いてくださいと頼みました。答てる時に私が考えてたことを何かTシャツに描いてみてくださいと言いました。とにかく、Tシャツのためににか描くということになって、そこで思いついたことを一応描いてみたわけなんですね。それはちょっと難しいんですけど。要約しますと「人間の思想と精神は複雑であるイルカから少しでもインスピレーションを受けとることができたらとしたら、私たちの地球は以前、そうであったとおなじような、再び絶滅のようなものになれるだろう」と。そういうようなことをフランス語で書いてみました。そしてしばらくしてそれはTシャツに印刷されるようになって、そのTシャツを時々見かけたりはしますけれども、自分ながらそれはいい考えだと思っています。そして、それは正しいことだと思っています。

私から質問があります。今福先生と昨夜話したことについてちょっと話したいのです。それはイエティに

ついてのことなんです。イエティと言ったら会場から笑い声があがりましたが、ジャックは笑っていると。私たちは自分の目で見ていないものについてはあまり聞きたくないと思ってます。このマロリーの死体の写真がそのいい例だと思います。それで、昨日の話では、アフリカやオーストラリアの原住民の中には写真をとられることを拒む人がいるのです。お金を払ったとしてもとられたくない、という人がいるということです。

今福　今日のマイヨールさんの話をずっと聞いていました、イエティの話をいきなり私にむけてしかけられたときもそうですが、ふつうの反応としてはいわゆるファンタジストというかミステイシストというか神秘主義家のような印象をマイヨールさんからうけると思います。現実に今日の話の中にもそういう部分がたくさんあったと感ります。別にそれを悪い意味で言っているわけではないんですが。ところが同時に私は、徹底したリアリストとしてのマイヨールさんがもう一方にいると思うんです。ただその時のリアリズムというのは、今日の私自身の話ともつながっていると思いますが、我々が信じる側のリアリティーを単純に物理学的なリアリティーと認めるようなリアリズムとは違うタイプのリアリズムだと思うんですね。なぜかといえば、それはイメージの問題に深くかかわっている。我々が考える通常のリアリティーというのはじつは自分自身の主観性を明らかに棚上げして、むしろそうではない物理的・客観的な原理であるとか、それからそれを証明するために活用されているイメージや証拠写真といったものにもとづいて構成された現実です。イエティにしても、証拠写真があれば信じるかもしれないけれども、それがない限り信じないというそんな単純な二分法が我々のリアリティーの感覚を決めてしまっている。じつはそういう表層的なリアリティー意識によって我々のリアリストとしての能力というのは徹底して弱められてしまっているのではないか。言い換えれば、非常に脆弱なりアリティー意識のなかで誤ったリアリズム信仰がじつはつくられてしまっている。

そういう意味で言うとマイヨールさんのリアリストとしてのスタンスはとてもなくラジカルだと思うんです。『ホモ・デルフィナス』の昨年でた英語版 (*Homo Delphinus: The Dolphin within Man*. Reddick, FL.: Edelson-Gnocchi Publisher, 2000) を

私は読みましたけれども、これは改訂を施されている新版で内容もヴァージョンアップされていると思うんですが、ここでマイヨールさんは未来の人間の2つの可能性のヴィジョンを語ってるんですね。人類の、イルカ人間として、ホモ・デルフィナスとしての未来像に託して。ホモ・デルフィナスの2つの可能性の1つは人間が胎内で、要するに母胎の羊水のなかで水棲生物として生きていた器官的しくみを、そのまま外在化した人間がどれだけ持らうかという点にかかわっています。その可能性の一つとして、マイヨールさんは胎児が脳の縄を通じて母親から栄養補給を行いつつ、水中で自立した酸素循環システムを実現していることに注目し、この循環システムを誕生後の人間が母胎の脅わりとなる人工胎盤というものを引き摺ることで、呼吸・酸素循環系を維持できるのではないかと考えます。だから酸素ボンベではなくて人工胎盤をとりつけた水棲人間のイメージですね。母親の胎盤そのものを人工的につくり、通常は生後すぐに機能がストップして死がれてしまう、肺の縄とつながるボタル管と呼ばれる管があるんですが、この管と人工胎盤をテクノロジーによって繋げてやると、外在化した人間が相変わらず胎児のようにして、肺呼吸に頼らずに脳の縄の管を通じた水棲生物としての生命と呼吸系を保ちうると。しかし、このオプションはマイヨールさんに言わせれば、悪夢のようなオプションであると言うふうに付け加えられています。これが一つのホモ・デルフィナスの可能性。そしてもう一つの可能性、これが多分マイヨールさんの求められているものですけれども、要するに一種の両棲人間の誕生ですね。つまり、人間が少しずつ閉塞潜水の能力を高めていくことによって、普通でしたら、1分か1分半しか潜ってられないんですけど、これを3分ないし4分にまでもってゆく。たとえば4分の活動能力を水中において人間が持らうようになれば、人間の活動領域というのは革命的に広がるでしょう。1分潜れるのと4分潜れるのでは水中で人間が行いうる活動というのは飛躍的に増加します。そしてそれを恒常的に人間が、潜ったり出たりしながら、日常の活動領域を新たにつくりなおしていけば、非常に新しい水陸両棲文化というものがつくれるんじゃないかな。これが多分ホモ・デルフィナスのもっとも自然なヴィジョンだと思うんですね。私はこのヴィジョ

ンは、厳密にリアルな感覚にもとづいているヴィジョンだと思うんです。決して、これはミステイシズムでもなければ、ファンタジーでもない。それはさきほど言ったように、もう一方の極に、悪夢のような、しかし現代テクノロジーが可能にしうる一つの究極のリアルなイメージとしての人工胎盤をとりつけた怪物のような人間像をしっかりと凝視し、このテクノロジーの恐ろしい現実をきちんとあまえているからです。人工心臓はもちろんのこと、いまや人間のクローンすら製造されているという医療テクノロジーの暴走の時代を見据えつつ、人工胎盤という可能性を一方のリアリズムの極限に想定しながら、その対極に、水棲能力を高めた（あるいは新生児から水棲能力を維持させた）イルカ人間の可能性をとらえる。こういう覚醒した視点の均衡の中で語られるマイヨールさんのリアリズムが、一方のミステイックでヴィジョナリーな視点と同じく裏腹の関係にあるわけで、だとすればそれは非常に強烈なリアリズムであり強烈なミステイシズムだと思うんです。

ところで質問はなんでしたっけ？

そうそう、写真をとられることを嫌う先住民の話でしたね。私が経験したメキシコのインディオの例でとてもおもしろいエピソードがあるんです。私が深くかかわっていた部族のひとつがコーラ族という、シェラネバダの山岳地帯の峡谷に住んでいる部族です。私が通った村は谷底にあって周囲は標高2千数百メートルの山岳に囲まれている。谷底の海拔はほとんど100メートル程度で暑いところです。この部族は、一般的にはすでにカトリック化されて久しいインディオのなかではもっとも先住民性が高い部族のひとつで、聖週間の時季にラ・フデアという非常に野性的な祭りというか成人儀礼を行うことで知られています。ところがそういう機会に必ず、外部から見物人がやってきます。ジャーナリストも来るし、かつて日本のテレビ局が一度取材に來たこともあったそうです。メキシコのインディオの多くは、彼らにとってみれば莫大な金を日本のテレビ局が払って撮影祭というのを一度決めてしまうと、その料金が相場になってしまい、その後に入った取材者はみんな日本のテレビ局が出した以上の金を払わないといつぱりせてももらえない、というような悪しき慣習を日本のテレビ局がつくっているというような現実も

あります。ところがこの村はかたくなに写真撮影を拒みつづけてきました。祭りのあいだじゅう、そこでカメラを持っている外部の人間がみつかるとどうなると思いますか。彼らは、カメラを取り上げたりフィルムを抜き取ったり、というような直接に対抗的な行動にはできません。そうではなくて、そのカメラを持ってる人間を祭りの中に引き摃り込んでしまいます。3時間、夜もほとんど眠らずに、終日村のなかを全力で疾走しながらさまざまな場所で踊ったりする、かなり肉体的にハードな祭りの中に引き摃り込んで一緒に走らせるんですね。当然、部外者は途中で熱射病かなにかになって失神してしまいますけれども、失神しても倒れても水をかけたり、気付け薬を嗅がせたりして、また起きて走らされる。一種の拷問のようでもありますが、しかしそれは決して拷問じゃない。外から好奇の目でカメラを向けていた者に、参加したとき祭りの内側からなにが見えるかってことを、体験させようとしているわけです。外から祭りをパノラマ的に見ているときは全く違うものが、内部に入ったときに見える。これは私自身が参加して初めてわかったことです。

長蛇の列を作つて走り回りながら、ある場所で立ち止まって先頭の方で儀礼がおこなわれていても、参加してしまうとそうした儀礼の一部始終はほとんど見えないんですね。百数十人の少年たちが参加していて、私なんか一番後ろにくついているわけですから。だから、祭りに参加するという経験は、祭りがよく見えるようになるというのとはまったく逆に、少なくとも祭りの全体像はまるで見えなくなってしまう。ではそのとき何を感じているかというと、とてつもない太陽の熱射の下ですから、アドビ（日干しレンガ）づくりの小屋の日陰にすこしでも入って疲れをいやそうとひんやりした泥の壁に身を寄せます。するとそのアドビのわずかに持っている湿り気が熱射でもってすこしづつ湯気になって、壁が呼吸しているのがわかる。このわずかに湿り気のある湯気を浴びて、埃だらけの疲れはれた裸の体に少しでも生気を取り戻させようとする。そういう、とてつもなく繊細で微視的な感覚世界のなかに自分たちが入ってしまうわけです。祭りの一員となるというのは、そういうことなんです。そうすると祭りとは写真家がスペクタクルとして撮影してこれが何々族のお祭りですよと言って見せるパノラマ的な絵とは

まるで違う世界として経験される。そしてじつはそういう、非常に内在的な感覚世界のなかから、少年たちは成人するためのいろんな知識を学んでいくんです。コーラ族が信仰する神も、土壁とか、トウモロコシの葉とか、そうした日常空間のディテールに滞んでいて、一人一人との交感の機会をうかがっている。ですから、ふとどき者の写真家を祭りに取り込んでしまうというのは、そういう世界に目覚めさせるという意味もある。さらにおもしろいのは、その祭りには道具だけでいくつもあるんですが、重要な道具が2つあります。一つはおもちゃのバイオリンなんですね。弦もはっていなくて、音がしない木製のバイオリン。この村はヨーロッパ人によって征服された村ですが、この祭りのバイオリンというのはスペイン人が持ってきた外来の楽器を意味していて、そのイミテーションをつくる。それを道化が弾き鳴らす真似をしながら、祭りを茶化して歩きまわる。これはある意味で、征服された外部ヨーロッパというものに対する根底的な批判です。

それと同じように、もうひとつ木でできたおもちゃのカメラもあるんです。そして、カメラをもって来た外部の人間を見ると祭りに引っ張り込むだけでなく、ときには同じ道化が自分たちの持っている知らないカメラ、フィルムの入っていない木製カメラでそういう部外者を撮影する真似をする。これはつまり他所者の視線の暴力的な身ぶりを逆に向こう側から模倣して、自分たちのやっていることの意味を逆に傍らせることですね。ですから、文明社会のカメラ的視線や撮影行為の暴力性はインディオのなかでいったん消化されて、一つの批判的な行為として逆に我々に突きつけられている。これはとても洗練された批判の方法だと思うんです。ですから、たんに先住民は魂を抜き取られるから写真がきらいだ、というようなことではないんだと思うんです。写真を使って文明人が何をやろうとしているのか。ここに典型的未開文化がありますよ、エキゾティックな絵がここにありますよ、というように切り取られてしまう自分たちのイメージ=像をめぐる力関係をどうやって転換できるかということですね。イメージを拒絶する、というのはそういう問題だろうと思うんです。そしてこれは、私たちの現代社会の問題でもある。文明社会のこのイメージの氾濫、そして氾濫する無数の画像がむしろ私たちの

リアリティー感覚の潮流となってしまっているようないま、我々のなかに其のリアルな感触をどう取り戻し、別種のリアリティと接触する能力をどう回復するか、それが問われているのではないかと思う。インディオの方法は、イメージに包囲された現代社会をとてもなく洗練されたやりかたで批判しているとも思うんです。マイヨールさんのご質問の答えにはなってないかもしれません。

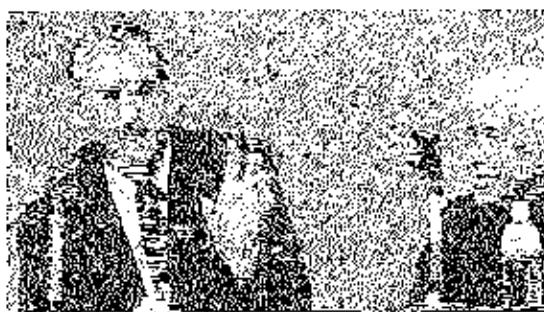
ジャック・マイヨール それで今急いついたんですが、これはかなりおかしな考えではありません。もしかしてイエティというのはある能力を持ってる。要するに自分の写真をとってその写真で金儲けしようとか、自分を採取しようとするそういう人間を識別する能力を、もしかして持ってるかもしれない。だからそういう人たちの前では姿を現わさない。しかし、良心的な一般の人たちはですね、そういう気持ちを持ってなかつたのですからイエティと接触することができる。イエティと一緒に過ごしたりすることができる。もしかして、そういう意味で写真などをとってないかもしれません。

今福 イエティのほうから写真機という一つの暴力的な道具を本能的に避けている。そういう能力がイエティの正体だということですよね。すごくおもしろいんですけど、野生動物というのもじつは同じだと思いますね。人間には、自らの目やカメラによって野生動物の生態にかかるアリティを暴こうとする、そういう衝動というか欲望というのがあると思うんですね。しかしまさにそうした、人間の好奇の目から逃れているものが本来の野生状態にある動物ですね。ヒグマでもオオタカでもいいんですけれども。ところが人間のテクノロジーに託されたイメージの欲望は際限がないですから、見えないものを可視化するという方に強く目的化されますね。そして昨今の野生動物の写真家の多くは、できるだけ写真に撮られたことのないものを撮る、人間の目に見えない動物に接近してその像をとってくる、ということに意義を見いだしている。エコロジカルな意味を持った写真や映像でも、基本的にこの「見えないものを可視化する」という視線は変わりません。しかし、重要なのは、野生とは「見えない」ことなんですね。ですから、レンズによって切り取られた「野生」は、すでに野生ではない。そこにあ

るのは、野生の魂だ、と私はよくいうのですが、結局は野生動物のある種の能力、本能みたいなものは、映像に映らない。だから不可視なものを可視化する写真の権力というのは、まさに野生動物でもイエティでもいいのですが、ある種の超人間的な存在のイメージから離脱してゆこうとする生物の本來的な力と戦っていることになります。

この戦いの勝敗はすでについてしまっているのかもしれません。説得を突きつける映像の暴力に対して、マイヨーラさんと同じように悲観的にならざるを得ませんが、山登りや潜水という運動行為が人間に発見をもたらす可能性は、まだ残っているのではないでしょうか。人間の認識にいまだ組み入れられていない自然環境において自らの身体を開くヴィジョナリーなスポーツに私が関心を抱く理由もここにあります。

竹谷　今までのディスカッションを整理してみると、ジャックさんがおっしゃるホモ・デルフィナスというイルカとの共生。それから今福さんがおっしゃられたヴィジョナリー・スポーツ。自己に沈潜していく自己スペクタクルといいますか、その中に入っていくスポーツというもの。福井さんが言わっています下降思考、ないしは自己否定の、または建築する身体というものが、21世紀のスポーツに必要になってくるの



リー・トンプソン氏（左）

ではないか、あるいはそれが主になるべきではないかというものでした。

ここでこれ以上結論めいたことは言うことができません。会場の皆さんに持ち帰っていただき、お考えいただき、実践していただけたらと思います。

ジャックさん、今福さん、福井さん、長時間ディスカッションしていただきありがとうございました。3人のシンポジストのみなさん、それから一番しんどかったと思いますが、通訳のリー・トンプソンさんに盛大な拍手をお願いいたします。

では、スポーツ史学会第14回大会シンポジウムを以上で終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

（写真：本田 宣嗣）

本シンポジウムの趣旨

竹谷和之(神戸市外国語大学)

20世紀末になり「近代論理」の価値崩壊が急速に進行している。近代スポーツも例外ではなく、その功罪が指摘されて久しい。

そもそも前近代スポーツは「近代」を通過するときにバナキューラー性を取り除かれ合理化されていった。例えば、儀礼として行われていたスポーツには競争の内容が現在とは異なり、当該社会または共同体の中でのみ意味を持ち得たのである。この「閉鎖された社会」のスポーツがその非合理性を取り除かれ普及していく過程には、植民地主義の強力な支援が必要であった。そして多くの支持を得るようになった近代スポーツはまた規格化工業化への道でもあった。施設・用具は大量生産され安価で世界市場に出回った。「公認」を獲得した良質の用具・器具等はまた序列化へと進展していく。近代スポーツを中心にしたスポーツ専用組織による運営は、IOCに代表されるように、身動きがとれなくなるくらいに巨化複雑化した。そして通信衛星によつてリアルタイムでテレビ観戦が可能になるなど、メディアの発達は著しい。このように世界に普及した近代スポーツは「人ひと」の共有物になったのである。

しかし、前近代スポーツの拘束から解放された身体は皮肉にも再び、今までとはことなる近代システム(近代スポーツ)で拘束されるようになつたのである。勝利至上主義にともなう様々な問題(ドーピングはその代表例)は反作用を引き起こしている。そして近代スポーツの本質を貫く過剰な「競争原理」に距離を置いた今まで同様に置かれてきた価値が注目されはじめたのである。「ニュースポーツ」の登場がその好例であろう。「ニュースポーツ」の出現はこれまで否定されてきた価値の復権であり、拘束された身体の解放であり、さらに今までにはなかつた時空でのスポーツが可能となつたのである。そしてまたバナキューラー性を残存しているスポーツにも目が向けられるようになつた。現在、その多様な価値で構成されたスポーツの行方が注目されはじめた。

一方、歴史記述の問題も浮上している。先の植民地主義を生み出したヨーロッパの視点が「前提」として中心を形成し君臨していたのである。しかし、西欧中心史観から脱却をはかるべく採用された民族誌や民族誌学などの記述にも問題が内在していることが判明している。ネイティブへの西洋の理想が語られ、二項対立的枠組を強化したのである。

そして近年「固縁からのまなざし」として被支配者側から歴史の見直しが行われようとしている。今まで沈黙してきた彼らがその存在理由を確認すべく自ら語りはじめた。

「クレオール」をキーワードとした多数の言説がそれを証明している。

近年のスポーツ史学会で取り扱われた、「ニュースポーツとは何か」「今なぜ「気」なのか?」「技術としての武・表現としての武」などは、スポーツが近代性を獲得する過程で沈黙せざるを得なかつたものへアプローチし議論された。本シンポジウムはこのような視点を発展させ、21世紀のスポーツ文化について考えようとして計画された。その導入として、ジャック・マイヨールのダイビングおよびその世界を通してアプローチされる。

なぜ、ジャック・マイヨールなのか?

彼が登場した1940年代は、フリーダイビング(表巻り)はあまり注目されていなかつた。むしろ19世紀イギリスにおけるスポーツ(狩猟)に近似していた。その後が医学的限界を超えて深海に到達し始めたころ(1966)からにわかに脚光を浴びたのである。

彼が実践してきたダイビングの身体技法は、近代スポーツのそれとは全く逆になっている。つまり水中という環境では、マイヨールは身体能力を最大限にして新記録を目指すのではなく、身体能力を極端に低下させて新記録を達成したのである。後の身体技法は東洋的身体技法と直結している。1960年~80年代の20年間に次々と最高記録を塗り替えていくその技法の中心がヨガ、禅および瞑想であった。このようにして近代医科学が唱える人間の限界を潜る度に修正していったのである。

次にマイヨールの「イルカとの共生」という考えは、近代思考や地球環境の再考を促す。大自然の中で培われた彼の思考と実践は、近代スポーツと距離を置くのは当然であろう。なぜなら近代スポーツでは自然支配の論理が優先されてきたからである。自然=肉体の重視およびコントロール、自然環境への無配慮が現在實かれている状況を直裁に訴える。

ジャック・マイヨールのダイビングに必要な身体技法とそれを駆使してイルカとの共生を達成することとは一つに繋がるのである。その主たる思考である「ホモ・デルフィナス(ヒトイルカ)」は、われわれの前に立ちはだかる様々な環境問題を再考させ、価値転換をせまる。

そこで本シンポジウムでは、マイヨールの原体験とその世界、そして文化生成の新たな視点である「クレオール」からスポーツ文化へ、さらに「後近代」という時代区分でスポーツ文化を語っていただき。そしてこれらの報告から議論を進めていきたい。

アプネアと私

ジャック・マイヨール

私は2～3歳の頃、母の指導により上流の「フランス・スガーツクラブ」の大プールで水泳を習った。もちろんビアンノも！その後、上海近海や、さらに5歳の時日本（鹿児島）では海女や漁師の子供たちと泳ぎ、潜った。10歳前には七ツ釜でダイビングを本格的に始め、そこで水中で初めてイルカと至近距離で向かい合った。

第二次世界大戦中(1939～1944)、フランスでスキンダイビングを続けていた。当時、ドイツ占領軍がダイナマイトを用いて魚を殺した後に、水底に沈んでいる魚を捕獲するためかなり長く閉息潜水をした。この爆殺は全く不当でかつ過法であり、危険きわまりない漁法である。また狂気の沙汰としか言いようがない。数匹の魚が浮いているだけではほとんど水底で死んでいた。「犠牲は何でも認めてしまう！」しかし私は不平を諦めなかつた。これが大深度閉息潜水ダイバーとしての仕事に目覚めさせたのであった（水深15メートルに到達）。また同時期(1939～1944)私はスピアフィッシング（結うち）にも駆け出していた。われわれは手製のマスクと販賣初期のフィン(De Corlew社)を使用していた。スノーケルなしで、マルセイユやコート・ダジュールを開む入り江で練習をしていた。

1944年9月にフランス軍に入隊（まだ18歳に見えないなつた！）してからも、北アフリカで楽しみや挑戦としてスピアフィッシングを続けた。1946年にヨーロッパに戻り、訪問国の海岸では本格的に練習をした。湖やバルト海、ラボニアの冷水の中でも行った。

1951年カナダへ訪れたときも同じであった。まさに冒険的野外生活を送り、いつも湖や海岸近辺で潜っていた。フリーダイビングへの「情熱」はアメリカ合衆国、メキシコ、南アメリカの国々へ行ったときも冷めることはなかつた。

ダイビングへの思いが職業に変化するのはマイアミ海洋水族園で働き始めた1956年であった。そこでクラウンというイルカに出会つた。水族園では高圧空気ダイビングのさまざまなテクニックを学び、職を手に入れた。しかし閉息潜水の魅力は今まで以上に増し、世界的に活躍していたアメリカ合衆国スピアフィッシングチームに加わることになった。

「魚を殺すために潜り、それで一番になる」というスピアフィッシングへの興味はまもなく失せ始めた。「潜ることのほかにまだ何があるか」と感じた。そして私の恋人「クラウン」が教えてくれた方法を工夫し試してみた。

私の精神には新しい「地平」が拓かれていた。それは陸生生物の目ではなく、水棲哺乳類（より正確には両棲類）の目でもって水中世界を見ていたのである。クラウンは私にその全てを伝授した。

フロリダ出身のアメリカ・スピアフィッシングのチーム内で私はすでに「最深を潜る人物」と見なされていた。そして私は深く潜ることに集中しようと決意した。深く、より深く潜るために、水中環境に脳、精神、魂、身体を適応させた。。。言い換えると「イルカになる」ことであった。マイアミ海洋水族園でクラウンから学んだトレーニングはすべて役立つた。まず何より、圧力への抵抗ではなくそれに従うことを学んだ、ちょうど柔道や合気道で学んだように。。。この「イルカ的」と信じる思考法は極について書物から得たことと全て一致していた。抵抗せず闇わず水宇宙環境に融合すること、それは禪僧が「生命の流れに」融和するように、「まかせる」ことなのである。原理は同じで、うまくいったのである。「驚嘆すべき結果をもたらした！」

2～3ヶ月のメンタルトレーニング（身体トレーニングも）の後、以前では不可能とされた水深30、40、50メートルに到達した。これは楽しさと精神的意識を考慮して潜った。無理に思われた。そして私の潜水時間は増加し、水中で4分30秒になった。

最初の「挑戦」がやってきた。1965年グランド・バハマ諸島のフリーポートに向けてケイコス諸島をたつとき、当時シシリーのエンゾ・マイヨルカが保持していた「公認」閉息潜水記録54メートルを破るよう水中探検会(UES)に勧められたのである。

2～3週間後の1966年6月21日、彼の54メートルの記録よりも5メートル深く潜った。驚くなく60メートルに達し、2分3秒の潜水後でも肺内に多くの空気を残して帰還した！

このことは私に新たな「道」を拓いた。當時このよう

なことをするのは世界で二つと私だけであった。これはわれわれ二人だけの競技となり、私が100メートル(3分40秒)に到達した世界で最初の人物になるまで10年間続いた。この驚異すべき深度(1976年の当時)はダイビング界に「起爆剤」効果をもたらした。科学者たちは私を「生物学的怪物」と呼んだ。しかし私だけが他の誰よりも私の肉体や精神を知っていたのである。150メートルには手が届くと思った。あるいは他のいかなる人も同じトレーニングを積めば可能であろう。私はその道を切り開いていた。

100メートル潜る前に、1968年1月私はフロリダのフォート・ローダール沖で70メートル(2分30秒)に達し、75、76メートル、そして宮戸(日本)で80メートル(3分の潜水)、1973年11月イタリアのエルバ島沖で85、86メートル(3分15秒)、1975年10月エンバ沖で92メートルを潜った(3分30秒)。

私が哲学的、科学的研究に専念する前の「競技精神」初期に学んだことについてシンポジウムでは述べる。クラウンが私に教えたこと、後に野生のイルカから学んだことについても触れる。これらの体験からどのように私の全存在の「本質」に気づいたか、水中のヨガや禅をとおして自分自身の内なる知性に耳を傾けるようになったか、そして徐々に環境(海)と「調和」し「融合」することを学んだかを説明する。

アブネアが私にもたらしたもの、今後他者に対して何をもたらすのかを語ろう。

そして閉息潜水を行う若き世代がこだわる競技志向に私が同意しかねる理由を述べたい。純粋のアブネアとは本来の自分を探す内なる旅であり、自然と融合することにある。あらゆる点でアブネアはものごとの本質に迫る修行である。求道者(行者)は徐々に自我を忘却し、宇宙の意識と調和し、單なる「一部分」になるのである。その反対に、自我を満足させる方向に向かう競争原理でできたダイビングには反対である。これら相対する二つの見解には大きな隔たりがある。

競技の先端をいくオリンピックスポーツの現状に私はこれらの考え方を当てはめて考えようとしている。不幸にも、オリンピックはあらゆる面で「商業的」になった。とくにこれは現代の競技者がチャンピオンを目指して豪物を利用してからである。

パネルディスカッションでは、自然と調和して行われている古い伝統的なスポーツ復興についての考え方を述べる。

またスポーツにおいて現代の趨勢である自然との対立ではなく、自然との一体化から生ずる「気エネルギー」や、われわれの精神と身体が自然の領域で發揮できる最高のパフォーマンスについても述べようと思う。

(訳者:竹谷和之)

ヴィジョナリー・スポーツ替――身体のスペクタクルに抗して

今福龍太(札幌大学・文化人類学)

シドニー・オリンピック、体操の女子個人総合で優勝したルーマニアのアンドレア・ラドゥカン選手が、ドーピングにより金メダルを剥奪されたことは記憶に新しい。IOCが禁止薬物に指定するエフェドリン（興奮剤としての効果を持つ）は医者が処方した風邪薬の中に含まれていたのだという。十六歳の少女にとって、そのことによる金メダル剥奪は、ルールのあまりにも約束定規の適応として酷に映るかもしれない。だが、競技スポーツの現場がいまや高度に薬理学化された身体管理の現場であることを認めれば、こうした不測の事態は選手およびスタッフの初歩的なミスであると言うしかないのかもしれない。

現在のエリート・スポーツの現状が、たえざるドーピングとそれを見抜こうとするアンチ・ドーピングとのあいだの、終りなき抗争状態を呈していることはすでによく知られている。しかも、ドーピングとは、たんに身体能力の増強のために薬物を摂取することのみならず、これを検査によって見抜かれないためのマスキング・エージェントと呼ばれる薬物開発・採取と一体となって行われている非常に複雑な薬理学的現実である。検査する側にも、まったくおなじレヴェルの薬理学的知識と情報が共有されているとすれば、ドーピングとアンチ・ドーピングをめぐるこのイタテごっことは、薬品による事実の隠蔽とその暴露をめぐる、純粹に薬理学的なバラドックスであるかのようにさえ見える。

だが、人間は有史以来、人為的な方法によって身体能力を高めようとする欲望をつねに持ち続けてきた。たとえばメキシコの先住民タラウマラ族は、三日間休むことなく500キロを走破することを求められる過酷な成人儀礼に際して、乾燥した亀の肉、コウモリの生き血とならんで、ベヨーテと呼ばれる幻覚性のサボテンの果肉を摂取する。ベヨーテにはメスカリン系の化学物質が含まれており、これが身体能力の増強効果を持つことは、タラウマラ文化において古くから認められてきた。さらにこうした部族社会の例だけでなく、現代社会のさまざまな領域においてもドーピングの思想は広く普及しており、この技術は性的、軍事的、学問的、芸術的な身体性・精神性の増進のため、さらには労働生産性の向上のため広範かつ継続的に使用してきた。

こうしてみると、ドーピングの問題とは必ずしも薬理学的な技術競争の矛盾の問題ではない。それはむしろ、人間文化において広範に認められ実践されてきたドーピングの思想が、なぜ近代スポーツという領域においてのみこれほどまでにデリケートに扱われ、さまざまな既成と处罚とス

キャンダルの源泉になってきたか、という本質的な問いに帰着する。スポーツにおけるドーピング禁止の根柢は、通常、競技の「公平性」と身体の「健全性」に反するというかたちで説明されてきた。だが皮肉を込めて言えば、いまやエリート選手間では敵の選手いかなるドーピングプログラムを用いてトレーニングしているかに関する共有された情報が、薬理学的な「公平性」を保つ条件となってしまっている。その意味でドーピングが競技の公平さを損するがすという考えは、現実を見ないナイーブな議論にすぎない。また、選手の身体への弊害や副作用をもって、不健全な身体加工を罪悪視する考え方は正論に見えるものの、これではなぜスポーツだけがドーピング規制の過剰な対象になるのかを説明できない。むしろ私たちは、どうしてスポーツ選手の身体にのみ、こうした「公平性」や「健全性」の神話が強力に依託されているのかを問わねばならないのである。

こう考えたとき、はじめてオリンピックというものが人間の身体の最大の「展示場」として機能している重要な侧面が見えてくる。オリンピックが、近代西欧社会における理想自我をスポーツ選手に託してはじまつた一種の展示装置であったのとおなじように、人間の身体を「公平性」と「健全性」の相のものと見るような身体觀もまた近代の発明品に過ぎなかつた。オリンピックは、このフェアで健全な身体という近代ヨーロッパのイデオロギーをたえず確認するための至上のスペクタクル（見世物）として、国威亮揚儀礼としての外見のかけで、社会を統率する身体イデオロギーを強化しつづけてきたのである。女性の身体、異民族の身体、加工された身体、そして障害者の身体、といった当初のオリンピックが想定しなかつた新たな身体性の発露は、つねにオリンピックという装置に飲み込まれ、健全性の神話に溶解させられるかたちでその批判的で創造的な可能性を埋め隠されていったことになる。

シドニーのスタジアムの聖火を点火したキャシー・フリーマンのいささか居心地悪そうな姿に、オリンピックが新たに飼いならそうとする先住民族的身体の苦悩を感じ、私は溜息をつかざるをえなかつた。

公平性のイデオロギーと健康神話とによって抑圧され、健全な身体の展示場と化した近代スポーツの現場を去るために私たちはいかなる運動服、身体鏡を装備すべきだろうか。近代の「祝祭」に犯された公共のスペクタクルではない、いわば自己スペクタクルのなかに沈没するヴィジョナリー（幻視的・透視的）なスポーツのありかたのなかに、一つの新たな可能性は見えないだろうか。

新しいスポーツ文化の可能性を求めて — J.マイヨール氏の実践・「他者」との折り合いのつけ方について —

稻垣正浩(日本体育大学)

J.マイヨール氏の実践は、すでに、多くのメディア情報を通して、おなじみのとおりである。わたし個人にとっても、それ以上の情報があるわけでもなく、一人のファンとしての感をでるものではない。

しかしながら、長年、スポーツ史研究という場に身を置いて、ものごとを考えてきた者にとって、J.マイヨール氏の実践は尋常ではない。わたしたちが空気のようになじんできた「近代スポーツ」に対して、なにか根底からの問い直しを迫っているかに、わたしには感じられるからである。しかも、その延長上に、これまでとは異なる、新たなスポーツ文化の可能性が開かれているかに見える。その理由について考えてみたい。

その最大のポイントは「瞑想系身体技法」にある。

J.マイヨール氏が、それまでの運動生理学の定説をくつがえす、常識破りの身体改造に成功したのは、この「瞑想系身体技法」にあった。その結果が、人類が初めて体験する素振りでの水泳 100 メートルの突破である。そのためには準備された身体は、瞑想することによって得られる禅定の身体だったのである。つまり、脈拍数・呼吸数を下げ、血圧を下げ、いわゆる安静状態よりもさらに低いエネルギー代謝で済ませられる身体であり、それを支える心境の深まりである。それは、名僧の身体であり、武術の達人の身体であり、忍者の身体である。

イルカと交信するする身体もまた、ここにある。

人間よりもイルカになりたい、という J.マイヨール氏の願いもまた「瞑想系身体技法」によってイルカへの接近がはかられることになる。つまり、「自己」としての意識を可能な限り「無」に近づけ、「他者」であるイルカとのハーダークを可能な限り低くして行くための身体技術として「瞑想」が行われる。こうして、自己を空(むな)しくし、「無」に接近すればするほど、イルカとの距離は近くなってくる。これは、かつて、中西裕堂が小鳥と遊んだという故事にも通底する。

J.マイヨール氏が海に入るときは、すでに「自己」でもなく人間でもなく、単なる自然存在になりきる。このことによって、イルカもまた、警戒心を解き放ち、自然存在として「時空」を共有するようになる。この世界は、すでに、一般のダイバーたちが好奇心むきだしで楽しむイルカ・ウォッティングの世界とはまったく異質である。

この違いはどこからくるのか。

J.マイヨール氏と一般ダイバーとは、その前提が異なる。それは「自己否定」と「自己肯定」の立場の違いといってよい。

「近代」は、人間の欲望の理論を自由競争や予定調和に委ね、自然を科学の力で支配しようとしてきた。その延長上に「近代スポーツ」は存在する。それは、まさに、「自己」である人間を肯定し、「他者」である自然をいかに支配することができるか、その可能性の追求であった。

しかし、J.マイヨール氏の実践は、「近代スポーツ」のそれとは全く逆のベクトルを持つ。「瞑想系身体技法」はエネルギー代謝を極力少なくする身体への道を開き、その身体を支える仮定をめざす。その原点は「自己否定」の論理にある。それに対して「近代スポーツ」は筋力や瞬発力を高め、爆発的なエネルギーを發揮できる身体への道を開き、相手に圧倒されない闘魂を養う。場合によっては、自己暗示をかけてまでして「自己肯定」の立場をとる。その原点は「他者否定」の論理にある。

この意味で、J.マイヨール氏の実践は、「近代スポーツ」とは全くベクトル異なる、新しいスポーツ文化の可能性を提示しているように思われる。そして、これこそが 21 世紀のスポーツ文化（筆者の表現では「後近代」のスポーツ文化）の可能性を開いていくように思われる。それは、まさに、21 世紀の人間の生き方の根本にもかかわる問題である。

このことは、当然のことながら、存在論とも深く関わる問題で、ジャン=リュック・サンシーの近著『侵入者』(西谷裕・訳翻、以文社)が提示した「自他論」とも通底する問題である、とわたしは考えている。その結論は「他者」との折り合いのつけ方について、いかなるスタンスに立つか、と問いかけられているように思う。

第2部

シンポジウムを終えて

現代スポーツを想う

ジャック・マイヨール

シンポジウムに参加でき、また、お二人の教授、今福龍太氏及び鶴見正浩氏と会い議論できたことを大変光栄に思います。とくに英語が堪能でよく旅に出かける今福龍太氏とは「波長」があり、彼は多くの事柄に博識な面を見せてくれた（「スノーマンとイエティ」のような）。そしていわゆる「オリンピック」大会の極端な商業化、それはメディアやテレビで當時現前しているという私の意見とも一致しました。私の見解では、ほとんどの競技者は、とくにカメラの前で、勝利を目指して「自己肯定」を強調する。しかしそうすることで彼らは威儀を失っていると思う。100年以上前のオリンピック大会の精神は消滅した：そこでは誰が

勝者か敗者かということは問題ではなく、「感情」はそれほど筋骨に表現されることはなかった。当時は行為する楽しみを求めての参加のみが重要だったのである：勝負はたいして重要ではなかったのである。

現在は人間感情むき出しの見苦しい姿をさらしており、個人的にはもううんざりだ。そして、競技者はいかなる犠牲を払ってでも勝ちたいと願う。薬を使用して不正をはたらいてもである。

われわれ3人はそのことについて討論を重ねた、そして次回のオリンピックでは思い切った決定がさなれるべきであるとの意見の一一致をみたのである。

（訳者：竹谷和之）

シンポジウムを終えて

今福 龍太

用意した原稿を読みあうようなシンポジウムは、それが人と人が全身体的に向き合っているというタイプの緊張感がまったく欠落しているので、どうしても好きになれない。その場で、すべての準備が水泡と化すような鮮烈な出会いの感覚があり、対話のなかで新しい知的展望が発見されるような、そんな語りの場をいつも求めてきた。その意味では、今回のシンポジウムは満足でき、かつスリリングな機会となった。なによりも、ジャック・マイヨールという、とびきり独創的で個性的な相手を得て、私は久しぶりの即興的な対話の興奮を味わったと告白しておこう。

だが、私の興奮はマイヨールが奇矯できわめてユニークな人間であるという見かけの感興から来るものではなかった。むしろ私は、この現代の「イルカ人間」が、あまりにも「まっとう」な思想の持ち主であって、メディア化され非人間化された社会空間を生きる私たちの日常の方が、よっぽど特異で奇形なものに感じられ

たのだった。外気のいっさい入らない密閉された高層シティホテルの一室に案内されたマイヨールが、窓を開けてくれとたのみ、防災上それができないと知ると、イタリアに戻ると駄々をこねた話を主催者から聞いた。これは一見すると子供のようなわがままにも聞こえるが、よく考えれば、どれだけ私たちの自然な欲求が現代生活のなかで押さえられているかの証でもある。私たちの文化は、子供のような無垢の欲望を押し殺し、社会的な管理の要請に自己の肉体の自然を従属させることを、文化の洗練と成熟であると勘違いしてきたのではないか。

この、いまやあまりにも貴重となった、あたりまえのことをあたりまえに語り、実行できる思索者・行動家とともに25回を過ごせたことは、私の身体にま新しい風を吹き込んだ。シンポジウムに招いていただいたことを深く感謝している。

『21世紀のスポーツ文化を考える』

—アフター・シンポジウム・断想—

稀塙 正浩（日本体育大学）

いつものことながら、シンポジウムが終わってしばらくすると、その余韻がよみがえってくるかのように、あれこれ考えることが多いものです。その大部分は、みずからのことば足らずに因する反省であったり、もっと時間があればこんな議論がしたかったとか、ジャックさんにはこんな話が聴きたかったとか、今福さんはこの点を質したかったとか、要するにないものねだりです。それでも、じっと、あのときの議論を振り返ってみると、シンポジウムをする前とは異なる知の地平に自分が立っていることに気づき、そこはかとなく満足感にひたることもあります。

そんなふうにまだ思いが定まらない状態ながら、いま、ここに書き留めておきたいと思われるところのいくつかを、思い浮かぶままに記してみたいと思います。その意味で、この稿は、たんなる断想のつらなりにすぎません。が、それでも「21世紀のスポーツ文化を考える」ための、いくつかのヒントを提示する、ということにだけはこだわりたいと思います。

そこで、まずは、ジャック・マイヨールさんに関して、わたしがもっと詳しく知りたかったことの一つ。それは、瞑想系身体技法、とりわけ、日本の禅的な修行とその世界についてジャックさん自身がどのようなスタンスをとっておられるのか、という点でした。が、この点については、このシンポジウムのご発言を聞いて、心の底から納得するものがありました。それは、ジャックさんご自身がもはや禅僧の生き方そのものとまことに近いところで生きていらっしゃるということ、また、その思考を深めつづけておられる、ということがはっきりしたからです。

たとえば、「私達が想像するものと目で見るものというものは違う二つの現象ではなくて、同じ現象の二つの違った側面だ」とか、「私達が見るのはその幻影だ」

というくだりです。草刀直入に申しますと、これは道元が『正法眼藏』のなかで練り返し述べている「三界はすべて心だ」というものと同じです。つまり、わたしたちが現実だと思っていることも、あれこれ想像することも、みんな「心」の問題だ、というわけです。その「心」の見ているものは単なる「幻影」にすぎない、だからこそ迷いが生ずる、その迷いをいかにして断ち切るか、これが禪の根本命題の一つです。

この「心」の迷いから、ジャックさんの言う「エゴ」が立ち現れます。そして、「こういう自分のエゴを忘れるためにも潜ってきました」とジャックさんは宣言します。このあたりの発言を聞いておりますと、わたしの頭のなかでは、良寛さんが寺持ちの住職にならないで、山中に庵を組み、まるで無一物となって、ひたすら托鉢によって生きる道、つまり、托鉢僧として終生の修行を求めた姿が浮かんできます。良寛さんもまたみずから「エゴ」を断ち切るために、ひたすら托鉢という行を生涯にわたって続けました。ジャックさんにとって「潜ること」はまさに良寛さんの托鉢にも相当する「行」そのものなのでしょう。

おまけに、ジャックさんは「昔のスポーツは、例えば宗教の神とかヨガと同じようなものだったのです」とまでおっしゃいます。

もはや、わたしとしてはなにをかいわんや、あります。わたしが主張してもなかなか認知してもらえない「下降志向のスポーツ」を、ジャックさんがものみごとに代弁してくださっているからです（「下降志向のスポーツ」については、拙著『スポーツの後近代』三省堂を参照のこと）。

一度作られたイメージというものは、そう簡単には変えられない、という趣旨のことをジャックさんも今福さんもおっしゃいました。わたしたちの中に刻みこ

まれた「近代スポーツ」神話に関するイメージというものは、それは簡単には変えられません。がしかし、いまや、そこから、いかにして「離脱」し、「移動」するか、そのことが「いま」問われているのだ、というのがわたしの認識であり、スタンスです。「下降志向のスポーツ」という概念の提示もまた、こうした認識に立つ、きわめて戦略的な戦術なのです。「後近代」という時代区分の設定や概念の提示も、まったく同じです。つまり、まずは、「近代スポーツ」神話のイメージから「離脱」し、「移動」するためのヴェクトルを明らかにすることが急務だと考えるからです（このような発想を確信するにいたるには、西谷修著『離脱と移動』せりか書房、『世界史のく解体』）以文社、『世界史の臨界』岩波書店、などによるところが大きい）。

こうしたイメージのもつ呪縛力についての話も印象的でした。ジャックさんが話された、映画『グラン・ブルー』のなかで演じられたジャック・マイヨールという人物のイメージの話、映画女優ソフィア・ローレンに対するインタビュー（性的魅力とはなしにか=40%は目の前に見えるもの、60%は頭の中で想像するもの）の話、そして、今福さんが話題にされた、イエティはいるかないかという話、マロリー・アーヴィング調査隊の話、「肉体の証拠」をみせつける近代スポーツやオリンピックの話（アボリジニーの身体、障害者の身体）、ドーピングの話とメキシコ・インディオ（コート族）の成人儀礼の話、これらの話はいずれも、わたしが長年考えつづけてきた「比較スポーツ文化論」の構想を進めていく上で、きわめて勇気づけられる話ばかりでした。わたしが、自信なげに、それでも言わなければと思って考えつづけてきたところからは、そんなには外れていなかった、いな、このお二人によって強力な支援を得ることができた、と大満足でした。ですから、わたしはシンポジストとして壇上にあることも忘れ、一心不乱にノートを取り続けておりました。わたしにとってはまさに至福のひとときでありました。

今福さんのお話のなかで、どうしても、もう一度、触れておきたいことは以下のことがらです。つまり、日本の近代登山の黎明期にみられた二つの傾向についてのお話です。一つの傾向は、志賀重昂やウェストン

らによって誕生した日本のスポーツ・アルビニズムです。そして、もう一つの傾向は、田部重治・木暮理太郎・冠松次郎などが目指した「ヴィジョナリーな登山」です。それは、今福さんのご指摘のとおり神のことばでいう「類照」です。つまり、自然風土のなかに沈潜し、没入していく登山です。別の言い方をすれば、自己と山との一体感をめざす、自己と山との融合をめざす、そういう登山ということになります。こういう山への接近の仕方は、イギリスの詩人ワーズワースにもみられるものです（多賀谷真吾『ワーズワースと登山』）。しかも、この伝統はイギリスのアルビニズムの権化とも目されているマロリーにも継承されていたのではないか、と今福さんは指摘されます。なぜなら、そのマロリーの遺体発見のための調査隊ですら、つぎのような経験を記述しているからだ、と。

すなわち、「登山の大きな魅力の一つは経験の密度の濃さだ。数時間の登山の間によそでは一週間かかるても経験できないようなほどの濃密な体験ができる。山を登っていると感覚が併ぎ澄まされる。聴覚も呼吸も嗅覚も何もかも。そして生の実感がどこまで深くなっているものかちらっとだがわかつてくる」と。

同様に、マロリーの遺体は特別だった、とつぎのような描写を紹介しています。

「遺体そのものは何も語らない。ここにある体はヌーテラスにあちこち散在する乱れた遺体とはまるで異質だった」「頭を上にして顔を伏せて全身をいっぱいに伸ばして滑落停止の姿勢のまま冰ついている。……中略。ここでも筋肉組織は依然としてくっきりとして力感に溢れ武闘家の優雅さを備えている。この体はかつて人類の輝かしい…典型だった。」

山に取り組む姿勢（精神）によって、登山技術も異なり（岩と自己との一体化を求める技術）、できあがる登山家の「身体」もまるで違う、ということを意識した描写です。そして、最後には、マロリーの遺体との一体感が描写されます。

今福さんは、こうした一連の「ヴィジョナルな世界」が登山という行為には、かららず付随しているのだ、にもかかわらず、近代登山を志向するアルビニズムは可視の世界だけを重視し、不可視の世界を切り捨ててしまったのだ、そして、「肉体の証拠」を見せつける「競争」に汲々とした結果がこんにちのスポーツ情況

なのだ、だから、21世紀のスポーツ文化はもともとあつた「ヴィジョナリーな要素」(「観照」「内省」など)にも光を当てるべきではないか、と説いておられるよう思います。

こうした今福さんのお考えは、「クレオール主義」(青土社)、「感覚の天使たちへ」(平凡社)、「移り住む魂たち」(中央公論社)、「野生のテクノロジー」(岩波書店)、「スポーツの汀」(紀伊國屋書店)、「移動溶渡」(新書館)などを読むと、もっともっと奥が深いことがわかつきます。このシンポジウムで今福さんは、登山をテーマにしてお話をされましたが、わたしには旅の名手としてのエッセイやフィールド・ワークから得られた「野生」や「文化」についての思考が、21世紀のスポーツ文化を考える上で、じつに多くのヒントを与えてくれました。これらについては、ディスカッションの時間でと楽しみにしていましたが、残念ながら時間切れになってしましました。また、別の機会を待つことにしたいと思います。

今回、シンポジウムという絶好の場を与えられたお陰で、ジャックさん、今福さんのお考えについて真正面から考えるチャンスに恵まれました。わたし自身は、「下降志向のスポーツ」とか「後近代のスポーツ」とかを提示することで、かなり光を見据えた話題を提示してきたつもりでいましたが、このお二人のお考えにはとても及ばないことがよくわかりました。

ジャックさんに至っては、もう、どっぷりとその世界に身を投げ入れて、近代スポーツの世界をせせら笑っているかのようにもお見受けしました。「説明はいらない、感じることが大事だ」というジャックさんの主張もまた、屁理屈をこねた言説よりも「からだが感じること」に耳を傾けよ、そして、その声に素直に応答しないといいと聞こえてきました。それは瞑想系身体技法によって開かれてくる身体であり、「禅定」「内省」「観照」の身体であります。この「快」にして「自由」なる身体をわがものとする技法こそ、本来のスポーツではないか、とジャックさんは言っているように聞こえました。

わたしは、これまで、あまりに腰が引けすぎていたように思います。とりわけ、今福さんのご著書からは、

深く、広い駆けの基盤を提示されたように思います。これからさらに何回も精読し直して、「下降志向のスポーツ」のさらなる理論武装をし、具体的な内容を構築しながら、もっともっと前に出ていくように心掛けたいと思います。わたしにとっては、まことに大きな転機となるシンポジウムとなりました。

これで終りにしようと思いましたが、最近になって、若干、考えるところができましたので、少し、補足しておきたいと思います。

一つは、ジャンニリュック・ナンシー者の『侵入者』(以文社)についてです。ここでの議論については、どうしても書いておかねばならない、というみずからせっぱつまつた要請があり、「<わたし>の<身体>を考える」という論考を書き上げました(日本体育大学『紀要』に投稿中)。そこから見えてきたわたしなりの知見を少し述べておきたいと思います。

ナンシーが見据えた「侵入者」とは、あくまでも心臓移植の結果として、みずからの身体に「侵入」してきた「モノ」のことです。この「モノ」は単なるモノであると同時に、自己と同調しなければならない、という意味で「者」でなければなりません。つまり、移植される心臓も他者であり「モノ」なのですが、同時に入ってくる免疫抑制剤という「モノ」とも同調しないかもしれません。そして、そのことの必然として起こる病変に対応するための治療薬もまた「モノ」であります。こうした「モノ」がつきつぎに「侵入」してくれるわけですが、これらのすべての「モノ」たちをたばねて一つの「生命」を維持していくことが「自己」を存続させるための大前提になっているわけです。すると、これらの「侵入」してくれる「モノ」を「モノ」のままにしておくわけにはいきません。共に生命を維持していくための協力者にしなければなりません。つまり、「モノ」を「者」にしていく必要があります。この徹底した他者の自己化という側面が「侵入者」ということはには込められている、ということに気づいたことがあります。

この問題は、ナンシーの主張する重要な概念の一つ「接觸」(「と共にある」)とも演進する問題群の一つで、それは単に自己と他者との「関係性」だけにとどまらず、他者の「自己化」というもう一步踏み込んだ議論

が可能であることを暗示しています。これらの問題については、いつか、別のテーマで考えてみたいと思っています。

これとは逆のベクトルをもつ、自己の他者化ということについては、すでに、指摘したとおりです。わたしの身体が限りなく「解体」していくプロセスも指摘したとおりです。わたしの身体がくわたしを主張しないことによって生命が維持され、また、少しだけくわたしを主張しないと生命が維持できない、という分裂した自己の存在（現代のテクノロジーをして初めて可能となった生命維持現象）についても同様です。ここには、ヨーロッパ近代が求めてやまなかつた自己の身体の「主体性」は、完全に「宙づり」になっています。この「宙づり」の問題群については、すでに、ジョルジュ・バタイユやレヴィナスやデリダが指摘したとおりです。まさに、「非人称」の問題です。

この「宙づり」や「非人称」の問題は、まだ、確信をもって言うだけの自信はありませんが、どこか禪の「無」の境地（「禪定」「観照」など）や河出幾太郎の「絶対矛盾的自己同一」、老子の説く「無為自然」などの概念と通底しているのではないか、とわたしは考えるようになりました。異なるのは、『侵入者』の身体が心筋梗塞という病変の結果として、つまり、外圧によって自己の存在が非人称に接近していくのに対し、禪の「無」の境地は瞑想系身体技法を用いて意図的・計画的に、つまり、内圧によって「非人称」に接近する点にあります。つまり、ベクトルが異なるだけで、到達するところはきわめて近い、近似している、あるいは、同じ、ではないか、とわたしは考えています。これは、わたしの思考の現段階での途中経過の報告という程度に、聞いておいていただければありがたいと思います。

こんなことを考えていたら、突然、脳裏に浮かんできたのが中西悟堂（1895～1984）のことです。これは有名な話ですので、詳しく述べる必要はないかと思います。かれは12～13歳のときに秩父の山中で108日間の荒行に取り組みました。そのとき、小鳥が飛んできて、すぐ近くで遊ぶようになり、やがて、かれの頭や肩にとまりにくくようになったというのです。つま

り、坐禅を組んで瞑想していたら、小鳥が頭にとまるようになつた、という次第です。鏡照の深まりとともに中西悟堂という人称がどこかに消えてしまい、完全に「非人称」と化し、まわりの本々と一体化してしまった結果の現象です。しかも、かれが12～13歳のときの体験だというのです。これが契機となって、のちの「寺鳥愛護所体」を結成していくことになります。

ついでに触れておきますが、忍者の修行の一つも、じつはこの「非人称」の存在になるためのものと同じです。ですから、瞬時に立木と一緒にしたり、庭石と一緒にしたりすることのできる「身体」をわがものとする修行に励みます。異なるのは、最後の、その「身体」を用いる目的だけです。

この中西悟堂の世界と、ジャックさんが「エゴを忘れるために潜る」と言い、ついには、イルカと一緒にできる身体をもつにいたる話とは、ほとんど同次元のことだと、わたしは考えています。そしてさらに、今福さんが指摘されましたように、登山という行為のなかにも、心の道き方によっては、自然や風土、そして、身のまわりのものとの一体化に向かう要素が多分にあるということです。つまり、「密度の濃い時間」をどのように過ごすか、という問題であります。

『侵入者』の提示している問題の、わたしにとっての最大の関心事は、現代の最先端の医療技術が、ヨーロッパ近代の主張した「主体性」を解体してみせる、つまり、「主体性」の脱構築を可能にしてみせた、という一点にあります。

もう一つは、荒川修作の提示した「建築する身体」についてです。シンポジウムが終わってから、新たに何冊かの文献が手に入り、それらを読んでいるうちにまたいろいろと考えることが多くなってきました。たとえば、『死なないために』（三浦雅士訳、西武美術館／リブロポート）、『建築・反転の場／宿命の反転（部題：アウシュビツツ＝ヒロシマ以後の建築的実験）』（水声社）、『義老天命反転地』（毎日新聞社）、などです。さらに、かれの講演を聞きにいって（1月18日午後6時45分～9時、東京・青山・女性会館）、肉声でかれの考え方を聞くことができました。小さな会場でし

たが、とても落ち着いた、よい講演でした。やはり、実際の顔の表情を見たり、体温を感じられる肉声を聞くことは、難解なかれの思想表現を理解する上では重要なことだと思いました。そうしたシンポジウム以後に得られた知見について少し述べておきたいと思います。

荒川修作（かれの屋観会や著書は、すべて協同作者であり、妻であるマドリン・ギンズとの共同作品であると明記していますので、正しくは「荒川修作+マドリン・ギンズ」と表記すべきですが、ここでは「荒川修作」で代表することにし、略記します）は、みずからの仕事（作品）を、抽象的な言語で語られる現代思想や現代哲学を「建築」として具象化・具現化したもの、と位置づけています。そして、人間はいかなる身体を持つかによって感性が決まる、と断じます。しかも、その身体を決めるのは「建築」以外のなものでもない、と明言します。もっとも、かれのいう「建築」はいわゆる普通の建物だけを意味しません。人間の生を支えるすべての要素を視野に入れた建築です。したがって、いわゆる自然の地形の設計から始まり、都市計画はもとより、住環境をはじめとした生活のこまごました必需品の設計にいたるまで、人間の存在を規定するありとあらゆるものに及びます。すなわち、人間の身体形成にかかる構築物のすべてにわたる、と言っていいでしょう。とりあえずは、とても広い概念だと考えてください。

ここで注目しておきたいことは、かれの主張の一つである「身体が感性を規定する」というテーゼです。しかも、その身体は「建築」が決定する、といいます。したがって、この「建築」を変えないかぎり、身体も、感性も変わらない、ということになります。ですから、かれの「建築」は身体に働きかけることに主眼が置かれます。上下・左右の宏かならぬ建築物が、つぎつぎに考案され、提示されます。その建築的実験の一つが、「奈義現代美術館」の作品「太陽」であり、「義理天命反転地」だということです。つまり、かれの言う「建築的実験」とは、「人類が36億年かけて蓄積してきた身体の記憶を覚醒させること」が大きな目的となります。

別の言い方をすれば、かれの「建築」は、まさに近代の建築を脱構築することです。そして、そこから身体に働きかけることを目的にします。ですから、徹底して近代の建築とは無縁の「建築」をめざします。断るまでもなく、近代の建築はヨーロッパ近代の合理主義に依拠しています。あるいは、数量的合理主義（あるいは、効率主義）に依拠しています。ですから、その基本は資本が有効に活用され、効率よく利潤をあげる建築が大前提となります。簡単に言ってしまえば、安くて、丈夫で、広い空間を確保することが、人間の居住性や感性よりも優先されてしまいます。その結果、到達した建築が、こんにちわたしたちがもっとも馴染んでいる住環境全体です。すなわち、床は平ら、壁は垂直、天井も平ら、つまり、無力無能を省けば直線を主体とした入れ物ができるのが必然です（近代合理主義の産物）。

それに対して、荒川がめざす「建築」は、床はでこぼこで斜めに傾いており、壁も曲線であったり、切れたり、でこぼこであったり、そして、天井には床と同じ什器が貼りつけられていたり、あちこちに錯覚を起こす仕掛けがしてあったりします。ですから、まともに歩くと転んでしまいます。

「転ぶ」ということが、じつは、荒川の「建築」の重要なコンセプトの一つなのです。なぜなら、からだの重心を失って、いま、まさに、転ばんとするとき、人間は心身ともに「街づくり」状態になり、「非人称」の存在になってしまいます。だからこそ、ここが、身体の覚醒する「始原」だということになります。当然のことながら、脱構築を目指す荒川の「建築」は、いたるところに人を転ばすための装置が仕掛けられています。

この「転ぶ」と同じ位相に立つ荒川の「建築」の重要なコンセプトに「プランク」（空虚：三浦雅士訳）があります。この「プランク」が東洋思想の置き換えだとすれば、それは神の「無」に相当するものといってよいでしょう。この「プランク」を「建築」として具現化したものの一つが「暗闇の部屋」です。中は真暗闇ですから、なにも見えません。のみならず、床は

急に下がっていたり、傾いていたり、でこはこであったりしますので、つねに、重心をとることに注意を払わねばなりません。その重心をとる上で重要なのが壁です。壁に手を触れ、からだを支えながら、かろうじて「転ぶ」ことを回避します。が、あるところで、その壁も突然なくなってしまいます。すると、ほとんど、一歩も前に進むことができなくなってしまいます。進めば「転ぶ」こと必定です。またしても、この「ブランク」のなかで、人間は「宙づり」状態になり、「非人称化」してしまいます。ここにも「始原」が待ち受けています。この真暗闇のなかで第一歩を踏み出すことは、赤ん坊が立ち上がって最初の一歩を踏み出すときと、まったく同じレベルの体験だと言っていいでしょう。この一歩を踏み出す瞬間こそ、身体が「覚醒」する契機なのだ、と荒川修作はいいたげです。

このようにして、荒川修作は「建築」をとおしてさまざまな「始原」を仕掛け、からだで体験させて、身体の覚醒を企みます。

荒川の作品の一つである「養老天命反転地」は、自然の地形といえば、山岳地帯が一番近いでしょう。「山を歩く」と「舗装道路を歩く」とは、同じ「歩行運動」とはいえ、それはまったく別のもの、似て非なるものです。なぜなら、「舗装道路を歩く」運動は、まったく同じステップを繰り返しても、ほとんど危険はありません。むしろ、同じ運動の反復であります。が、「山を歩く」はそうはいきません。同じ反復運動に見ても、一歩、一歩が微妙に変化し、一歩ずつ異なる歩行運動を形成することになります。

ここで想起されるのは、デリダの「反復可能性」の問題です。つまり、「反復」についての形而上学的解釈と脱構築的解釈の区別の問題です。形而上学的反復は「同一物の反復」であるのに対し、脱構築的反復は「差異を含んだ反復、差異における反復、差異の反復」だ、ということになります。

したがって、「舗装道路を歩く」という歩行運動は形而上学的反復であり、身体そのものにとっては楽で、安全ではありますが、まさに、慣性・マンネリ化への道であります。それに対して、「養老天命反転地」を歩くということは、J. デリダのいう脱構築的反復を体験することを意味しているのであり、それこそが身

体の再活性化への道である、ということになります。

そして、さらには、「差延としての反復」の問題へと展開していきます。「同じであることよりも異なること、つねに同一にとどまるのではなく、たえず変化し、他なるものとなり、多なるものとなっていくこと、自己同一性のうちに潜在するのではなく、「他化をめざして」外出し、他者に触れ、他者となること」（高橋哲哉著『デリダ・脱構築』、講談社、1998年、155頁）を肯定することこそが、「36億年の身体の記憶を覚醒」させることであり、新しい身体を形成していくことなのだ、と荒川修作は主張したいのでしょう。この「差延としての反復」は、荒川の主張する「死なないために」というコンセプトにも接続していくことになります。

この点については、荒川修作+マドリン・ギンズ著『死なないために』（三浦雅士訳、西武美術館ノリプロポート、1988年）のなかで、味わいの深い論考を、詩のことばで語ってくれていますので、そちらに譲りたいと思います。ただ、ここでは、今回のシンポジウムに関わる範囲で、ごく重要な点だけを、いくつか提示しておきたいと思います。

まず、前段の議論に接続してみると、「舗装道路を歩く」形而上学的反復は、身体を死に追いやる反復だ、ということになります。それにひきかえ、「山を歩く」脱構築的反復こそは身体を再活性化させる運動となります。つまり、「死なないための反復」ということです。すなわち、荒川修作のいう「死なないために」とは、近代建築が要求している形而上学的反復から「離脱」し、脱構築的反復へと「移動」することを意味しています。したがって、荒川のいう「死なないために」とは、「近代的身体に閉じ込められないために」と同義です。換言すれば、みずからの身体を「近代的身体から解き放つこと」＝「近代的身体の脱構築」、この二言につきます。

では、近代的身体の脱構築とはどういうことなのでしょう。一つは、現前の形而上学的反復を繰り返さないようになります。簡単に言ってしまえば、それを「差延」（J. デリダ）に転化させることです。別の言い方をすれば、意味のない反復を意味のある反復

に変えることです。だれにとって意味があるのでしょう？わたし自身の身体にとって。つまり、日々、みずからの身体の「進延」をこころがけることです。ここでいう「進延」とは、ごく簡単に言っておけば、差異のある反復を持續していくこと、と理解しておいてください。ですから、日々、新しい身体の体験を継続できるようにこころがけていくことです。また、そのように工夫していくことです。

そして、もう一つは、身体の「始原」を探求することだと思います。新しい身体はいかにして開かれてくるのか。あるいは、身体が身体であるためにはいかなる手続きが必要なのか。その「始原」へのまなざしです。荒川修作は「プランク」ということばでそれを表現しています。三浦雅士の訳によれば「空虚」です。

「空虚なしには感覚はない。空虚はおそらく感覚の第一段階であり、他のすべての感覚は、それ自身生じるために、つまり感覚されるために、この空虚を通過するほかない。」

こんな詩文が『死がないために』のなかでは続けれています。ここでいう「空虚」、すなわち「プランク」から直感的に思い浮かぶのは、老子の「無名」です。「各無きは天地の始め、有名るは万物の母」（「無名天地之始、有名万物之母」）という老子の世界創造の語りです（金谷治著『老子—無知無欲のすすめ』、講談社学術文庫、P. 15.）。あるいは、J. デリダのいう「源エクリチュール」の立ち現れる「原暴力」の世界です。あるいはまた、柳でいうところの「無」の世界です。わたし流に解釈すれば、「無」という身心ともにもっともニュートラルな状態に入ったとき、もっとも「快」で、もっとも「自由」な身体をわがものとすることができます。そこから身体をスタートさせることができることになります。そこから身体をスタートさせることができることになります。この「始原」ではないか、という次第です。あるいは、ヨガの瞑想でも同じことを説きます。これらは全部同じことを説明しようとしているように思うのですが、これはいささか亂暴な議論にすぎないでしょうか。

荒川修作が指摘するまでもなく、わたしたちは、まぎれもなく「アウシュヴィッツ・ヒロシマ」を体験し、そこを通過した後の時代に立ち合っています。そして、すでに、多くの時間が流れました。そこで見えてきた

ことは、「アウシュヴィッツ・ヒロシマ」の体験を2度と繰り返さないためには、もはやヨーロッパ近代が求めつづけてきた「近代論理」では立ち行かなくなってしまった、という事実です。そのことを強く意識して、荒川はみずからの「建築的実験」を展開します。しかも、その「建築的実験」をささえる思想（あるいは、理論武装）の多くは、すでに、いくつか指摘してきましたように、フランス現代思想によっています。ジョルジ・バタイユやエマニュエル・レヴィナス、ジャック・デリダ、ジャン＝リュック・ナンシー、といった人びとはすべて「アウシュヴィッツ・ヒロシマ」を思想の原点に見据えています。そして、この人びとが取り組んだ共通の課題は、ヨーロッパ近代をリードしつづけた形而上学の欺瞞性を暴くことであり、「始原」への回帰がありました。

その結果、これは偶然と呼ぶべきでしょうか、あるいは、必然というべきでしょうか、老子の説く「道」（＝「タオ」）に限りなく接近しているように、わたしには思えて仕方ありません。「道（みち）」の道とすべきは、常の道に非ず。名（な）の名とすべきは、常の名に非ず。」という書出しで始まる『老子道德經』上編の冒頭の一節が、わたしの思考のなかではますます大きな存在になりつつあります。この道家思想がインド渡来の仏教と融合して生まれたのが達磨大師（崇山少林寺）による「禪」の思想です。この禪が日本に伝来して、曹洞禪と臨済禪となってこんにちに至ります。

この禪の生み出した坐禅という瞑想系身体技法が、たとえば、ジャック・マイヨールの身体（正確には「身心」）を創り出す上で大きな役割をはたした、という事実です。しかも、そのジャックさんが求める世界は「イルカとの一体感」です。そのため「わたしは游る」というわけです。このことを今福さんのことばを借りれば「ディジョナリー・スポーツ」ということになります。このことは、とりもなおさず、わたしのいう「下駄忠内のスポーツ」となんら異なるところはありません。

21世紀のスポーツ文化のゆくえを、わたしは、以上のように考えております。

この辺りでこの稿は終りにしたいと思います。なにか、最後に、まとめのようなことを述べるべきかもしれません。が、わたしとしては、今回のシンポジウムをとおして、わたし自身のなかに開かれた新しい知見のはほとんど全部を正面に告白したつもりです。このまま投げ出しておく方が、ありのままでいいと思いますし、受け手の皆さんもまったく自由に解釈できていよいのではないか思います。

なにか、最後もまた、弁解がましいことばで恐縮です。

それにしても、ジャックさん、今福さんのとても刺

激的なお話を触発されて、わたしは大興奮し、至福の時を過ごすことができました。それはいまも続いています。そして、これからも日々、新たな知の冒険を楽しんでいくことになるでしょう。そういう、ありがたいエネルギーをいただきました。これからもわが心の赴くところを信じて進みたいと思います。あらためて、ジャックさん、今福さんにここからお礼を申しあげます。ありがとうございました。こんど、また、チャンスがありましたら、ぜひ、お話を聞かせください。

感謝とお礼のことばにすべてを込めて、この稿を終ります。

シンポジウムからの連想

竹谷 和之（神戸市外国語大学）

「クレオール」という語をスポーツ文化にあてはめて考えてみるとなかなか思うように表現できず、えてそれを実行しようとするとまとまりがない。それならばということで、実際に「クレオール」化現象であると思われる事例を導入し、考察することが最善策ではないかという理由から本シンポジウムは計画された。

筆者の関係する分野では非シンポジウムに参加してもらいたい人物にジャック・マイヨールがいた。映画『グラン・ブルー』で閉息潜水（Breath hold diving）というスポーツの存在を世に知らしめたのは彼の功績である。四方を海に囲まれた日本では素潜りは遊びであり、また生計を立てる職業でもあった。しかし彼の著作『イルカと海に遊ぶ日（講談社）1993』が提示する内容に大きな衝撃を受けた。そこに見られるスポーツとは、今までの身体技法とは全く異なる方法を用いられていたからである。現在この競技をアブネア（apnea）またはフリーダイビングと呼ばれている。

彼が素潜りの世界記録を塗り替えていくうちに獲得した重複な身体技法は、いわゆる近代スポーツのトレーニングではなく、ヨガや禪などの「行」であった。スポーツをするとき心臓の鼓動が高鳴るのは誰しも経験したことであろう。しかし深海に潜っていくアブネアの場合には逆に命取りになる。つまり高圧下でのスポーツには大気圧での状態を持ち込めないという特徴がある。このアブネアを実践していくうちに、ジャック・マイヨールは自然をコントロールするのではなく、自然と一体化することがよい結果をもたらすことを知った。近代スポーツとは逆のベクトルを持つこのマイヨールのダイビングに、近代論理に行き詰ったスポーツの新たな方向性が示唆されていると考えたのであった。

ここでそのジャック・マイヨールのダイビングについて簡単にまとめておこう：

1 イルカとの出会い（'59）

マイヨールのダイビングを結実させたのは、他ならぬイルカであった。マイアミ水族館で働いている間、イルカ「クラウン」に学んだその技法は自分の身体をよく知ること、内的エネルギーの活用法、水環境での過ごし方などであった。つまり、水環境での身のこなし方は、水と敵対するのではなく融合することにあるのである。海豚哺乳類の最も匠心地がよい状態理解すること、これが結果的に長時間水中で過ごすことができたのである。陸上動物のメンタリティ…を持ったまま水中に行き、植民地主義者の貪欲さと攻撃性を持ち込むスクーバ潜水とは距離を置いている。

2 競技ダイバーとして（'69～'70）

この時期は自我の満足を追求し、より深くを目指して世界を駆け回っていた。深海まで降ろされたガイドケーブルに沿って潜降する場合のスレッド（重りやブレーキ、ライトを取り付けた潜降器具）や、海底から浮上する際のブイの改良によって身体的負荷を軽減することができた。記録への挑戦はまた医学が証明できない世界への突入でもあった。未知の世界は「死」への不安やセルフコントロールが必要になり、ヨガや禪などの呼吸法を取り入れた。プラナヤマを用いた息こらえで深海に挑むことが可能になったのである。

3 医科学の協力者及び共同研究者として（'70～'83）

アブネアは危険性の高い競技ゆえにマイヨールの76メートル到達（1970）がCMAS（世界水中活動連盟）最後の認定となった。以後、CMASはアブネアを水中応用実験分野とし力を入れ始めた。マイヨールはその医科学の被験者の道を選んだ。そこで判明した人体の潜水メカニズムとして潜水徐脈、ブラッドシフトがあげられる。水環境に適応した人間の身体が確認された。自らのトレーニングが科学的に実証されたことで、マ

マイヨールの深海への挑戦は速度を増していった。100メートル達成に要した時間は3分40秒であった。そして105メートルに到達（1988）した時の年齢は56才であった。

4 世界のダイビングへの眼差し

105メートル到達以後、マイヨールは競技から離れていく。一方で世界のダイビングを見て歩くことにより、様々な場面でダイビングが今なお原初的な方法で行われていることを確認した。日本、インドネシア、フィリピン、ポリネシア、西インド諸島などの島嶼地域に伝承されているダイビング、そしてその「質素な生活」が海との調和、広くは自然との調和をもたらしていることを知った。

これら4段階の時期、重なる時期はあるが、ジャック・マイヨールの現在を形成しているのである。

シンポジウムではこれらの話は周知の事実として進展していった。マイヨール自らが言うように、自分のことを語るのはあまり好きではないという理由もある。事前に発表抄録集を読んでおけばそれをカバーできた。今福氏も言うように、予定調和に徹するシンポジウムよりは何が飛び出すかわからない緊張した状態を「楽しむ」ことが選択された。

今回のシンポジウムの目的は、前述したように、閉息状態にあるスポーツ文化の方向性を考えるというものであった。その導人が「閉息潜水」というのも、言葉遊びではないが、偶然のなせるわざか。ジャック・マイヨール氏の指摘する「イルカとの共生」またはホモ・デルフィナスという考え方とは、今までのヨーロッパ化された意識を一度スロウ・ダウンし、文明社会全体に異議申し立てをするほどの大きなテーマになりうる。しかしその具体的な方法は個人任せられている以上、氏のダイビング技術が理解される場が設定されなければならないと思う。

そして今福氏のいう「肉体の証明」が近代の一つのメルクマールであるとすれば、それを超克する「証点」が必要となってくる。このシンポジウムではその新しい考え方として近代にからめ取られた「身体性」からの脱却が主張された。具体例として、イエティ、アメリカ大陸のコーラ族の儀式、マロリー探索隊のエヴェレ

スト登山における自然（山）との融合、そしてオリンピックの身体が見事に繋がっていく。

さらに稻垣氏の、「下降志向」、ナンシーの身体、及び荒川修作の新しい身体性もマイヨール氏や今福氏とリンクしていく。何か起こりそうな「胎動」を感じたのも事実である。

この3人の発表を聞きながら、ある人物を想起していた。写真家星野道夫である。彼は写真で伝えるというその行為自体を客観視しながらアラスカに住み続けていた。1996年にカムチャッカでヒグマに襲われ落命するまでは。彼のスタイルは、アラスカの自然の中に一人で数ヶ月間身を置き、自然の一部であることを確認しながらであった。それは次のような言葉に現れている：

「例えば、アラスカの自然の中で熊がいますよね。熊が一番すごいのは何かっていうと、一撃で人間を倒せるからだと思うんですよね。それで時々熊による事故を新聞で見ますよね。僕はなんかそういう記事を見ると、不謹慎と思われるかもしれません、ほっとする部分もあるわけです。それは、やっぱりまだ、熊に人間が殺されるような自然が残っているっていうことだと思うんですよね。熊がどこかにいて、もしかしたら自分がやられるかも知れないという感覚は、いろんなことにすごく敏感な気持ちにさせてくれるんです」（ガイアシンフォニーⅢ）

これは宮澤賢治の動物に対する距離とも通底している。西谷修はそのことを、「・・・人間が動物を上から身はるかのではなく、おなじ生存のレベルで出会う、<内在>の感覚にあると言ってもよいだろう」と指摘する。（『世界史の歴界』、2000年）

これはジャック・マイヨールの言う「自然との調和」と接点をもつ考え方とも繋がる。自然への意識が人間の動作を規定する。星野は人間のレベルを遙かに越えた自然の営みに標準を合わせ、それを表現しようとした。「肉体の証明」を目的とする写真とは異なる。むしろ自己をディショナリーな状態に置き、そこで直観（または直感）しながら写真に収める行為は、稻垣の言う「後近代」とも直結する。星野はいう：「目に見

えないものに価値を置く社会の思想に僕はたまらなく
惹かれる】

今まで目に見えることを追い求めてきた社会（＝科学）に対する痛烈な批判である。心の目で見よということであろうか。オリンピックの重みはまさに今福のいう規角化が問題となってきた。それを踏まえた上で、私は星野が写真という表現手段にこだわったことに注

目する。もちろん写さない方がよい場合だってある。その時は身を引き、遠くから眺めた。自然の中に入り込むことで何が見え、何を感じるかをかつてのジャック・マイヨールのように実践していたのである。自然の征服ではなく、自然に身を置き任せるというこの実践は、シンポジウムで示された一つの方向性のモデルとして考えてよいと思う。

「潜る人」、「走る人」、そして「転ぶ人」

高木 勇夫（名古屋工業大学）

報道写真で目ににする機会はあったが、生身のジャック・マイヨール氏の姿を目にするのは初めてである。素泊りの記録保持者として、生きながらの伝説となつた人物。ゴットマンなどとはまた違つた、活動的でシンプルな装い。潮流と海流に吸えられたブロンズ色の肌がまぶしい。言葉の壁のせいもあって、シンボリストの間でのやり取りが滑らかだったとはいがたいが、氏の積年の主張である「イルカになる」ことの意義は、満席となったフロアにも十分に伝わってきた。

19世紀のフランス史研究者である私は、ロマン主義とか社会主義とかの言葉が生まれた当時の政治・社会の展開からして、さまざまなイズムに関心をもってきた。氏の行動指針を何イズムと呼べばいいのだろうか。自然崇拜（フランス語でナチュリスム）あるいは海洋主義（オセアニズム）？ 否、氏自身のモットーでくるべきであろう。主義主張や生理的反応を表すイズムを超越した、普遍的な人間観としての「ホモ・デルフィニス」（イルカのように潜水も浮上も可能なヒト）。氏のようにイルカになりきることはできなくとも、せめて「イルカに近づく」、あるいは「イルカの目で世界を見る」というくらいならば、凡人でも目標にできそうである。

抄録を読み返すと、「水中環境に脳、精神、魂、身体を適応させる」とある。脳と身体という具体的なものはよいとして、精神と魂を分けて考えることの意味を、時間があれば質問したかった。符見では、ルネサンス以降の近代において精神は、心の働きのなかでも理智的な侧面を表し、それだけに自力救済可能なものとされる。それにたいして、魂は救済を待つ、受身的な存在とされてきたようだ。たとえば、英語の魂（ソウル）は人間の頭数以上のものとは見られない。それはドイツ語の魂（ゼーレ、やはり水に関わりがある）に通じ、古くは死後の人間が湖に住むとされたことから出た言葉である。フランス語の魂（アーム）は、ラ

テン語のアニマ（精神分析用語としてお馴染み）から来ており、元はといえば吐息のことである。ゲルマンの貴族にあっては戦士の休息、ラテンの享樂に合っては生者の息遣いが、魂の語源になっているのも面白い。

フランス人として生まれ、幼児に上海で水泳を学び、長じてドイツ占領下の本園で紫潛りに目覚め（爆弾で水中の魚を気絶させるというゲルマン戦士の末裔たちの荒っぽさに腹を立て）、フロリダ海岸で海にちなんだ職業についたあとも（スピアフィッシングのチームでトップになりながらアメリカ人のゲーム感覚に同化しきれない自分を見出した）、マイヨール氏の魂は、陸上での山無し事に拘泥せずに、純粹に生きとし生けるものと向き合うことができた。あらためて20世紀の激動を思うとき、そうしたひたむきな生き方の困難さと大事さを、精神としてはついに理解できないまでも、身体で経験したいものだ。

☆

文化人類学者である今福健太氏のいうヴィジョナリー・スポーツとは、目に見えるもの（ヴィジョン）にたいして、心の目に見えるもの、いわば幻視（ヴィジョナリー）を問題とするものと思えた。幻視となると目には見えないものだから、それこそ行為の真髄、いわば体験の重みが、外から見ているだけでは分からない。そこであらためて示された事例が、メキシコ中央高原の先住民タマウラ族のマラソンである。割譲の中で興味を覚えたのは、ドーピングの容認ともとれる内容（幻覚性のサボテン果肉ペヨーテを摂取して500キロもの距離を走破する）よりも、むしろ昼夜のなかで行われる長距離レースの模様を撮影しようとするカメラマンたちを彼らがとがめる、その制裁の内容であった。タマウラ族の者は、撮影者のなかでとりわけ目に余る者の身柄を拘束し、目的地まで一緒に走らせるという。世に稀な人間の骨みを取材する立場は、客観的な立場とか取材の名目を掲げて、みずからはその行動の

意味を体で感じ取ろうとしない。ならば、同じ行動をさせて、いわば内側から体験させようというのである。

もう一つ、今福氏が提示した話題で興味をそそったのが、ヒマラヤの雪男イエティである。世をあげて伝説の裏付けをしようとやっきになっている感があるが、その存在が端に包まれているからこそ、イエティの存在（？）価値があるとの氏の言葉には、それこそ真実味があった。この事例だけなら観念の遊びともとれるのだが、スポーツ史関係者には他人事とも思えない話題が、矢継ぎ早に提出された。伝説の登山家マロリーの遺体発見のニュースをどう見るか、である。「そこに山があるから登った」マロリーは、俗界に帰還できなかったからこそ伝説となりえた。その遺体が発見され、遺跡の模様がある程度まで想定されてしまうと、スーパーヒーローはただの人間になりきがってしまう。

不思議な現象を舉く立場の人たちが、すべからく陥る近代的観念の罠が、そこにある。事実関係をただしてしまえば、それですべてが終わってしまうという感覚。じつは、物事はそこで終わってはいない。事実関係といふものは、いま生きている者にとっての眞実であって、現にその場に居合わせた者にとっての眞実ではないのだから。もちろん、その場にいた人間には、感覚の状況は見ていないことが多い。後世の人間は、神のごとくすべてを知りうるという特権的な立場から、過去を称揚し、あるいは断罪する。文化人類学というジャンルに内在する、他者と自己の曖昧な関係を批判する立場として、今福氏の例証を反芻してみたことだ。

☆

ホスト役であるスポーツ史学会会長（当時）稲垣正清氏は、かねて「下降志向のスポーツ」という主張のもとに、近代スポーツの特質とされる合理性や勝敗へのこだわりを咎めてきた。マイヨール氏が生誕の課題とした、水中深く潜ること。それは直接に下降のイメージと重なる。そのような言葉の上のつながりだけでなく、ひたすらエネルギー消費を少なくするという代謝、すなわちみずから進んでおこなう身体規制の問題もからんてくる。凡百の身にとっては、深海に到達することは不可能であり、まずはごく表面的に、シンボジウムの主題を理解したと思ったことだ。しかしながら、イルカならぬ人間としては、潜りっぱなしでいるわけ

にはいかない。問題は地上で、他の人と共に過ごさなければならないところにある。

多くの聴衆を前にして稲垣氏はもっぱら聞き役に徹したようであり、氏の年來の主張を敷衍するタイミングを失したようにさえ見えた。そこで、以下は東屋椿ちのようになるが、この間、氏の教説に接したおりに筆者が心動かされた諸題を二つとりあげておこう。

一つは、現代美術家・荒川修作による、岡山県奈義町の美術館の造形である。磯崎新の設計による建物自体がポスト・モダン建築の代表作として名高いだけに、ご存知の方も多いだろう。その庭に「太陽」と題されたオブジェが置かれている。それが荒川の作品で、コンクリートの筒のなかに、体育指導者ならば誰しも振んでみたくなる鉄棒が設置されている。さて、鉄棒を振んで体を持ち上げたはいいが、いざ降りようすると降りるに降りられない。頭上にも、やや大きめの鉄棒が生えていて、天地が逆の、そのまた逆になる。荒川の名が広く知られるようになったのは、岐阜県養老町に「天命反転地」という、少しも平坦な場所のない、途方もない仕掛けを作ったことがあざかっている。彼はデッサンの中で、じっさいに人が振る場面を描いている。人は振んで天命を知る、逆にいえば、恵ばないかぎり人生の意味が見えてこない、というわけである。

話題の二つ目。いまや稲垣氏のライフワークとなつた「文学に見るスポーツ」の連載は、200回近くにも達して、ますます好調である。その第180回に、トレンディング学会の会員であるジャーナリスト高部屋市の『きみは小人プロレスを見たか』（幻冬社アウトロー文庫）がとりあげられている。その詳細については、氏の記事と原本を見ていただければ良いとして、私が感銘を受けたのは、低俗な良識に甘んずることなれ、という強烈なメッセージである。ここまで筆者の記述からだけでも誤解を招く可能性があるが、氏の真骨頂は、ポストモダンとか脱荷素とかいった現代思想の常套句（クリシェ）をスポーツ史に援用するということにあるのではない。身体はもとより、脳も身体も、精神も魂も、つねにアクティブであり続けること。その元気の元は、マイヨール氏の講演からヒントを得て言葉を繋げば、精神の鍛錬と同じくらいの重要性を、魂の救済に見ようとしていることであろう。

☆

「潜る人」と「走る人」、それに「転ぶ人」に通じる人間観。ここでいう「走る人」、すなわちメキシコのタラウマラ族のことは、現代を走り抜けなければならぬ同胞たちに、強いられて走ることにたいするアンチ・テーゼとして紹介したことがある。「走る人」の意味で、あとホモ・メティオーレンシスという言葉を思いついた（メティオール=測る・走る、長さの単位メーターの語源でもある）。西洋史研究者がこうい

うお願いをするのは恥なのだが、「潜る」と「転ぶ」、それぞれのラテン語をご教示願えないものだろうか。それによって三千年の人類史を意味付けようというわけでもないのだが、近代スポーツを、ひいては現代人の生活のあり方を、客観的であると同時に主体的に超越するための意欲を示すモットーとして掲げていきたいからである。さしあたり自力救済を是とする立場からして、自分でも考え、いつか考えた結果を学会員に対してご披露したいと思っている。

第3部

個別論文

エコロジーとスポーツ —動物との共生から見たスポーツ史—

池田 恵子（山口大学）

「はじめに」

スポーツにおける自然と人間との触れ合いは、そもそも地球上にスポーツ的営みが現れると同時に、その共生関係を開始していた。昨今の環境学、生態学との関連を想起させ、自然との融合をはかることを再認させる新しいスポーツ志向は、あらためて有史以来の人間と自然との一体関係を想起させると同時に、自然と競合してきた文明、人間中心主義的思考、あるいはオゾン層の破壊、温暖化、森林破壊、酸性雨、海洋・土壤汚染などの環境汚染をガイアといった地域共同体意識から問題にすることを通じて、21世紀に新しいメッセージを投げかけている。たしかに、山、洞窟、川、海、空、大地、動物といった自然すべては、昔からすべてスポーツと対応関係にあった。登山であり、探検、信仰儀礼、釣り、漕艇、ダイビング、水泳、飛行、狩猟、狩いなどであった。こうしたスポーツと自然の対応関係に加え、近代社会が到来する以前、自然性そのものの概念に違和感なく溶け込んでいたことばに、「ブラッド」というものがあった。近世のイギリスではブラッド・スポーツと呼ばれた民衆娯楽は、下層の庶民のみならず王族貴族の娯楽としても楽しんでいたことはよく知られている。闘うために調教、改良された犬をけしかけて、牛や熊に挑ませ、この動物同士の生死をかけた闘い、すなわち牛角めや熊噛めの娯楽を、16世紀にはエリザベス1世やその姫姫、マリI世、多くの地位の高い王族貴族がスポーツとして見て楽しんでいたと言われている¹⁾。

ブラッド・スポーツの「ブラッド」とは、すなわち「血」であるが、血というものを自然像の觀念に包摶することができた前近代と、「血」を血生臭いものと捉え、残酷さや野蛮さの觀念によって文明の外へと駆逐し、隠蔽した近代とでは、スポーツに対する視線はすでに変容している。このブラッドに対する新

たな視線は、スポーツ史の時代区分さえ規定してしまった。いわゆる、文明化のプロセスから見たスポーツの近代史である。イギリスにおけるブラッド・スポーツの多くは野蛮さが取り除かれ、民の娯楽であったストリート・フットボールやマス・フットボールなどの他の荒々しいスポーツと同様に、秩序、規範を与えられ、それに適合できないものは淘汰された。こうして道徳倫理に照らしても譲りを受けない近代スポーツという巨大文化が生まれる。このような要約がスポーツの近代化論の骨格を為してきた。しかし、イギリスにおける19世紀の前半から後半にかけてのスポーツの変容をこうした單なる代替わり的発想で捉える研究は、もはや今日の主流派ではない。最近では古い民衆スポーツと近代スポーツの交錯した連續性を、例えば民衆娯楽と後の企業的娯楽産業の財政的基盤の連續性を指摘して補完しながら、イギリスにおけるなだらかな産業革命論を下地に説明していく新たな研究視角や変化の物理的時間的差異を強調してその見解を裏付ける主張も展開されつつある²⁾。あるいは、コリンズとヴァンブリューのように、中流階級によるレスペクタビリティーの観念や合理的娯楽がスポーツの組織化を進展させただけでなく、たとえばプロスポーツの発展は下からの原動力と関与したとして、居酒屋文化の果たした歴史的役割に注目するクラブ史研究も示されつつある³⁾。

とはいって、かつてのブラッド・スポーツから近代スポーツへという変化は、スポーツ史の要約としてなお一般的理解を支えているのも確かである。もっとも、その他の面で文明化の影響を十分に被った地域であっても、闘牛や闘鷄を盛んに行っている場所が今でも存在していることや、ボクサーや他のスポーツ選手が試合中に流血する場面は今日のスポーツ場面でも見慣れない光景ではないことを指摘して、「ブラッド」が、必ずしも時代を隔絶したとは言い切れないと言張る

者もあるかもしれない。また、ごく一般的なことばの使はれ方を見ても、血は、外傷によって皮膚の表面に流れ出る人の痛みの肉体的証拠を表すだけなく、スピリットや尊貴、躍動感、心の動きをも表している。確かに、「血の気が多い」、「血が騒ぐ」、「血統がよい」のように、血は、我々自身の精神性、生きている証としての自然性理解を根底に満ませ、人間の心理的感覚や興奮状態を指し示し続けてきた。

他方、「ブラッド」の持つ自然性理解について、前近代と近代を通じてそのように微妙に通底している側面を認めるとしても、動物を用いたアニマル・スポーツが有した自然性は、暴力性、野蛮性のみであるとして、極めて近代的中流階級的思考、すなわち、道徳的で崇高なる精神とその感性を共有していることが社会的地位の証明につながった観念＝レスペクタビリティーの浸透によって一掃されてしまったのも事実であった。19世紀の中期以後は、人刑から動物の感覚や動物そのものを無視させることができ、人間らしい振舞いであるとして、動物との生臭いかかわりから距離が置かれていく。これがまさしく近代であったとする考えに異論を唱える者は少ないであろう。この時期になると、下層のブラッド・スポーツに対してだけでなく、しばしば、上流階級が支持していた狩猟でさえ、この種の議論に巻き込まれていく。こうした「譲諭されるスポーツ」の専門家は、産業社会、都市社会が成立していく18世紀末から19世紀のイギリスで特徴的に操り廻された。そして、19世紀末が近づくにつれ、動物や動物性から人間を隔離する試みは、動物そのものを想いこんで保護し、動物に人間的感情と同じ精神性を投影して、逆に配慮を加え、保護し愛護した高慢なる人間と動物との関係史が始まる。

21世紀を迎えた今日、我々は、150年前から始まった動物からの隔離生活によって失われた人間の自然性を、今度は逆に動物から取り戻そうとして、再び動物に接近しつつある。都市のペットブームであったり、生態学からの提言、「コロジー」、「療し」と境界を曖昧にしていくスポーツ、崇高なる動物精神や自然に対し謙虚さを促し、人間の傲慢な自然理解に警鐘を鳴らす環境保護団体の出現、その他の要因もこれと並行している。この種の新しい傾向はスポーツ史的に見て、どのような変化と捉えるべきであろうか。それともこ

の傾向は、新しくも何もないものであろうか。近代という特殊な時代を除き、長期的な歴史のスパンに照らせば、地球上の動物と人間との関係は共生を続けていく太古の昔からの自然として不変のものなのであろうか。それとも人刑のエゴのために匪い込まれた動物園や植物園的世界の延長上、言い換ればイギリス人の帝国主義的掠取の結果、残された博物学的分類の所産として、主として西洋人が経験した19世紀末から20世紀のスポーツ史的態度に一定の評価を加えるべき時代が到来したと言うべきなのであろうか。

II 生命それ自体の「神聖さ」とスポーツ

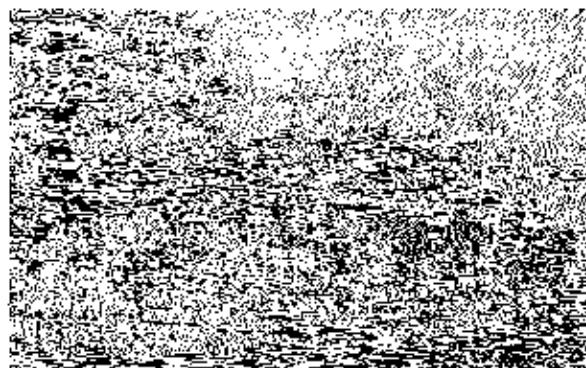
もっとも、イギリス的動物愛護の精神は、そこに博愛主義を持ち込んだり、動物を奇異で珍しいものとして隔離し、また探究しようとした人間の高慢さだけから来るものではなかった。19世紀の後半から19世紀の末にかけて人間、特にイギリス人は、自然界における人間の新しい役割にそれとなく気づき始めていた。それは、人間が抜けこまれている自然というものは、おそらく探検や登山、帝国での狩猟、スポーツを通じて彼らが経験し、想い知らされた克服しがたい体験そのものであったに違いない。そこで、自然界の恐怖に対する反応の中で調合された動物と全自然世界の自徳性、すなわち「生命それ自体の神聖さ」という信念に行き着く。自然界における人間とそれ以外の動植物、気候、天候、気温、気圧、土壤、地形を含めた自然界と人間との相互依存の関係は、もはや人間の利益のためにだけ存在するものではない、人間がそれを恣意的に扱っても罰せられないことをもはや仮定できないことに20世紀が到来するにつれて人々は気づきつつあった。そこから「保護conservation」という考えが生まれてくる。もっとも、当時のものは、近年の生態学史観に到達しているほどの上等なものではなかった。彼らはまだ人間中心的な征服史観に代わる自然と人間の共生をめざす生態学史観を見越していたわけではない。

しかしながら、そのような発想はなかったにしても、過去のブラッド・スポーツや獲物を最終的に捉えて殺すこと目的とした狩猟のようなスポーツが野蛮とされたことに対して反論が生じなかつたわけではない。確かに狩猟は、最後に獲物が殺される瞬間を見る限り

においては、野蛮な行為であり、それを目的として人がチエイスする行為は、博愛主義者による非難の対象とされても言い過れのできない光景を伴っていた。しかし、狩猟家のスポーツマンが「生命の神秘」を軽視していたと言い切れるのかどうかは別問題である。そこで、次にこの種の議論が開始される直前のイギリスの状況を概観してみたい。

III スポーツマンは残酷か—19世紀前半—

狩猟を行ったジェントルマンはスポーツマンであつた。このスポーツマンは残酷かということが命題にされた時、19世紀初頭の急進主義的批評家、ウィリアム・コベットは次のように反論した。



ヘンリー・オルケン筆、銅版画
「ラトランド公爵との狩猟会」

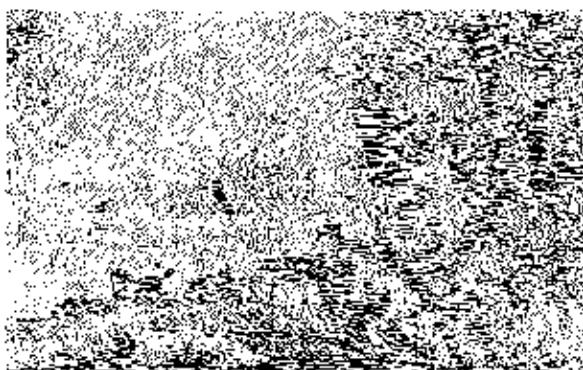
出典：C.J.アッパレイ『スポーツマンの生活』(1842)

獲物と呼ばれる野生動物を追いかけて殺す人間の権利を認めてよいのかと疑問を投げかける3種類の人間がいる。そういう人間に限って【狩猟の】狼や鷹を殺す権利の方は主張する。しかも、きじややまうずらのような食料となる生き物を追いかけることは生きる権利だと主張して肯定する。こういう者どもの言ふことは実に馬鹿げている。

また別の者は、野外スポーツは苦痛の懲罰に配慮すべきだと主張して、【狩猟に】敵意を表明する。狩猟、狩猟は悪意のある残酷性を伴っていると指摘する。そして、自分たちは、生存に必要最低限の肉を得るために範囲でしか家畜を殺したりはしないとつけ加える。そんなわけはないだろう。我々は食肉用の豚や牛とて迷んで殺している。狩猟の場合も同様に迷んで殺しているのだ。

3種類めの人間は、先の2種類の人間よりは、

弱い立場からではあるが、肉を食べることを肯定しつつ、一方でスポーツマンの行為を次のような根拠で非難する。スポーツマンは、しばしば獲物を傷つけ、苦痛を被らせた状態で放置していくではないかと。このように主張するジェントルマンは、子牛や子豚、子羊や家禽類がどのような状態に曝されているのかを忘れている。そのくせ、少しでもお腹がすくと、このちびどもを屠殺し、横み辟くのである¹⁰。



ヘンリー・オルケン筆、銅版画
「公園の泥での銃獵」
出典：C.J.アッパレイ『スポーツマンの生活』(1842)

固知のように近代スポーツが開花する以前のイギリスの「スポーツ」と題された書物を開いてみると、そこには、丘や森や林、池や小川、豊富な種類の鹿や魚、鳥、貴重な鳥の巣などの自然観察、熊と犬の闘いの場面など、まるで自然史博物館の事典のようである。狩猟家のスポーツマンやスポーツの書の読者たちが、今日の我々より、自然に親しみ、動物と共生關係にあったことは、それらの豊富な自然に対する知識や神経の豊かさからしても今日の都市住民との差は極端としている。しかし、野蛮性ということが問題にされた時、その自然に親しみ、動物と真剣勝負をかけたスポーツ愛好家の態度は評価されることではなく、日常において狩猟や動物ときほど関わりを持つことなく、動物の生態に無知を人間の側からその非難が噴出したことは皮肉であった。すなわち、福音主義者、安息日遵守主義者、メソジスト派などの篤信家、その他の社会道徳改良運動家たちであった¹¹。

時の政治的急進派の論客として知られるコベットが、狩猟について以上のような諷諭的見解を示していたこ

とはあまり知られていない。これを彼が急進主義に転向する以前の、1810年代の田舎に暮らす人々の生活実態を調査して回った彼の初期の政治活動、すなわちトーリー的な地主貴族に擁護的な態度の現れと解釈する立場¹⁹もあるかもしれない。しかし、コベットのブランド・スポーツに対する擁護的態度は、下々の娛樂であるブランド・スポーツのひとつ、牛苟めにも及んでいた。



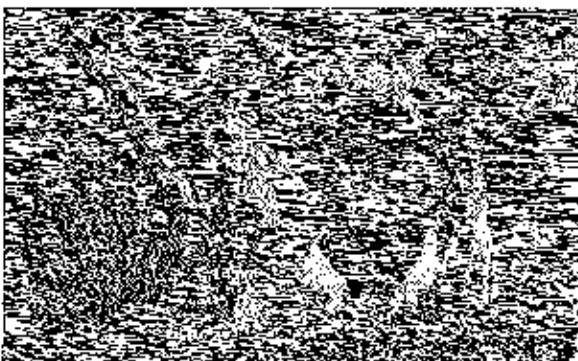
ヘンリー・オルケン筆、銅版画
「キャブテン・アスカム大尉殿の所有物」
出典：C.J. アッパレイ『スポーツマンの生活』(1842)

1800年4月2日にシェールズベリー選出の名望ある議員、ウィリアム・バルテニー卿が牛苟めを違法とする法案を提出した際、コベットはウィリアム・ウインダムとともにこの法案の阻止に努力した。彼が私信を交わしていたウインダムは議会の内情から、コベットは外側からそれを支援したといわれている。その際、コベットは牛苟めが「イギリス人の男らしいスポーツである」とまで主張している。このことは、彼のブランド・スポーツ擁護論が、地主貴族の生活を保守的に維持させよう意図するような政治的態度の現れというより、彼がスポーツに対して抱いていた自然性理解の表明と関連していたことを示唆している。後にG.D.H. コールは、コベットについて研究する中で、こういった彼の行動を例に挙げて、コベットのことを「熱狂的なスポーツの支持者」と記している²⁰。ウインダムやコベットの主張が効を奏したのか、結果的にこの法案は通過しなかった。2年後にジョン・アントンが同じような法案を提出したが、再び拒絶され、9年後の1809年5月15日に、元上院議長のトマス・アースキン代議長によって動物虐待防止法案が提出されるまで、ブランド・スポーツの残酷性に対する実質的討論は据え置かれることになる²¹。

今日では野蛮きわまりないものと感じられるブランド・スポーツの廃止を阻止したコベットらの行動は、彼らや当時のスポーツマン、スポーツ愛好家が、動物に対する慈悲の心のかけらもない、残酷な魂の持ち主だったためだろうか。それとも、下層の娛樂である牛苟めなどのブランド・スポーツを擁護することは、パートナリズムの雰囲気であったジェントルマンと庶民のノブリス・オブリージュ的パトロン関係として片付けられてしまう程度の問題なのであろうか。

IV なぜ教育的態度と狩猟が関係したか

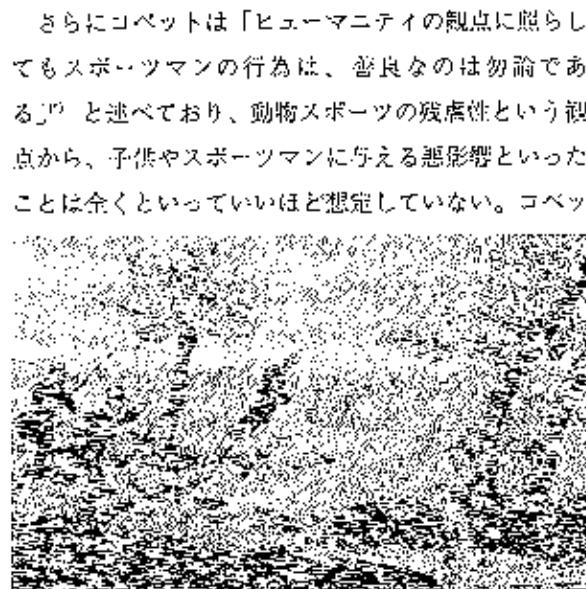
もし、単なるパートナリズムの上下関係の結託として片付けられてしまう問題であれば、コベットの狩猟に対する見解が教育論にまで及ぶことはなかったであろう。さらにもし、彼が非人道的動物に対し冷淡な心の持ち主であったとすると、19世紀の初頭的段階ではあるが、道徳的観念の育成ということも想定されていたであろう「教育」という範疇の中に、狩猟を含め、このスポーツを自らの息子にまで推奨するということはしなかったはずである。B・ヘイリーによれば、コベットは、信仰刷新運動家が、スポーツを攻撃することに不満の意を表明し、彼らの「田舎のアスレティック・スポーツに対する敵意ときならない。これらのスポーツは筋力を鍛え、体格を立派にし、豪胆で勇敢なる偉業における競争心を促進させる。不粹な罪にさえ、名誉や宣威、榮光への追求心を無意識のうちに気づかせ教導するものである」と述べていたという²²。さらに、先に示した論稿の中で、コベットは、「スポーツマン教育」という表現を残していた。



ヘンリー・オルケン筆、銅版画
「てんを狩る」
出典：C.J. アッパレイ『スポーツマンの生活』(1842)

「...私は常々息子たちにスポーツを奨励してきた。彼らは14、5歳までに、馬や獵犬に囲まれながら、野外や農場で毎日大方の時を過ごしたものである。夜は蜡燭の明かりを灯して、狩猟や銃猟、獵犬、乗馬について書かれた本を読んでいた。私はこの種の本や出版物を息子たちにたくさん与えてやったのである。」

「...私自身もかつてスポーツマン教育を受けたと記憶している。9歳から10歳の頃には、野兎用の獵犬を追いかけて遊んでいた。獵犬を追いかける、小麦娘や豆娘を搔き分け、みやまがらすの巣を見つけ、足にはとげがいっぱい刺さった状態で、薄暗くなった巾をお腹をすかして家に戻ってきたものである。[遅くなりすぎた消として]夕食を抜きにされても、鞭で打たれなかったことを喜んでいた。叱られることがわかっていても、私を拘束することはできなかったのである。説教されようが、怒鳴られようが、獵犬の声が聞こえてくると、私の心はすぐさま体から飛び出る準備をしてしまった。...だから私は、息子たちには、この同じ授業を自由に選ばせてやっている。それが私なりの教育方法である。他のやり方とてももちろんある。」



ヘンリー・オルケン筆、銅版画

「かわうそハンティング」

出典：C.J.アッパレイ『スポーツマンの生活』(1842)

トのような社会的影響力のある急進主義的批評家が以上のような叙述を残していたことは、当時の狩猟やブラッド・スポーツに対するスポーツ論として貴重である。彼のような政治的急進主義者の残した発言にも驚くものがあるが、当時のスポーツ・ジャーナリストたちのものは、もっと過激にアニマル・スポーツの残酷性を否定するものであった。

V ブラッド・スポーツ擁護の姿勢と動物への配慮

近代の視座からは、ブラッド・スポーツ支持の態度と動物への配慮を主張する近代的態度の萌芽は嗜み合うものではない。19世紀のはじめというまさにこの両者の主張が衝突する時期が到来したとき、スポーツ・ジャーナリストたちは彼らのスポーツについてどのように弁明し、狩猟や多くのブラッド・スポーツを存続させようとしたのであろうか。

動物が関係したブラッド・スポーツとしばしば同じような非難に曝されたボクシングについては最も強力を立場からこれを支援し、あらゆる階級のスポーツについて叙述し、この時期のイギリスでスポーツ・ジャーナリズムを専門の職業として独立させる役割を果たしたスポーツ・ジャーナリスト、ピアス・イーガン¹⁴は、「圓錐は背から行われてきた」、ゆえに「慣習的統利である」、あるいは「外國でも行われている」、「魅力的なスポーツである」と断言した¹⁵。

カニンガムも指摘しているように、同じ頃、爱国的立場からボクシングを擁護する者も多數現れ¹⁶、スポーツに対するその種の議論は、スポーツに魅せられている者の感情的スポーツ愛護の弁と近代的合理主義が嗜み合わない形で衝突するものであった。もっともこれらは、ものさしすら不明なまま議論されていた。というのも、動物スポーツに魅せられていたスポーツマンが、ブラッド・スポーツから享受していたものは、動物という対等なる自然性以外のなものでもなかつたのに対し、この自然が人間と同じものさしで測ることが可能な配慮の対象となつたとき、すでにその自然性は、人間の支配物としての動物という都市的近代的な共生関係へと変化していたからである。すなわち、田舎の生活にあった共生から都市社会における動物との共生へという転換である。それだけではない。狩猟主

義者や1824年に設立したR.S.P.C.A（王立動物虐待防止協会）による、とりわけ牛骨めに効を奏したブラッド・スポーツに対する攻撃の根拠には、ジェントルマンのフィールド・スポーツ、すなわち狩猟に対しては遠慮がちという歎きはあったが、それなりの効果を發揮した。さらに、動物虐待が神の意志に背く行為であると唱える宗教・倫理学者の声が次第に反映されていく時代を迎えていたのも事実であった。

この種の動物虐待に反対する議論の根拠は、それなりの正当性を伴っていた。しかし、19世紀初期のスポーツ権威論者のブラッドに対する視線と、同じ時期のスポーツ非難者の視線は、同じ対象を両極端から分解して捉えるものであったことを指摘しておきたい。そこにあったブラッド・スポーツそのもの変化があったわけではない。自然性理解に危機が生じたと見るべきであろう。片側の一派は、ブラッドのもつ自然を今日では野蛮に思われる行為も含めて自然の法則の中でこれを理解し、「生と死」を同一の自然性理解の中に包摂していた。決して人がアン・フェアに手を下した結果ではなく、動物と人間との真剣勝負のフェアな闘いの結果、動物が迎える死や、動物と動物どうしの生死を懸けた闘いの結果は、自然の一部と捉えられていたのである。必然的に、目の当たりにした「死」から、「生」への執着心や「生」そのものを感じ、それ以外の活動でははっきりと実感することのできなかった尊い生命力、精神力、意志、躍動感といった、理由なく人を魅了し続けた貴重な成分（=かつての古いスポーツ的センス）を共有していた。一方、もう片側の局面に立つ者は、同じブラッドを「生」と「死」に分離し、生に対置される衝撃的「死」を目の当たりにする奇観として捉えた。さらに、「痛み」や「苦痛」の発見を通して、「死」につながる非人道的行為、死の実感という耐えがたいサンプルをそこに発見してしまった。その結果、これを非文明的な行為と信じることに疑いをもたなくなつたのである。

それらは両者が莫大であったと言えよう。動物を道具のように扱って楽しんでいると改革主義者には映っていた狩猟やアニマル・スポーツを楽しむスポーツマン、下層民衆の側は、ブラッド・スポーツを通じて、動物との闘いを人生における「自然性」の過程として切り離すことのできない対等なるものと考えていたの

に対し、動物に配慮を加えて人間の支配から自由にさせようと試みた側は、無意識のうちに実は人間による動物支配の新たな構造を別の形で進めるうことになった。しかし、この当時、両者の議論の地平の共通性体である自然性は、同じ行為の媒体にあてられた光の陰影として互いの議論を共存させていたひとつの実体であったことに人々は気づいていなかつたのである。

Ⅴ　まとめ

以上のこととは、動物に接近していくとする新しいスポーツ的展開によって根拠を補足できる可能性があるように思われる。分解された自然性の片側半球だけでは、やはり人が享受し得なかつた自然性があることに、再び人類は気づき、そこに回帰する必要性へと接近しつつある今日があるのでないだろうか。人類という言い方は大きさで、イギリス近代の状況をある程度輸入してしまった地域の、ポストモダンの現象というべきであろう。イギリスの前近代的ブラッド・スポーツを、今なお行き続いている地域は地球上に存在しているし、また、單純に回帰という語弊を招くかもしれない。

すなわち、21世紀の展開は、断るまでもないことであるが、決して単純なる回帰ではなく、21世紀的变化である。牛奇めや熊奇めの娛樂が再び、市民権を得ることはまずないであろう。とはいって、動物とスポーツの関わりは、何も今に始まったことではない。むしろ、近代という特殊な時期がこれを隔離し隠蔽させたという意識が必要である。かつて動物はスポーツの対象物であり、スポーツは動物そのものであった。しかし、スポーツは文明が支配するものとなり、動物は文明の外にあるべき野蛮として排除されたり、文明が支配する高尚さの中で保護された。ところが、文明は、再び、自然や動物から人間のための安らぎや新たな可能性を引きだそうとしている。これを文明の欺瞞というべきか、それとも人間の尊大さの放棄なのか、自然との共生というべきかは、本稿では結論を避けたい。しかしながら、もし、21世紀のスポーツが自然や動物に別の形で接近していく可能性があるとすると、それはイギリス19世紀のスポーツの質的変化の真の構造を見る限りにおいて、この種のスポーツ史的脈絡の上では何ら矛盾するものではないと言えるのではないだろうか。

注

- 1) J.Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, London, 1801, p.193.
- 2) H.Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution c.1780-c.1880*, London, 1980 *passim*; Neil Tranter, *Sport, Economy and Society in Britain 1750-1914*, Cambridge, 1996, *passim* but especially Chapter 2.
- 3) Tony Collins and Wray Vamplew, "The Pub, the Drinks Trade and the Early Years of Modern Football", *The Sports Historian*, 20-(1), May 2000, pp.1-17.
- 4) トランターは、ブリッド・スポーツの単純的衰退を認めない。しかし、それらが非難に曝された大きな理由は、地理的時間的差異が比較的大きい、公道での秩序、労働者階級の新しい時間規律といった望まずとも避けがたい環境面の変化の要因よりも、労働貴族が追い求めたレスベクタビリティによるものであるとする見解に重きを置いている。Tranter, *op.cit.*, p.10.
- 5) Richard Holt, *Sport and the British: A Modern History*, Oxford, 1989(1993), pp.28-43.
- 6) ジェイムズ・ターナー、(著第九一訳)『動物への配慮—ヴィクトリア時代精神における動物・宿み・人間性』法政大学出版、1994年、221-223頁。
- 7) 富浦隆治『多文化主義と共生—新しい歴史教育の指標—』溪水社、2000年、142頁。
- 8) William Cobbett, Chap.XII, *Rural Sports*, Item 369-370; in *Journal of a Year's Residence in the United States of America* (1818-19), Gloucester, 1819 (1983), p.201.
- 9) R.W.Malcolmson, *Popular Recreations in English Society 1700-1850*, Cambridge, 1973, *passim*. But especially, Chap.7 (c.f. 川島昭夫・浜田裕一・中房敏朗・松井良明共訳『英國社会の民衆娯楽』平凡社、1993年); 摂著『前ヴィクトリア時代のスポーツ・ビアス・イーガンの「スポーツの世界」—不味堂、1996年、第4章の項目「十九世紀の社会改革運動とスポーツ」148-153頁)。
- 10) 彼の急進主義への傾向を示唆する見解は以下の文献より。E.P.Thomson, *The making of the English Working Class*, London, 1963 (1990), p.820; Edward Royte & James Walvin, *English Radicals and Reformers 1700-1848*, Brighton, 1982, p.94; A.Burton, *William Cobbett: Englishman*, London, 1997, p.117.
- 11) G.D.H.Cole, *The Life of William Cobbett*, Westport, Connecticut, 1947, p.80, p.120.
- 12) クーナー、前掲訳書、26-27頁。
- 13) Bruce Haley, *The Healthy Body and Victorian Culture*, Cambridge, Massachusetts; London, England, 1978, p.123.
- 14) William Cobbett, Chap.XII, *Rural Sports*, Item 374-375; in *op.cit.*, pp.203-4.
- 15) *Ibid.*, Item 373, pp.202-3.
- 16) c.f. 沢橋「19世紀前半イギリスにおけるスポーツ・ジャーナリズム—スポーツ専門紙の成立とビアス・イーガン…」『スポーツ史研究』第10号、1997年、71-89頁。
- 17) Pierce Egan, *Pierce Egan's Book of Sports, and Mirror of Life*, London, 1832, pp.153-4.
- 18) Cunningham, *op.cit.*, p.49.

参考文献

歐文献

- Apperley, Charles James, *The Life of a Sportsman. By Ninrod: with thirty-five coloured illustrations by Henry Alken*, London, 1842.
- Burton, A., *William Cobbett: Englishman*, London, 1997.
- Cobbett, William, Chap.XII, *Rural Sports*, Item 369-375; in *Journal of a Year's Residence in the United States of America* (1818-19), Gloucester, 1819 (1983).
- Cole, G.D.H., *The Life of William Cobbett*, Westport, Connecticut, 1947.
- Collins, Tony and Vamplew, Wray, "The Pub, the Drinks Trade and the Early Years of Modern Football", *The Sports Historian*, 20-(1), May 2000.
- Cunningham, H., *Leisure in the Industrial Revolution c.1780-c.1880*, London, 1980.
- Egan, Pierce, *Pierce Egan's Book of Sports, and Mirror of Life*, London, 1832.
- Haley, Bruce, *The Healthy Body and Victorian Culture*, Cambridge, Massachusetts; London, England, 1978.
- Holt, Richard, *Sport and the British: A Modern*

- History*, Oxford, 1989(1993).
- Malcolmson, R.W., *Popular Recreations in English Society 1700-1850*, Cambridge, 1973 (c.f.川島昭夫・沢田浩一・中房敏朗・松井良明共訳『英國社会の民衆娯楽』平凡社、1993年)。
- Royle, Edward & Walvin, James, *English Radicals and Reformers 1760-1848*, Brighton, 1982.
- Strutt, J., *The Sports and Pastimes of the People of England*, London, 1801, p.193.
- Thomson, E.P., *The making of the English Working Class*, London, 1963 (1990).
- Tranter, Neil, *Sport, Economy and Society in Britain 1750-1914*, Cambridge, 1998.
- 翻訳書・和文献
- 池田恵子『前ヴィクトリア時代のスポーツ—ビアス・イーガンの「スポーツの世界」—』不味堂、1996年。
- 池田恵子「19世紀前半イギリスにおけるスポーツ・ジャーナリズム—スポーツ専門紙の成立とビアス・イーガン—」『スポーツ史研究』第10号、1997年。
- ジェイムズ・ターナー、(京蔵九一訳)『動物への配慮—ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』法政大学出版、1994年。
- 宮所隆治『多文化主義と共生～新しい歴史教育の指標～』漢水社、2000年。

図版出典 : Apperley, Charles James, *The Life of a Sportsman*, By Nimrod: with thirty-five coloured illustrations by Henry Aiken, London, 1842.

21世紀におけるオリンピックの諸相 —ドーピング問題と発展途上国からの接近—

金田 英子（長崎大学）

はじめに

今回のシンポジウムをもふえた近年のスポーツ史研究から、21世紀のスポーツ像を描出してみると、まず、世界中に広がりを見せている近代スポーツ、とりわけオリンピック種目の対象とされるようなメジャーなスポーツが、IT革命の波にのりながらメディアとの関係をより一層強めていくものと予測される。そしてその一方で、それぞれの地域や民族固有の文化に閉じられているエスニックスports、ヨガや太極拳など伝統的な東洋的身体觀を根底に持つスポーツ、あるいはニュースportsなどといった、近代スポーツとは質の異なるスポーツへの関心も模索されてゆくものと整理されよう¹⁾。

この前者のほう、すなわち近代スポーツの範囲に位置づけられるオリンピックは、回を重ねるにつれて規模が巨大化し、国家や民族間の複雑な問題、商業主義の台頭、勝利至上主義による倫理的・法的問題等の課題などが表面化してきている。それと比肩するかのようにオリンピック批判の声も高まっており、大会の見直しや開催そのものを廢止すべきとする反オリンピック派も少なくない²⁾。しかし、たとえオリンピックが廃止されたとしても、それにとて代わって各種スポーツ競技が世界選手権という名のもとに種目別に実施されることは明白であり、オリンピックに伏在している諸問題が抜本的に解決されるとは考えられにくい。

そこで、21世紀にオリンピックが抱えている諸問題のうち、本稿では、まず勝利至上主義がもたらしているドーピング問題について考察し、ついでオリンピックの拡大に伴う発展途上国問題について検討してみることにする。

I. 近代スポーツとドーピング問題

幼少の頃、映画『2001年宇宙の旅』³⁾を見ながら、

自分が大人になる頃には、人が自由に地球と宇宙往来するようになるのだと夢を描いたものだった。それから幾年かが経過し、ついに2001年を越えたが、予想していたほどには宇宙開発は発展しなかった。しかしながら一方で、医学は日まぐるしい進歩を遂げている。1900年にド・フリースらがメンデルの法則を再発見し、遺伝子学が幕を開けて以来、インフルエンザ菌が解説され、酵母菌やショウジョウバエなど30種を越す生物種のゲノム解読がすでに完了している。さらに、このわずか100有余年のうちに、ヒトゲノム全塗基配列の概要の解説も達成され、すでに一部は臨床的応用が試みられている。その勢いにのるかのように、スポーツの世界においても「いたちごっこ」と称されているドーピング問題は、年々エスカレートしてきたが、いまや人工生殖や遺伝子操作レベルでの「ドーピング」問題が語られる新たな局面を避けようとしている。ここでは、従来のドーピング問題への取り組み方と、新たな「ドーピング」問題を概観してみることにしよう。

1. ドーピング禁止の経緯とその理由

今日「ドーピング」は、スポーツ選手が競技を行う際、体力を集中的に發揮させることを目的として、ある種の薬物の内服や注射を行うことを意味する言葉として定着している。しかし、人為的な方法によって身体能力を高めようとする発想は、その方法を問わなければ、人類発祥の歴史にまでさかのほることができよう。

未開社会では、「たたかい」は儀礼として行われることが多く、競技者は「たたかい」をして神や宇宙と交わり、その「たたかい」は年中行事的に繰り広げられていた。そして、いわゆるドープと呼ばれている中枢神経系興奮薬や麻薬性の鎮痛薬は、必ずしも身体的能力の向上のためではなく、個々の文化的意味合い

を持って使用されていた。したがって、記録更新との「たたかい」に焦点をおいた近代スポーツのように、薬物を使用しパフォーマンスを向上させることが健全なる肉体を破壊するという発想は意識されなかった。

dopeという言葉が初めて英語の辞書にのったのは1889年のことで、そこでは、アヘンや麻薬剤をませたもので、出走前競走馬に飲ませる興奮剤との説明がなされていたという。すなわちこの時点ではまだ、近代スポーツの領域におけるドーピング問題が今日ほど大きく問題化していなかったことが窺える。ドーピング・コントロールの開始も、競馬界のほうが早く、1911年のウィーンを最初に、1930年には組織的に行われていたと言われている。

しかし、それまでにスポーツの場に全くドーブが使用されなかつたわけではない。スポーツ界における最初のドーピングによる事故例は、1886年、ボルドー～パリ間の600kmサイクルレースにおけるイギリス選手の死亡であると報告されている。その後、1900年代に入るとドーピングによるスポーツの事故例が多数報告されるようになり、特に1945年から1980年の間には、ヨーロッパだけでも自転車選手とサッカー選手の死亡例5件が記録されている。そして、1960年のローマオリンピックで、自転車選手1名死亡、2名重傷といった事故が契機となって、オリンピック委員会がアンチ・ドーピングに動き出すことになり、1968年のグルノーブル冬季オリンピックからドーピング・コントロールが実際に開始された。したがってスポーツの世界でアンチ・ドーピングが重視されるようになったのは、1900年代後半からとごく最近のことである¹⁾。

現在、日本オリンピック委員会は、ドーピングが禁止される理由に、「1. スポーツフェアプレーの精神に反する、2. ドーピングは社会悪になる、3. ドーピングは選手の健康を害する」といった3点を骨子として挙げている²⁾。以下、これらについて検討してみよう。

まず最初に、「スポーツフェアプレーの精神に反する」ということに関しては、①薬物を使用することは公正な競争を損ね、フェアプレーの精神に反し、また、②スポーツが薬物に汚染されることは、スポーツの社会的価値を損ねる、とされている。

しかし、薬物を使用しても本人の肉体がプレーする

限り、自己の限界への挑戦であることは間違いない。したがって薬物使用を認め、ドーピング・プログラムの公表を義務づければ、それは‘薬理学的な公平性’が保たれることになり、フェアプレーの精神に反するとは一概に言えない。

つぎに、「ドーピングは社会悪になる」とされていることに関しては、スポーツを目的にしないでも、有名選手のような強靭な肉体に籠めて薬物に走ったり、薬物欲しさに犯罪につながりかねないと説明されている。しかし、この問題はドーピングに限られたことではなく、麻薬犯罪にもしばしば見られることである。これらは薬物が容易に入手できる環境が拍車をかけているのであって、薬品の管理そのものを見直すことに対処も可能である。

そして3番目に、「ドーピングは選手の健康を害する」としている。すなわち、副作用である。ドーピングが原因で、生命の危機に瀕したり、さまざまな後遺症に悩む例は多数報告されている。薬物ドーピングの最大の問題点と言えよう。しかし、全盛期をむかえている選手たちの中には、事の深刻さよりも勝利を得るためにドーピングを優先する者もいる。

現在、これらの理由から、IOCの「医事規定」では、禁止薬物が検出されると「ドーピング陽性」とされ、1回目は2年間の資格停止、2回目となると終身の資格停止という処分が定められている。このように、オリンピック委員会はアンチ・ドーピングに拘泥しているが、前述のように、その根拠については十分に説得しきれているとは言えない。そのため一部ではドーピングの解禁が主張されている³⁾。しかし、ドーピングの根本的問題性は、勝利のためには人為的な肉体改造をも認めるということにある。そこで、スポーツ界でドーピングを容認することが、将来どのような端麗に発展しかねないかをつぎに検討してみたい。

2. 人工生殖・遺伝子工学の発展とドーピング問題の

変質

ヒトゲノムの解読が、にわかにスポーツ界に影響を与えてつつある。20世紀は‘ドラッグ・ドーピング’の時代であったが、21世紀は‘バイオテクノ・ドーピング’の時代になる兆しを見せている。このことに関する2000年に公表された3つの見解を次に紹介する。

(1) 同年6月に、ヒトゲノム全塗基配列の概要の解説が達成され、世界を揺るがせた。その3カ月後には、デンマークのコペンハーゲン筋肉研究センターに所属するアンデルセン氏 (Jesper L. Andersen et al., Copen hagen Muscle Research Center) らが、「Muscle, genes and athletic performance」と題する論文を発表した。そこでは、遺伝子操作で筋肉を増強した選手がいずれオリンピックに参加するようになり、薬物検査だけでは不正を明らかにすることが非常に困難になることを警告している。すなわち、遺伝子操作を施した運動選手の筋肉中に残る遺伝子の断片やタンパク質を、生体外物質として検出することができなくなるというものである。

もちろんこれまでドーピングに対し、何ら策が講じられなかつたわけではなく、1999年11月には国際オリンピック委員会の働きかけで「世界反ドーピング機構 (WADA)」が設立されている。さらにシドニーオリンピックでも、ドーピング検査が大幅に強化され、従来の尿検査に代えて、hGHなどの新薬の分析が可能とされる血液検査が初めて導入された。しかしながら、このバイオテクノ・ドーピングが、薬物ドーピング問題における「いたちごっこ」に終止符を打つことになる。なぜならば、バイオテクノ・ドーピングに対してはいかなる検査の強化も無効であるからである。

(2) また、同年2月に、AAP通信は、サウスオーストラリア大学のケバン・ノートン博士 (Dr. Kevin Norton, University of South Australia) が、近い将来、優秀なスポーツ選手の精子や卵子が、競馬のサラブレッドのように投資の対象になるだろうとの論文を発表し、国内から強い反撃を受けていることを報道した¹¹。ノートン博士は、米国で一年間に約十七万人の女性が、第三者からの提供精子で人工授精している例を挙げ、競馬と同じように、より優秀な選手を産むために、オリンピックなどで大活躍した選手の精子、卵子が活用されるようになり、スポーツ選手の遺伝子バンクの実用化は時間の問題との見方を示した。このような人工生殖で誕生させられた選手は、薬物ドーピングとは異なり、自己の意志に基づいて身体を改造したわけではない。しかし、薬物ドーピングとは質を異にするとはいえ、ヒトを改造するという意味では共通している。バイオテクノロジーの進歩による人間の生

殖のあり方の変化が「ドーピング」問題に質的な転換をもたらすことになる。

(3) さらに、同年4月に、オーストラリアのABC放送は、デ・モントフォード大学のアンディー・マイヤー博士 (Dr. Andy Miah, De Montfort University in UK) をゲストに、Engineering athleticismといったタイトルの特集を組んだ¹²。そこではマイヤー氏は、やがて遺伝子工学で生み出された競技者が、人間の肉体的限界に達してしまうことを予想し、そのような限界に到り、記録を破ることがもはや不可能となつたとき、人々は何をスポーツに期待するかを問いかけている。

薬物ドーピングの解禁は勝利のための肉体の改造を容認することになり、結局は以上のようなバイオテクノ・ドーピングを加速させることになるのであろう。もっとも、ヒトゲノムの全塗基配列の精密解読から遺伝子の機能解明までには、まだ多くの時間が必要ることは言うまでもなく、すぐさまEngineering athleticismの危機が現実化されることはない。だが「技術」ばかりが先走りし、それに「倫理」が追いつかない現在、この予期される事態をもっと真摯に受け止める必要があろう。

II. 発展途上国とオリンピック

「21世紀が幕を開けた」とは言うものの、西暦2001年1月1日は、イスラム暦では1421年10月5日に、チベット暦では2127年11月7日にあたり、いずれも新年にはなっていない。しかし、大晦日のカウントダウンでは、世界の主要な都市を衛星放送がリレーし、時差こそあるものの、新しい世紀への幕開けに盛り上がりを見せていた。このことは、イスラム圏やチベットにとって、西暦2001年1月1日は、グレゴリオ暦に見られる西欧中心の、「ローカル」な物の見方にすぎないということを示している。

同様に、近代オリンピックは、「勝利至上主義」や「記録万能主義」といった、近代スポーツの本質をよく過剰な「競争原理」を生み出しているが、そのような価値観とは全く無縁のオリンピック像もある。それは発展途上国からの参加である。そこでここでは、根点を発展途上国に置き、20世紀のオリンピックに代表される国際大会を振り返ってみたい。

表1 所得別に見るシドニーオリンピックの参加国数

所得グループ ¹⁾	サブグループ ²⁾	サブサハラ・アフリカ 東・南アフリカ 西アフリカ	アジア 東アジア・太平洋地域 南アジア	ヨーロッパ・中央アジア 東欧・他の中央アジア ヨーロッパ	中東・北アフリカ 中東 北アフリカ	アメリカ大陸
低所得		18/18 21/21	5/5 5/6	8/8	1/1	3/3
中所得	低位	3/3 2/2	12/14 2/2	12/12	4/5 4/4	18/18
	上位	4/5 1/1	3/3	6/6 1/2	4/4 2/2	11/13
高所得	OECD諸国		4/4		18/18	2/2
	非OECD諸国	0/1	5/9	1/1 4/7	4/4	6/8
分類不可 ³⁾ 6						

(上段：参加回数 下段：所得公示国数)

1) 所得グループの分類は、1997年の1人当たりGDPを用いている。なお、各グループは、低所得=785ドル以下、低位中所得=785~3125ドル、上位中所得=3126~9655ドル、高所得=9655ドル以上、である。

2) シドニーオリンピックへの参加は認められるものの、所得・地域による区の分類に掲載されていない国の数を示す。

1. 國際大会への参加とその実状

近代オリンピックは、世界中の人々がスポーツという同じ目的を持ち、同じ場所に集い、競うという平和の意味が込められていると言われている。しかし、それぞれの民族が持つ国情は千差万別である。

所得別に見るシドニーオリンピックの参加国は、表1から明らかなよう低所得国が圧倒的に多数を占めており、不参加の国は中所得上位以上に該当する小国、あるいは島国が多く見られる⁴⁾。このことからも、いかに発展途上にある国々が、国際大会を意識し、国家の威信をかけているかが窺える。では実際に、低所得国からの国際大会への参加者は、どのような体験をしているのか、その一部を紹介しよう⁵⁾。

事例1.

10年ほど前のことである。国際大会に参加するために選手たちは持てき届の砲丸を持ち空港に向かった。そこに待ち受けていたのが荷物検査。砲丸を見たことのない検査官は、それを爆弾だと思い、空港は一時騒然とした。しかし、陸上競技の一種目に用いられる器具であることが理解されると、無事出発できた。選手にとっては、飛行機を見るのも乗るのも生まれて初めてのことである。窓から見える空を指さし、「あれは海か?」とたずねる興奮ぶりだ。機内食に出てくるフォークとナイフの使い方もわからず、周囲を見回してみようみまねで見たことない料理を口にする。トイレに行こうと思い中に入ってるが、見たことない洋式だ。思わず座席に戻り、コーチに使用方法を聞いてみる。何時間が経ち目的地に到着した。そこは、今まで

に見たこともない電気の光に覆われた空間の広がりを見せていた。乗客は流れるように入国審査へと自動的に進むが、エスカレーターの乗り方がわからない。階段が動くなど、信じられないことだ。だが、どうにか、動き続けている鉄の板に、バランスを保ちながら両足をそろえて乗る。入国審査は問題なく終わった。空港を後に、選手村まで電車で向かう。どうやら切符を買わなければホームには行けないようだ。駅員に指さされるところを見ると、それは券売機、「機械がお金を食べてしまう光景」に唖然とする。何もかも初めて見るものばかりで、右往左往しながら電車に乗る。電車は静かに走り出し、間もなく海底トンネルを通過するという。トンネルの中では魚が泳いでいるのが見えると期待するものの、暗闇のままで終わってしまった少々期待はずれであった。1時間が、途方もなく長く感じられる1日だ。

事例2.

選手村に入る。大会役員の人達に案内され、宿泊棟に入り一通りの設備説明を受けるが、見たことないものばかりなのでよく理解できない。あらためて、シャワーの使用方法をコーチに聞き、當時お湯が蛇口から出てくることに驚きを隠せない。自分たちの村では瓶に水を汲みに行くだけでも片道30分の日課である。村の店先で見たことはあるが、高くて買えないシャンプー。これ1本でジャガイモ20kgは買える。1~2回使い、家族の土産を持って帰ろうとカバンに詰め込む。大会4ヶ月。宿泊棟を管理している事務局の役員が、シャ

ンプ…の使用本数が他の県に比べ非常に多いことに気づき、以後、空ボトルと引き替えに新しいものを渡すよう方針を変える。

開会式数日後、自分が出場する種目の競技が開始された。太極拳一実は、話に聞くだけで経験は全くない。衣装はスポーツ雑誌を見て仕立ててきたので、他国の選手に遜色がない。コーチは、他国の選手の動きを見よう見まねするよう指示する。

また、陸上競技にエントリーした選手が、会場内にスポーツ用品販売店があることに気づく。これまでに国内で、試合があるたびに仲間たちと一緒にしないスパイクを廻し廻してきたため、スパイクのピンが錆ついてしまい取り外しがきかなくなっている。これは絶好の機会だと思い、スパイクを店員に見せてピンがどれいかを聞いてみる。店の人は、あまりにも使い古されたスパイクを見て、真新しいスパイクを一足無駄で提供することにした。

帰国日になった。しかし、選手・役員の何人かがない。試合終了後、そのまま行方をくらましたしまったのである。大会が終わってしまった以上、自分たちで延泊する予算もないで、とりあえず行方不明の選手を残したまま一行は帰国する。数カ月後、行方をくらましていた選手がひょっこり帰国した。友人のところにしばらく滞在していたようだ。しかし、そのような行為に責任を感じることもなく、村では国際大会に出場したスポーツ選手として英雄扱いされている。

このように発展途上国たちの選手は、試合に臨む以前に様々なストレスやカルチャーショックに直面している。さらには、トレーニング施設や練習方法、装備などの点でハンディーを抱えている。スポーツの場ではフェア・プレーが重視されている。しかし、競技そのものはルールにしたがって形式的に公平に実施されるとはいえ、先進国と発展途上国の中では競技以前の段階で、すでに公平さを欠いているのである。

2. オリンピックの国内への影響

—ネパールの場合—

シドニーオリンピックでは、ネパールからの出場選手は、陸上競技の男子5000mと女子100m、射撃の10mエアライフル、そして水泳の50m自由形に2人と、計5名であった。それに對し、役員は、皇太子ディベ

ンドラ殿下をはじめ、文部大臣夫妻、ネパールオリンピック委員会委員長夫妻およびその秘書夫妻、記者など計12名であった。つまり、オリンピックに直接關係のない人物が、国を代表して遠征する事態が、平然として行われているのである。出場選手以外の者にとって、オリンピック運営は、正に夢の楽園への官費による物見遊山である。したがって、水面下では誰が役員としてオリンピックに参加するかといった、激しい政治的かけ引きが展開されている。すなわち、ここではオリンピックが掲げている平和への貢献やスポーツを人類のために役立てるなどの趣旨は二の次となっている。

2001年シドニーオリンピックは、ネパールでも話題となり2大新聞社も開会式の模様を紙面に大きく飾った¹⁰。なかでも、Kantipur紙はその内容も、本国からの出場選手の紹介はもちろんのこと、オリンピックに採用されたマスコットの紹介から、ドーピングの新しい検査方法に至るまで情報で満たされていた(写真1)。一方、電気の普及に、マス・メディアの発展があいともない、テレビの販売台数は急上昇し、首都では、どこへ行ってもオリンピックの画像が目に飛び込んでくるほどの熱狂ぶりであった。このようなオリンピックの報道・放映の国内への影響は、着実にネパールを変化させている。

まず第1に着目すべき点は、先述したようにオリンピックや国際大会の実況がテレビの普及率の向上に寄与していることである。その結果、電気すら普及していない自給自足の山岳地帯などと、近代文明が押し寄せている都市およびその周辺とでは、娛樂の形態が異なるものになってしまった。そしてそれが、教育の質に格差をもたらし、貧富の差をさらに拡大しているのである。例えば、電気が普及し、テレビやインターネットが使用可能な地域では、画像をとおし入ってくる様々な情報から多くのことを学んでいる。ところが、電気が普及していない地域では、まず、テレビやコンピューターが、どのような形のもので、何をするものであるかの説明から始めなければならない。しかも、それらは日常生活においては、全く必要とされないものである。先進国との文明を積極的に受容する地域と、そこから取り残されていく地域との差は、今後ますます拡大していくことは容易に推察できよう。



写真1 カンティブル新聞〔日刊／発行地：カトマンドゥー〕とシドニーオリンピック報道
(2000年8月17日発行)

第2に、テレビによるスポーツの実況放送は、娯楽であると同時に、ルールを知る絶好の機会となる。国内でのスポーツ活動においては勝利至上主義が蔓延しているが、テレビ実況によって知られたルールが試合の勝利を主張する口実となったりする。例えば学校教育レベルでは、体育教師やスポーツ審判員の指導が徹底されていないため、試合中にテレビ実況で知った新ルール適用の有無をめぐり常に口論が避けられない。たとえ従来までのルールを「ローカル・ルール」と定め、それに則した試合や競技を実施したとしても、新ルールの適用を理由に試合が中断されてしまうことが希ではない。

そして第3に、他国に見る女性のスポーツへの参加が、フェミニズムを拡張している。例えば、連日新聞報道されたシドニーオリンピックの期間には、「オリンピックにみる女性たちの100年」と題し、女性のオ

表2 オリンピック参加選手にみる女性の比率(%)

開催年	比率	開催年	比率	開催年	比率
1896	0	1932	9.56	1972	14.75
1900	0.83	1936	8.29	1976	20.68
1904	1.71	1948	9.47	1980	21.53
1908	1.47	1952	10.62	1984	23.05
1912	2.81	1956	11.77	1988	25.82
1920	2.06	1960	11.41	1992	28.89
1924	4.43	1964	13.44	1996	34.40
1928	9.83	1968	13.89	2000	38.00

表3 シドニーオリンピックで女子選手が男出場予選手を上回った参加国

国名	女子(人)	男子(人)
ルーマニア	109	104
中国	98	75
ウクライナ	13	11
リヒテンシュタイン	5	4
ナイジェリア	5	3
コスタリカ	2	0
ジンバブエ	1	0
香港(中国)	1	0
モザンビーク	1	0

リンピック参加の歴史を特集し、これまでの女性のオリンピック参加比率が、上昇の一途をたどっていることを示したり(表2)、シドニーオリンピックにみる男性と女性の参加選手入数を調査し、女性選手の参加が男性選手を上まわっている国を紹介し、例え女性選手が一人であってもオリンピックに参加している事例を報告している(表3)。これらはいずれも、国内における女性の社会上の地位拡張を主張する意図がある。

このように、オリンピックは間接的にネパールを変化させている。そしてそれは、ネパールのみならず多くの発展途上国に共通して言えることのかも知れない。

おわりにかえて—IT革命とスポーツ—

IT革命は、「見るスポーツ」の在り方を大きく変化させようとしている。すでに日本でも、プロ野球中継の中間に、Eメールで選手への質問を受けつけ、それに選手が答えるといった新しいコミュニケーションの在り方が普及はじめている。また、シドニーオリンピックではすでに、ケーブルチャンネル向けの放送をインターネットプロトコール(IP)に変換したうえで、通信衛星経由で契約者のパソコンに配信するといった、パソコン向けにオリンピック競技を放送する試みがなされた¹³⁾。今後、自分の国の選手が出場する試合など、インターネットの画面上で自分の好みに合わせたスポーツ種目をプログラムし、観戦することができるようになる時代が予想される。

また、オリンピックを観戦しながら、その場で掛け金を積むことのできるスポーツ・ベッティングも可能性として指摘できる¹⁴⁾。このように、これまで「見るスポーツ」としての媒介であった一方的性のメディアが、メールを通してのコミュニケーションや賭博というように双方向性を持つようになる。このようなメディアの新しいあり方が、スポーツを「する人」と「見る人」との関係にどのような影響をおよぼすことになるのか、議論される問題は無数にあると言えよう。

注

- 1) 東洋的身体觀については、「なぜ『氣』なのか?—『氣』アームのスポーツ史的意味を探る」平成6年度(財)水野スポーツ振興会助成研究報告書(1995年)に、

- ニューススポーツについては、「ニューススポーツとは何か～そのスポーツ史的考察」平成4年度（財）水野スポーツ振興会助成金研究報告書（1993年）に詳述されている。
- 2) 反オリンピック論については、「近代オリンピックの批判的検討」（近藤ほか 1996年）を参照にされたい。
 - 3) Stanley Kubrick (1988) 2001: A Space Odyssey.
 - 4) ドーピングの歴史については、「スポーツとドーピング」（浅見ほか編 1984年）pp. 261-262を参照。
 - 5) 日本オリンピック委員会のアンチ・ドーピングについては、アンチ・ドーピング・ガイドブック【非売品】を参照。
 - 6) その一部は「ドーピングを倫理する」（友添 1998年）pp.71-72でもとりあげられている。
 - 7) Muscle, Genes and Athletic Performance (desper L. Andersenほか 2000) を参照。
 - 8) 英同通訳（2000年3月1日）
 - 9) Radio National's The Sports Factor 28/04/00, ABC (Australian Broadcastong Corporation)
 - 10) 表1は、世界開発銀行1998/99に掲載されている、所得・地域による国の分類（1996年）pp. 481-482をもとに作成したものである。
 - 11) これらの事例は、第12回アジア競技大会広島（1994年）に参加した发展途上国からの選手、およびオリンピックやその他の国際大会に参加した、ネパールスポーツ委員会役員、ネパール文部省役員、ネパールサッカー代表選手などの話をもとに記述した。
 - 12) ネパール語の2大新聞紙は、政府発行のGorkhapatraとカトマンドゥで発行されているKantipurが挙げられる。
 - 13) 動画による実況中継については、放映権を持つテレビ局の競利譲渡という理由で、国際オリンピック委員会（IOC）が禁止しており、解禁はアテネ五輪以降に先送りされた。
 - 14) 賭については、当該国の法律に基づくので、オリンピック委員会が規定をつくらない限り、開催地によっては合法となる。

文献

- Jesper L. Andersen, Peter Schjering, Bengt Saltin, Muscle, Genes and Athletlic Performance, *Scientific American*, September, 2000, pp.30-37.
- Kantipur (Nepali), published in Kathmandu, 浅見俊雄、宮下充正、渡辺謙樹（1984）スポーツとドーピング。現代体育・スポーツ体系第11巻、講談社。pp.261-278。
- 小椋博經修（1996）新・スポーツ文化の創造に向けて。ベースボール・マガジン社。
- 海外経済協力基金開発問題研究会（1999）世界開発報告1998／99、東洋経済新報社。
- 金芳保之、松本芳明（1997）現代生活とスポーツ文化。人修館書店。
- 近藤直彌、加孝幸、真田久、友添秀則、関根正美（1996）近代オリンピックの批判的検討。体育原理研究27, pp.35-57。
- 柴川恒夫（1988）「たたかい」の文化。is41, pp.52-55。
- 友添秀則（1998）ドーピングを倫理する。体育科教育47, pp.70-72。
- 日本オリンピック委員会、アンチ・ドーピング委員会編（1999）アンチ・ドーピング・ガイドブック【非売品】。

新たなるスポーツ文化にむけて

多賀谷 貞吾（神戸市外国語大学講師）

1. 視覚偏重の現代社会

太宰治の小説「富嶽百景」は、江戸の画家が描く富士の頂が鏡像に過ぎる、という指摘の一文で始まる¹⁾。江戸時代は写真など存在しなかったから、画家は己が見たままの姿を描くしかなかった。手本となるモデルをもたらす以上、画家の肉眼が写真以上に険しい富士を描いたとしても不思議はない。鏡像の富士は画家の心眼によるデフォルメであり、想像力の產物である。ゆったりとした裾野をひく富士の姿を自然と受け入れるのは、写真という「洗礼」を受けた我々現代人の感覚である。

逆に写真という一種の証憑をたえずつきつけられる現代人は、おのずから対象を見る目を規定され、自由な見方が制限される。とくに現代は視覚情報の氾濫する時代である。テレビの出現とその普及は、おそらく20世紀最大の情報革命のひとつだったと思うが、この便利な機械は、本来見えるはずのない遙く(tele-) のものを可視化(vision)する。テレビのなかった時代には、遠隔の地に在するものは、話に聞いて想像するしかなかった。ところが今や海外の情報をテレビやインターネットを通して、可視情報として、しかもリアル・タイムで得られる。我々は、空間と時間の制約から解き放たれた、ある意味で便利な時代にいる。

しかしながら、見ることは信じることである²⁾。視覚情報はしばしば絶対であり、支配的である。映像は解釈や想像の余地を与えないからだ。視覚情報の氾濫によって、人間は想像力を失い、逆に目に見えないものに対する接し方が下手になった。スポーツでいえば、大衆はテレビというメディアに乗るスポーツのみがスポーツと思いこむ。視覚化されないスポーツは、存在しないスポーツも同然である。見ておもしろいスポーツ、刺激性の高いスポーツがクローズ・アップされ、映像に乗らないスポーツは切り捨てられる。オリンピックを頂点とする競技性の高いスポーツが、スポーツ文化の「中心」となり、それ以外のものは「周縁」へと

追いやられる。

ところで、今回のスポーツ史学会シンポジウムは、ジャック・マイヨール、今福龍太、稻垣正浩の3氏をシンポジストとする。テーマは「21世紀のスポーツ文化を考える—ジャック・マイヨールの世界を通して—」というもので、世纪の変わり目にふさわしいタイトルである。司会の竹谷和之氏が指摘するように「前近代スポーツは「近代」を通過するときにバナキュラー性を取り除かれ合理化されていった³⁾」わけだが、それはスポーツを「世界共通語」とするための必須の準備でもあった。つまり、世界中の誰もが理解可能なスポーツを目指して、近代論理に基づいた合理化を行うのである。スポーツの生前の、本来的要素を剥奪し、その一方でスポーツマンシップやフェア・プレイなどの近代的概念を付与する。その結果、近代スポーツは誰もが納得できるものへと変容する。こうして、スポーツを「国際語」とした世界コミュニケーションが可能となる。たとえば、オリンピック競技である。近代スポーツは、オリンピックを頂点とする競争原理の中で、人間の限りなき欲望に加え、國威発揚、すなわちナショナリズムの影響を受けるまま肥大化していった。その結果、近代のもちこんだ概念に対する反作用が生じた。すなわちドーピング問題などの矛盾が近年露呈してきたことである。近代スポーツは益々入りこんで、そこから抜け出す解決策を見出せないままである。

こうしたスポーツ文化の世纪末的危機を救うのは、スポーツ史研究をおいて考えられない。19世纪末に誕生した近代オリンピックから約1世纪を経た現在、嵐故知新的言葉どおり、スポーツの歴史を振り返ることで、新たなスポーツ文化の方向性が見出せるはずである。そこで、近代スポーツのアボリアから抜け出して、新世纪のスポーツ像を探る、というのが本シンポジウムの趣旨であると思う。そのヒントを、ジャック・マイヨール氏のスポーツ、すなわち素朴りの考え方、お

よりその身体技法から得ようとするものである。

さて、シンポジウムでは、まずジャック・マイヨール氏の発表に統いて、今福龍太氏が文化人類学の視点から、また畠原正浩氏がスポーツ史の視点から、独自の見解を発展させつつ、今後のスポーツ文化の方向性を探っていこうとした。私はシンポジウムを拝聴したわけだが、この3人のシンポジストたちに共通する、ひとつつの認識を感じとった。それは、視覚偏重の現代社会から脱却することを強く要請する、というメッセージである。そこで私の感じたままに、以下にこの問題を論じてみようと思う。

2. 人間は想像力をもつ唯一の動物（ジャック・マイヨール）

2. 1 見ることと想像すること

シンポジストのジャック・マイヨール氏は多くを語らなかった。講演中自ら「自分のことは忘れない。多くは語らない。」と繰り返していたように、自身の素潜り体験やそこから得られるスポーツ論を直接聞くことはできなかった。しかしながら、彼は重要なメッセージをさりげなく提示していたように思う。

まず、マイヨール氏は映画『グラン・ブルー』の批判から話を切り出した。この映画は彼自身をモデルとした作品だが、そこに描かれている自身の像が、あまりに本質とかけ離れたものだという。その結果、誤ったマイヨール像が世間に流布したことを探っていた。これは映画のフィクション性という単純な問題ではない。彼には映像というものに対する強い不信感があるようだ。人々は映画を見てジャック・マイヨール像を植えつけられる。そして、それが実体とは異なるものであると気づかない。「見る」と「想像する」ことは別であるというのが彼の意見である。さらに、彼はもうひとつエピソードを添えた。ハリウッド女優ソフィア・ローレンが自身のセクス・アピールを尋ねられ、「それは目に見える40%のものと、頭の中で想像する60%のもの」と答えたという話である。

マイヨール氏の話は、人間の感覚がいかに視覚情報に支配されるかを鋭く指摘するものである。見ることに拘泥すれば、想像力は減退する。マイヨール氏は「イメージは我々を現実から引き離してしまう」と言って、テレビのもたらす映像を批判した。そして、「人

間は想像力をもつ唯一の動物である」という印象深い言葉を残した。

ところで、近代文明は目に見えるものに価値をおく。スポーツでいえば、目に見える記録成績で争われる競技である。記録の数字に加えてオマーシャリズムの数字がそれに運動する。つまり金である。マイヨール氏は、このような「腐敗した」文明以前に、精神文明が存在したことを指摘する。すなわち、禅やヨガに例えられるような、自己の内面と向き合うようなスポーツを含んだものである。近代スポーツは、自己（エゴ）をさらけだし、我さきに優勝を争う。見えるものに価値を置き、見えないものは切り捨て、また見えないところでドーピングを行う。これとは逆に、マイヨール氏のいう禅やヨガというものは自己の存在を忘れる、自己否定の論理にもとづくものである。目に見えない部分を大切にする、という点で近代スポーツとはそのベクトルを異にする。

2. 2 ジャック・マイヨール氏の海との接し方

見ることと想像すること。マイヨール氏が提出したキーワードは、我々の想像以上に彼の深い内的体験に支えられている。ここ最近のマイヨール氏の関心は、人間の想像力にあるのだが、マイヨール氏がかように想像力を重視する根拠は何か。そのあたりの事情を、彼のこれまでの人生を振り返りつつ探っていきたい。そこで、マイヨール氏の海との接し方を、大きく3つの時期に分けて追ってみよう。

まず最初にスピア・フィッシングの段階¹⁾。一種のスポーツ競技として鉛で魚を突いて漁獲の多寡や大小を競うものだが、そのうち魚を殺すために悲り、それで一番になることに嫌気がさして、彼は競技をやめてしまった。そんな折、イルカのクラウンに純粋に潜ることの楽しみを教わり、「潜るために潜る」という第二段階に入る²⁾。これが映画にも大きくクローズ・アップされた、潜水記録を次々に更新していく時代である。ただ誤解してならないのは、彼はメートル数を稼ぐために記録更新に燃んだのではなく、人間の可能性をもとめて既存の潜水生理学へ挑戦したのである。記録はある意味で結果である。結果として、マイヨール氏は1983年に水深105mの大深度潜水の記録を残したのである³⁾。

しかし、105mというレコードを最後にマイヨール氏は、このではない記録の世界から身を引いた。このような世界にいる限り、やはり自己肯定、他者否定の論理から抜け出せないと感じたのであろうか。今や彼は自己に対する信心から他者への信心に移りつつあった。まず、イルカをはじめとする他の生物に思いが至るようになった。そしてまた、人類の歴史に想いをはせるようになった。とりわけ人類の築いた過去の歴史や伝説をたどることに、大いなる興味を示した。こうして彼の信心は、記録から記憶へと移っていく。

人類の失ってしまった古代の記憶。それをとりもどす旅が始まった。古代海底遺跡の調査である¹⁰。マイヨール氏は、従来の歴史学が単なる既成事実 (faits accomplis) の積み上げによることを指摘し、その限界を看破する。見える世界ではなく、見えない世界を想像することから真の学問は始まるはずだ。こうした既成の学問への不満と、自ら温めてきた歴史への興味が合わさって、人類が失いつつある古代の記憶とその伝説を探る旅が始まった。これが第三の段階である。そしてこの歴史の旅のきっかけは、マンソン・ヴァレンタインというひとりの研究者なのである¹¹。

2. 3 想像力による古代文明の解明

ヴァレンタイン博士はマイヨール氏の想像力をかきたてた。見える古代文明の存在へと心をはばたかせる。それは博士がその存在を信じるアトランティス大陸である。これはもともとプラトンの著作に登場する一種の西洋神話である¹²。理想国家アトランティスの実在をおわせる海底遺跡が大西洋のパハマ諸島海域に存在することを知り、マイヨール氏は兄ビエール¹³や導士とともに潜水調査に乗り出す。

近代科学が葬り去ったアトランティス神話を、マイヨール氏は想像力の助けを借りて再構築しようとする。これは近代論理に基づいた科学への挑戦でもある。その姿は、かつてのイギリス・ロマン派詩人ウイリアム・ブレイクと見事に重なるのである。ブレイクは当時の産業革命を支えた科学精神をまっこうから否定し、想像力によるビジョンでもって、詩の中にアトランティスの世界を構築する。その詩『アメリカ』はイギリスから独立するアメリカの姿をたたえたものだが、そこにアトランティス神話を博入する¹⁴。

ブレイクとマイヨール氏は想像力というキーワードをもとに、アトランティス神話の復活を夢見る。時代こそ違うが、近代が見失いつつあるものを取り戻そうとする点で、両者は共通する。マイヨール氏は近代人の欠点について、「いさきかわざらわしい「時間」と「空間」の概念にさまたげられ、しばしば「既成事実」の彼方を見つめることができないでいる」と指摘する¹⁵。しかし、彼は科学的根拠を全否定するわけではない。想像力の力を借りつつ、潜水調査によって客観的な証拠を探そうとする。そこがマイヨール氏が幻想詩人ブレイクと異なるところである。

しかし、マイヨール氏は言う。「われわれはみな、心の底にそれぞれの宝物や人魚、小さなピラミッドの幻影をひそめているものなのだ。いつの日にか、そんな幻影を実際に見つけ出す日は訪れるのだろうか。そもそもそうした幻影は本当に存在するのだろうか。そして、アトランティスは……？　だが、そんなことはどうでもいい。肝心なのは、エドガー・アラン・ポーが言っているように、果てしなく探して、探して、探しつづけることなのだ！」¹⁶

このアメリカ・ロマン派詩人ポーへの言及が暗示するように、マイヨール氏自身が現代に生きるいわば「詩人」なのであり、その想像力には目を見張るものがある。

3. つきつけられた肉体の証拠（今福龍太）

3. 1 肉体の証拠と近代スポーツ

さて、次なるシンポジスト今福龍太も、視覚情報への嫌悪を物語るエピソードを披露してくれた。それは、登山家マロリーの遺体発見ニュースにまつわる今福氏の体験である。1999年のことである。マロリー・アービング調査隊が結成され、ヒマラヤで消息を絶ち行方不明となっているマロリーとアービング2人の手掛かりを得ようと、エヴェレスト山中に分け入った。その活動状況はリアル・タイムで世界中のインターネットを通じて中継されていた。氏は興味深くこの様子を毎日ネット上で見守っていた。内心どうか2人の遺体が発見されないよう祈った。元来この調査隊は登山家の遺留品など、何らかの手掛かりを探すのが目的であったようだ。しかし、遺品どころかマロリー自身の遺体を見つけてしまった。今福氏は、インターネットの同時中継

などというメディアを通じて見たくなかったという。實際にはネット上に死体の写真は現れなかつたが、選体発見によって現実の証拠、つまり氏が「肉体の証拠」と呼ぶものが発見されたことは疑いのない事実である。こうして、我々の想像の中に存在していた登山家が、「肉体の証拠」となって視覚的暴力により暴露されてしまつたといえよう。

この「肉体の証拠」というキーワードをもとに、今福氏は近代スポーツの記号論を展開する。オリンピックに代表される近代スポーツは、その現場において肉体の証拠を競うに求めるシステムであり、健全な肉体の展示というイデオロギーに支配されているといふ。健全な肉体が躍動する現場を観衆に示すことで認められる。そういう意味で、スポーツ選手は強いエゴを凱示し、見る者を納得させる形で他者を打倒せねばならない。そこにはまた勝敗を決着させるため、観衆の誰もが納得する基準すなわちルールというものが必要になる。そして、その基準は公正さ (justice) を持たねばならない。これがフェア・プレイやスポーツマンシップという近代スポーツがつくりあげた制度というものであろう。そして、それに反する行為、すなわちドーピングが今回のシンポジウムでも大きな問題であった。

3. 2 ドーピング問題

私の考えでは、ドーピング問題のあらゆる矛盾は、肉体の証拠という視覚的なイデオロギーが、薬物摂取というスポーツの現場とは無関係の、見えざる世界の倫理を規定する、というおかしなところにある。これがそもそも自己達若の原因である。もし近代スポーツがその現場において肉体の証拠を競うに要求するならば、見えない世界すなわち現場外で行われる一切の行為は見逃してよいはずである。しかし、実際はそうではない。薬物使用者が勝利をおさめると、フェアでない、スポーツマンシップに反するといわれるのである。

今福氏はアメリカ・インディアンの儀式を例にあげ、いかに近代スポーツが異常なまでに敵視するドーピングが、未開民族の中でごく自然な行為として行われているかを示す。たとえば、メキシコのコーラ族の成人儀礼では、ペヨーテという幻覚作用をもつサボテンを食しながら三日三晩えんえんと走り続ける。ペヨーテのもたらすビジョンを感じながら、自己の内面を直

視しながら行われるこの儀式は、ほかでもない、他者に見せるものとしてではなく、自己の内面を見つめながら行われるという点で、ビジョナリーであるといえる¹⁴⁾。このように、この部族の場合、自己の潜在的能力を引き出す、高める目的でペヨーテという一種の薬物に依存するわけである。そして、この儀式が、他者のために見せる儀式でなく、あくまでも自己の内面を問題にしているから、ペヨーテを使用したからといって何ら問題はないのである。逆にいえば、近代スポーツは一見したところ外見本位の体裁をとりながらも、内面の問題を気にするという点において、前近代性をひきずっているといえるが、これこそドーピング問題の矛盾の根源ではなかろうか。

3. 3 田部重治の登山スタイル

ところで、今福氏は次に登山における証拠の問題を論じた。そもそも登山というスポーツは、肉体の証拠、すなわち視覚の倫理から免れた世界であった。登山は精神的、内面的行為であり、証拠などなくとも、人が山に登ったと申告すれば、それで周りは了解した。ところが、登山は近代スポーツの倫理に組みこまれる過程で、競争目的に行われ、証拠を求められるようになつた。ワインバーの『アルプス登攀記』の中で、イギリス隊がイタリア隊に先んじてマーターホルンに登頂したとき、下にいたイタリア隊めがけて故意に石を落させた事件がこれを象徴している¹⁵⁾。

写真が発明されれば、映像による証拠が求められる。こうして登山という内面的行為は近代倫理にからめとられていった。今福氏がいうように、「登頂こそが最大の目的で、自分が登頂した証拠をとてこないと意味がないという倫理で行われている」のが、いわゆるアルビニズム登山である。

しかしその一方で、日本には觀照という態度によって山と向き合つた…連の登山家たちがいたことを今福氏は指摘する。その中で今福氏は、特に田部重治¹⁶⁾に着目する。田部は登山の初期においてアルビニズムを実践したが、しだいに頂上ばかりを狙うことに対する疑問を抱くようになり、絶頂よりもむしろ深林¹⁷⁾や渓谷を歩く山旅のスタイルに傾いていった。

田部は幼少期は虚弱体質のため登山しなかつた。しかし、あるときふと登つた妙高登山を契機として、そ

の後は愚かれたように数々の山に登る。そのころは、山を征服の対象として考えていた。たとえば彼は「登山の真意義は非常な厳しい、効的な、多少冒険的な運動を以て行われなければならない」といって、「登山は絶頂に登る事に意義がある」とまで考えていた。登山は「自己」を中心であると言い、山は自己、自己は山であると考え、登山によって自己の発見をがむしゃらに行おうとした。つまり、この時期の登山はエゴに固執していたのであり、彼自身言うように「最も乱暴なものであった¹⁰」。

しかし、この考えは改まった。それは、「唯一の実在と考えてきた自分は、実はあらゆる人に、また普遍的な自己である」ことに気づいたからである¹¹。その後、田部は穏やかな登山を好むようになった。山の奥深く入り込んで、山との融合を目指すような気持ちになっていく。単に絶頂をきわめるのではなく、「山に登る欲求は山全体に対する趣味、すなわち渓谷、幽林すべてに対する鑑賞」を目的とする山旅に目覚めたのである¹²。これは自己本位から他者への関心、というひとつの移行であり、このような教訓を山から得たことについて田部は「私は一に山に宗教を見出しつつあるものである」という¹³。こういった登山プロセスを見ると、これはまさしくジャック・マイヨール氏のたどった過程と同じではなかろうか。

ところで、別の観点も見逃せない。つまり、田部のたどりついた想像力による登山ということである。初煙のアルビニズムから脱して、しだいに峰や渓谷、深林に興味が移っていった彼は、たとえば峰が「人里と人里を結ぶもの」であり、「峰に向こうの自然を考えると共に、そこの部落がどういう種類のものであろうか」ということを頭に浮べて胸をとどろかせる」といい、峰歩きの魅力を説いている¹⁴。

また、田部が好んだ渓谷や深林の魅力とは、すべてを見せないという点にある。岸本恵也は「あらわれたる不变と隠されたる変化、これが山岳と渓谷との本質の相違である」といいつ¹⁵、また「すべてがあらわな山岳よりも、何ものも表に示さない渓谷の方に、より深く心をひかれる人もあったであろう」という¹⁶。まさにその人こそ田部重治である。絶頂を極めようとする者は、近代においては記録が求められる。そういう点からすれば、田部の向かった登山スタイルは、そういう

う視覚的批評とは無縁である。そして、田部はジャック・マイヨール氏の説く想像力の重要性を、登山において見出した人であった¹⁷。

3. 4 外側の目、内側の目

さて、今福氏のあげた田部重治の登山スタイルは「観照」という態度であったが、今福氏によれば、それはビジョナリーという言葉で表現される。山に入つて、自らの内面的世界に深く没入する。それは幻視（ビジョン）体験というものをしばしば伴うわけで、想像力と深くかかわっている。そして、こうした内面的行為を外側から映像におさめようとするとどうなるか。今福氏は面白いエピソードを紹介してくれた。

やはりメキシコのコーラ族の話である。村で行われる祭で村人が三日三晩走り続ける様子を外国人写真家がカメラにおさめようとすると、カメラやフィルムを没収されるのではなく、一緒に祭の中に引きずりこまれ、村人と同じ体験を強制されるという。これは今福氏によれば、きわめて洗練された批判方法である。世界中の未開民族の中には、写真というものを極度に嫌うものが多い。その説明として、魂を抜かれることへの拒絶ということがよく言われる。だが今福氏によると、それはこの場合違う。この部族の場合、村人の内面的行為を部外者が外の世界から映像化したところで何がわかるのか、という疑念を背後にもった批判だという。この場合、走ることはビジョナリーな行為であり、それは参加しない人間にわかるはずがない。写真におさめれば余て知った気になり、内なる世界を知ろうとしない部外者。そのような人間によって「切り取られてしまう自分たちの像をいかに帳覆させるか」という問題であると、今福氏は話をしめくくった。

4. 新しい身体感覚を求めて（稻垣正浩）

4. 1 上昇志向から下降志向へ

20世紀は上昇志向のスポーツであったが、21世紀は下降志向でいきたい。こういう切り出しで稻垣正浩氏の話は始まった。たとえば、オリンピックなどの近代スポーツ競技は、自己の意識を高め、身体能力を高め、成績を高めるというように上昇のベクトルをもつ。しかし、人間の能力には限りがあるのであり、その限界を越えて無理な上昇を続けることが、ドーピングの問

題などに関わってくる。

そうではなく、下降するベクトルもあっていいのではないか。つまり、下降志向ということである。しかしながら、氏も認めるように、では下降とはどういう意味なのか、いくらなんでも下降という言葉は具合悪いだろう、という反論もあるという⁹。実際、スポーツは身体能力を活性化させる、つまり高めることを必然的に伴うのだから、下降という言葉では表現が正確ではない。しかし、氏はこのような思いきった概念装置を用いて、問題の所在を見やすくし、解決するひとつの戦略としたいという。

スポーツに限らず、我々は常に右肩上がりを期待し、また当然視する傾向がある。経済成長しかり、子供の学力成績しかり。上昇のあとには下降があり、下降のあとに上昇がある、という自然なリズムを忘れて、いつでも上昇志向にとらわれている。何事も努力訓練すれば全て向上し、いい結果のみが期待できるという妄信に陥ってはいないだろうか。

4. 2 エゴの否定

自己を高めようというのはエゴを意識することである。競争において自己を高めることは、必然的に他者の排除を含意する。稲垣氏は「自己否定の論理」という言葉を用いて、禅の思想でジャック・マイヨール氏の身体技法を説明しようとする。なぜ、マイヨール氏にあのような大深度潜水が可能なのか。それは、感覚のように、エゴを否定し、無の境地に近づこうとする下降志向的な身体技法を用いているからだと指摘する。また、エゴのないマイヨール氏だからこそ、イルカとのコミュニケーションが可能になったのだという。

自己と他者の関係について、稲垣氏はもうひとつの例をあげる。それは、フランス現代思想家のジャン・リュック・ナンシーの話である。彼女は心筋梗塞のために心臓移植の手術を受けたが、自己の心臓が摘出され、代わって他者の心臓が移植される。体が自己を主張するあまり、他者としての移植心臓を排除しようとする（つまり拒絶反応が起こる）と、もうその心臓は機能しなくなる。したがって、移植心臓を受け入れるには、免疫抑制剤を投与して免疫力をある程度落とさなければならない。ところがそうなると、今度は免疫力によって抑えられていた病気が発する。こうして体内で矛盾

が起こるわけだが、体が機能していくためには、とにかくこの相反するベクトルをうまく調和させる必要がある。

こうした自己と他者の折り合いという難しい問題を克服し、その妥協に成功した例がジャック・マイヨール氏の身体技法の中に見られるという。つまり、彼は下降志向と上昇志向との釣り合いの中で、人間のもつ潜在的能力を見事に引き出したのである¹⁰。

4. 3 視覚依存の身体感覚

ところで、稲垣氏は美術館での体験談を通して、近代的身体感覚を再構築する必要を説いた。氏の話では、ある美術館¹¹に建築家荒川修作氏の設計した空間があつて、その空間の中に入って行動を起こすと、よろめいたり転倒する仕掛けが巧みに施されている。詳しく言うと、「太陽」という名の小部屋の中に黄と黒の色調の円筒が垂直方向に斜めに傾いて立ち、その円筒内の狭い螺旋階段をあがっていくうちに平衡感覚がおかしくなる。階段を登りつめると、そこには水平方向に少し傾斜した直径 6 m の巨大円筒の空間があり、一步踏み出すとよろめいて転倒することもあるという。こうして言葉にしてもなかなか実感がわきにくいが、要するに、仕掛けられたトリックの中を進むうちに身体感覚がみごとに崩される、ということである。

荒川氏の言葉を借りて、稲垣氏は美術館での体験を通して感じたことを次のように表現する。すなわち、日常的につくられた身体感覚を持ちこむと我々は転ぶが、転ぶことによって人間はじめて自分を失う。しかし、転ぶことで新しい身体感覚が生まれる。我々人間が36億年かけて蓄積してきた身体の記憶を、もう一度よみがえらせる必要がある。こうして稲垣氏は身体の再建築を説くのだが、既成の身体感覚を壊しつつ新たな身体感覚をつくりあげるという概念は、デコンストラクションの考え方と深く共鳴するものであろう。そして、こうした意味での身体改造の中に、近代スポーツが抱えるさまざまな矛盾や限界を乗り越える鍵があるのでないか、という期待が込められている。

さて、今回の稲垣氏の美術館体験は、いかに我々の身体感覚が視覚に依存するものであるか、ということを考えさせる。つまり、稲垣氏がよろめいたり転倒したりした話は、視覚情報の集積に基づいた行動が破綻

をきたすという指摘もある。視覚に頼った行動がある時点でのもののみことに崩されてしまう。我々はまさにそのような近代的身体を所有するわけだが、思いきった言い方をすれば、これは西洋的身体といえるかもしれない。たとえば反対に東洋には、禅や氣という概念に代表されるような、視覚から離脱した知覚の世界がある。禅では目を閉じて瞑想に耽るが、これは視覚世界からの離脱である。あるいはまた、姿は見えないが「氣」を感じる、という表現があるように、「氣」も非視覚的な、内面的な知覚法である。こうした視覚に依存しない東洋的身体技法が、今後ますます注目されていくような気がする。今こそ視覚偏重社会からの脱却が必要であり、そこから新しい身体感覚を創造することが重要といえるだろう。

5. 結語

以上見てきたように、今回のシンポジウムでは、いかに我々が視覚偏重の文化に浸されているかということを指摘する結果となった。ジャック・マイヨール氏は、目に見えるものではなく、目に見えないものを想像力で補うことの重要性を指摘した。また今福龍太氏は、近代スポーツの隨要する「肉体の証拠」という概念を批判しつつ、目にみえざる世界の大切さを訴える。つまり、個人の内的世界を豊かにするスポーツ、いわゆるビジョナリー・スポーツの札纏である。相垣正浩氏は身体の構築の必要性を説いたが、それに関連する美術館での経験を通して、視覚偏重の身体感覚を暗に批判する形となった。こうしたことから、今回のシンポジウムに通底する問題は、視覚偏重文化への批判ということであった。そして、こうした現象はスポーツ文化に「偏在」するものではなく、ひろく人間の文化全般に「偏在」するものである。それゆえ、スポーツ文化を考えることは、とりもなおさず我々の生き方を考えることにつながっている。そういう意味で、今回のシンポジウムは、新世紀におけるスポーツ史研究の重要性をますます印象づける形となったと思う。

引用文献と注釈

- 1) 小説の冒頭は「宮主の頂角、広重の富士は八十度、文星の富士も八十四度くらい、(中略) けれども、実際の富士は鶴角も鶴角、のろくさと広がり……」(本草治「宮

城百景」(岩波文庫)(岩波書店、1957) p.50) となっている。

- 2) "Seeing is believing,"と俗に言う。ところで、証拠は英語で evidence というが、この語はラテン語の *vidēre* ("see") に由来する。文字通り、見れば証拠となる。
- 3) スポーツ史学会第14回大会組織委員会編「スポーツ史学会 第14回大会発表抄録集」(2000年11月) p.2
- 4) ここでの分類は著者による便宜的なものである。なお、マイヨール氏の詳しい伝記については、ジャック・マイヨール著(翔泳社編訳)『イルカと、海へ遊る日』(翔泳社、1993)を参照。
- 5) 1939年から1944年にかけての第2次世界大戦中に、主としてフランスでスピア・フィッシングに勤んだ。これは戦後も続き、1956年にアメリカのマイアミ水族館での仕事に赴任するまで続けられた。
- 6) クラウンはマイヨール氏がマイアミ水族館で出会った飼のイルカ。両者の感動的な出会いと関係は、前掲の『イルカと、海へ遊る日』に情感豊かに描かれている。イルカの行動や生態に影響を受けたマイヨール氏は、「ホモ・デルフィナス」、すなわちイルカ人間としての生き方の実践法を探っている。
- 7) 映画『グラン・ブルー』ではエンゾ・マイヨルカと記録を競う場面が強調して描かれており、ライバル同士の戦いという劇的印象を与える。もちろん、ライバル意識や競争心が若きマイヨール氏に皆無であったとは言い切れない。だが実際、マイヨール氏はこの大記録には徹底である。すなわち彼は「私に泳ぎを教え、呼吸法を教えて、水に溶けこむことを教えてくれたイルカのクラウン。クラウンがいなかったら、私は水深100メートルまで潜水できたろうか?」(『イルカと、海へ遊る日』 p.45) と言っている。
- 8) イルカと人間の共存を考えるマイヨール氏は、世界中の水族館で酷使され疲れきったイルカを収容し、療養して海に帰してやるために施設をサウス・ケイコス諸島につくっている。
- 9) 一連の海底遺跡調査の詳記については、ジャック・ビエール・マイヨール著『海の記憶を求めて』(翔泳社、1998) やジャック・マイヨール著『海の人々からの遺産』(翔泳社、1990) を参照。
- 10) マンソン・ヴァレンタイン博士(1902-1994)は前掲の『海の記憶を求めて』(p.6) の説明では「エール大学の古生物学者、生物学者、動物学者であり、フロリダのマイア

- ミ科学博物館の研究員であり、ダイバーであり、探検家」であり、またマイヨール氏のよき友人でもあった。マイヨール氏は博識のことを「既成事実の苟みを望むことのできるまれな科學者」として称賛している。
- 11) プラトンの『ティマイオス』や『クリティアス』に登場する神話。それによると、むかし大西洋上にアトランティス島があり、その國家は隆盛をきわめていたが、あるとき地震による大洪水によって飲み込まれてしまったという。一般に実在の可能性は薄いと考えられているが、マイヨール氏はその炎在を信じ、兄ピエール・マイヨール氏とともに調査を行っている。その詳報については「海の記憶を求めて」を参照。
- 12) マイヨール氏の兄ピエール・マイヨール氏は、歴史、先史時代の熱心な研究者。
- 13) William Blake (1757-1827)。イギリスの前期ロマン派を代表する詩人の一人。想像力による幻視的な(visionary)詩を多く書いた。アメリカの独立を注目深く見守り、「自由の歌」(1792) や『アメリカ』(1793)などの詩で、新生アメリカを讃美した。
- 14) 詩の一節「アルビオンは病んでいる! アメリカは気がくだけている」は、近代國家イギリスとそこから独立するアメリカを対照的に描きながら、後者の独立を讃美する。しかし詩中においてブレイクは、何處に挟まれた大西洋にアトランティス島を登場させ、両国を越える種族国家として描いている。
- 15) 「海の記憶を求めて」 p.3
- 16) 前掲書 p.53 を参照。なお、エドガー・アラン・ Poe (Edgar Allan Poe, 1809-1849) は『モルグ街の殺人』などを代表作とするアメリカ人推理作家として知られているが、またアメリカ・ロマン派の詩人でもあった。専門のとおり、我が國の推理作家である江戸川乱歩の名の由来である。
- 17) ベヨーテは「同名のサボテンの…種から精製した麻薬。古くからメキシコのインディアンや、北米南西部地方のインディアンの部族は、これによるヴィジョンにもとづく宗教を持っていた」(金岡寿夫『アメリカ・インディアンの口承詩』(平凡社, 2000) p.189) という。なお、本書には「ベヨーテの幻覚」や「ベヨーテの歌」と題するインディアンの口承詩が紹介されており、この植物が詩的ビジョンを与えるものとして、インディアンの崇拜対象であったことを示す。
- 18) イギリス隊がイタリア隊にさきがけてマッターホルンに登頂すると、眼下のイタリア隊に大声を飛ばして、自らの勝利を確認させようとする。しかし、声が届かないと知り、今度は石を故意に落石させる。信じられない話だが、登山の記録はかように執着されたのである。この様様については、エドワード・ワインパー著(新島義忠訳)『アルプス登攀記』(講談社, 1998) p.473 を参照。
- 19) 田部重治 (1884-1972) は日本の近代登山草創期のメンバーのひとり。秩父方面の山に強く惹かれ、登山よりも山旅という趣を奨めた。日本の自然美を代表するものとして、渓谷や深林の美しさを説いた。『日本アルプスと秩父巡礼』や『わが山旅五十年』などの山岳関係の著書がある。英文著者としても有名で、ペイターの研究者としても知られる。
- 20) 田部はしばしば森林ではなく深林と表記した。後者の方が日本の自然の特性をよくとらえているように思う。
- 21) 「山は如何に私に影響しつつあるか」(田部重治著・近藤信行編『山と渓谷』(岩波書店, 1993) p.30
- 22) 前掲書 p.31
- 23) 「山に入る心」前掲書 p.21
- 24) 「山は如何に私に影響しつつあるか」前掲書 p.33
- 25) 「塔あるき」前掲書 p.263
- 26) 島本恵也著『山旅文学序説』(みすず書房, 1986) p.112
- 27) 前掲書 p.126
- 28) ところで、そもそもこうした田部の登山スタイルは、田部の心酔した自然詩人ウィリアム・ソーズリスからの影響であることを言っておきたい。内省や瞑想というスタイルで自然に親しんだこの英圏ロマン派詩人は、想像力をもって自然に接した。肉眼で見る光景に詩的意味を見出すではなく、心の目、内なる目で見た世界にこそ意味があるとした、つまり、想像力というフィルターを通して、ひとつの詩的ビジョンを創造するわけだが、そういう点では、先に引用したウィリアム・ブレイクの世界に通じるものがある。ワーズワースは、視覚偏重の方向に時代が進んでいくことをよしとしなかった。産業革命開祖後の当時、科学の台頭がいちじるしかったが、科学の第一歩は観察に基づく客観分析である。その源流はイギリスにおいては、ニュートンを嚆矢とする自然科学であるが、この科学者の代表作品が『光学』であることからも、視覚とそれに基づく分析が科学の原点である。ワーズワースは科学における「分析」を嫌った。たとえば、彼の規範詩『虹』("My heart leaps up..." の一節で始まる通称 "The Rainbow" の詩) は

「幼い頃に虹を見て素直に感動した心をいつまでも持ち続けたい」というものだが、これはニュートンが『光学』の中で展開した虹のスペクトル分析に対するアンチ・テーゼであったことはよく知られている。ニュートンの極端観を描いたブレイクと同様に、ワーズワースは詩という形で近代科学の台頭に強い懸念を示した。また、別の長編詩『序曲』(The Prelude, 1805)においてワーズワースは、視覚が人間の他の感覚をおしのけて至福を独占することを「專制的」(despotic)とよんで警戒した。なお、ウイリアム・ワーズワースと田舎重治との影響関係については、多賀谷真吾「ワーズワースと田舎重治」[『藤井治彦教授退官記念論文集』(英宝社, 2000) pp. 391-402]を参照。またワーズワースの登山スタイルに関しては、多賀谷真吾「ワーズワースと登山——ヨーロッパ近代登山の夜明け前」[『スポーツ史学会稿』(スポーツ史研究) 11巻 (2001) pp. 15-24]を参照。

29) 稲垣氏の下障志向亂念についての詳紹は、福原正浩「『下障志向』のスポーツ論——『氣』をとおしてみえてくる新地平」[柴本芳明(研究代表者)『今なぜ「氣」なのか? ——「氣」アームのスポーツ史的意味を探る—』]

(平成6年度(財)水野スポーツ振興会助成金研究成果)
pp.101-106 を参照。

30) どこまで人間の体力が高められるか、という考え方に対して、どこまで体の機能を下げられるか、という発想がある。宗教における断食行為は、どこまで食物エネルギーを摂取せずに代謝機能を低下させられるか、そしてたどりついた境地でいかなるビジョナリーな体験をするか、ということではないか。そう考えれば、マイヨール氏の成功は、身体機能を下げるにとどって、相対的に持久力を高める、という行き方があらしたのではないだろうか。足し算だけではダメで、引き算の発想が必要なのである。

31) 岡山県泰義町にある奈義町現代美術館(Nagi Moca)のこと。館内に荒川格作+マドリン・ギンズ、岡崎和郎、宮島愛子の3組の作家による空間的作品が展示されている。蛇足ながら、私も椎垣氏の話に触発され、先日この美術館を訪れた。転倒こそしなかったが、強い視覚的錯覚を感じながら、不思議な身体感覚を体験したことを見記しておきたい。

スポーツ文化とクレオール

＜財団法人＞水野スポーツ振興会

2000年度 研究助成金 研究成果報告書

発 行 2001年3月

研究代表者 竹谷 和之（神戸市外国語大学）

印 刷 所 株セイエイ印刷

〒536-0016 大阪市城東区蒲生 2-10-33

☎06-6933-0621
